を得るなり。

**ブリッーメンバッハ**(Johannes-Friedrich Blumenbach)(1752—1840)はゴッチーに生る、醫士にして博物學者たる傍ら、動物學の根底は比較解剖學にありと信じ、人類人種を研究し、人頭骨の集覧に熱心なりしが、遂に人類に就きて單種五人種(コーカシア、モンゴリア、エシオピア、アメリカ、マライ)說を唱へたり、著書に人類の變種、比較生理學、博物敎科書、比較解剖敎科書、生理と病理、醫史の序、醫學文庫等あり。——卯生(千曾)

**形貌別**

**ドニケー**は毛髮に基づき皮色、身長、頭骨、顏形、鼻形等に據りて二十九人種(races)に分ち、之を七群、十人種と爲し、更に六派に總めたり。

A. 縮毛
- I. ボシェスマン人種 廣鼻、黃皮、短身、長頭。
- II. 黑色群 廣鼻黑皮
  - 帶紅褐、短身、中頭。 2. ネグリト(ネグリロ)
  - 長身、長頭。
    - 帶褐色、中身、長頭。 3. ネグロ(ニグリチアン、バヌツ)
    - 4. メラネシアン(パプア、メラネシアン)
    - 紅褐皮、狹鼻、長身、長頭。 5. エシオピアン
    - 赤褐皮、廣鼻、中身、長頭。 6. オーストラリアン
    - 黑褐皮、狹鼻、短身、長頭。 7. ドラビヂアン

B. 釣毛
- III. エシオピア人種 8. アッシロイド
- IV. オーストラリア人種 9. インドアフガン
- V. ドラビーダ人種 10. アラブ

C. 波毛
- VI. アッシロイド人種 褐皮、長身、長頭。
- VII. インドアフガン人種 褐皮、長身、鷲嘴鼻、楕圓顏。
- VIII. 北アフリカ群 黃褐皮、長身、直鼻、矩形顏。 11. ベルベル
- IX. 濃色群
  - 黑毛、白帶褐皮
    - 中身、中頭、卵形顏。 12. 沿海ヨーロッパ人
    - 短身、長頭、長顏。 13. イベリア半島人
  - 褐毛、白皮
    - 短身、極廣頭、圓顏。 14. 西ヨーロッパ人
    - 長身、廣頭、長顏。 15. アドリア人

D. 波直毛
- X. 淡色群 帶紅白皮
  - 波(直)毛、長身、長頭。 16. 北ヨーロッパ人
  - 直(波)毛、短身、亞廣頭。 17. 東ヨーロッパ人

E. 直波毛
- XI. アイヌ人種 帶黃皮、多毛、廣凸鼻、長頭。 18. アイヌ
- XII. オセアニア群 帶黃皮
  - 突鼻、長身、長顏。 19. ポリネシア人
  - 低鼻、短身、菱顏。 20. インドネシア人
  - 突鼻、短身、長頭。 21. 南アメリカ人

提要地理汎論 人類地理 人類の種別

F. 直毛

XIII. アメリカ群　帶黃皮　鷲嘴鼻　長身、中頭。
　　高鼻、頭身、廣頭。　短身、廣頭。
XIV. エスキモ人種　帶褐黃皮、短身、圓顏、長頭。
XV. ラップ人種　帶黃白皮、短身、廣頭。
XVI. ウラジア群　帶黃白皮、高鼻　短身、長頭、突顏。
　　中身、極廣頭。
XVII. モンゴリア人種　帶黃皮、蒙古眼、突顏。

ドニケー(Joseph Deniker, (1852— )はフランスの博物學者兼人類學者にして博物學館々員たり、地理、人類、土俗等に關する論文頗る多く、フランスの各學會に關する理學文書目錄(一八九七)、地球の人種、民族(一九〇〇)、等の著あり。

言語別　博言學に從へば言語に單音、連綴、變働の三式あるを以て之に依りて三人種を設き、各人種に就きて派、族、群の別を設けたり。

單音語人種(約四億一千萬人)は支那(約三億七千萬人)、チベット、印度支那の三



派に分かる。

連綴語人種(約三億八千萬人)は北アフリカの「サブァンヌ」に於ける黑人(約一億人)、アフリカの中央及び南部に於けるバンツー(約三千萬人)、ホッテントット派、オーストラリア族、ネグリト群、パプア群、マライ＝ポリネシア族(約三千萬人)、印度の南部に居るドラビーダ族(約五千萬人)、コラリア群、アジアの北部及び中央よりヨーロッパの一部に亘れるウラル＝アルタイ派(一億一千萬人)、コーカシア群、イベリア族等を包括せり、而してアメリカの土人(約一千萬人)は合成語と稱する特殊の連綴語を用ひて三群を爲せり。

變働語人種(約八億人)はアフリカの北部、アラビア、シリア、メソポタミアを占むるセム派(約三千萬人)、ハム派幷にセルト、ラテン群(フランス人、イタリア人、エスパニア人、ポルトガル人、ロマーニア人、等)(二億六千五百萬人)、ツートン群(ドイツ人、イギリス人、スカンヂナブ、等)(二億一千五百萬人)、スラブ群(ロシア人、ポル、チェヒ、スルブ、ブルガル、等)、アルメニア人、印度群(二億七千萬人)、イラーン群(二千六百萬人)、等より成れるヤヘツ派を包容せり。

## 提要地理汎論　人類地理　人類の種別

**マクスミュルレル** (Friedrich Max Müller) (1823—1900) はドイツの博言學者、東洋學者、神話學者なり、ライプチヒ大學に於てヘブライ、アラビア、サンスクリプトの各語を研究し二十歳を以て博士と成り、ベルリン（一八四四）、パリー（一八四五）に遊び、イギリスに赴き、オクスフォード大學に入りて博言、近世文學、比較文法の講座を擔當し（一八四八—七六）、爾來專ら著作に從事したり、著書極めて多く、文學に、印度學に、博言學に、神話學に、名著少なからず、就中「リグ・ヴェダ」(Rig-veda)、言語學講義（一八六一）、言語學新講義（一八六四）、神話學原理（一八九七）、等最も顯はれ、人類學上に貢獻せし所尠少ならず。

**自然別**　各種の人爲分類法を參照し、カートルファージュの所說を容れ、人類を單種とし、形貌に基づき、言語に據り、住域に考へ、風俗、文化、等を斟酌して、三人種、二副種を設けたるは所謂自然分類法に近きものと云ふべきか。

- I. 黒色人種
  - 西黒人
    - ニグリチア派（西、東、南）
    - バンツー派（西、東、南）
    - ネグリロ派
    - *ホッテントット＝ボシェスマン
  - （ネグリト派（北、南）
  - （東黒人）
    - *パプア派（マフル、アルフル）
    - *オーストラリア
- II. 黄色人種
  - 蒙古派（モンゴル、トルコ、ツングス）
  - 支那派（漢土、日鮮、チベット、印度支那）
  - 北方派（アメリカ、東シベリア、西シベリア）
  - フイン派（バルトフイン、ラップ、ボルガフイン、ペルミア、ウグリア）
  - 無所屬　アイヌ、トダ、コーカシアン、バスコ
- III. 白色人種
  - アーリア派
    - アジア部（ヒンド、イラーン）
    - ヨーロッパ部（ヘーレン、ラテン、ツートン、スラブ、セルト）
  - セム派（アラビア、シリア）
  - ハム派（ベルベリア、エシオピア、フラー＝サンデー）
- I. マライ副種
  - マライ派（マライ、タガル、ビサヤ、ビコル、等）
  - ポリネシア派（バタス、ダヤク、ブギ、等）

**提要地理況論　人類地理　人類の種別**　百五十一

副種
- II. アメリカ副種……
  - 北派（赤皮）
  - 中派（メキシコ）
  - 南派
    - アンデン、オリノコ＝アマゾニア
    - 東ブラジル、パンパ、フエゴ

## 辛、種族の記載

人類を分ちて黒色、黄色、白色の三人種（Races）即ち三幹（Troncs）と爲し之に添ふるにマライとアメリカとの二副種（Sous-races）を以てす、而して黒種は西黒人と東黒人との二部に別れ、甲部はネグリト、パプア、オーストラリアの三派を爲せり、黄種はモンゴル、トルコ、ツングスの三派より成れる蒙古派、漢土、日鮮、チベット、印度支那の四群より成れる支那派、アメリカ、東シベリア、西シベリアの三群より成れる北方派及びパルトフイン、ラップ、ボルガフイン、ペルミア、ウグリアの五群より成れるフイン派の四派に分かれ、白種はヤヘーツ、セム及びハムの三派より成りて、丙者はベルベリア、エシオピア、プラー＝サンデーの三群を含むに過ぎざるが、甲者は二部に分かれ、其のアジア部はヒンドとイラーンとの二群より成り、其のヨーロッパ部はヘーレン、ラテン、ツートトン、スラブ、セルトの五群を包括せり、又マライ副種に就きてはインドネシア、マライ、ポリネシアの三派を置き、アメリカ副種に就きては赤皮、メキシコ、アンデン、オリノコ＝アマゾニア、東ブラジル、パンパ、フエゴの七群を設けたり。

I. 黒色人種　本種（一億六千萬人）はアフリカ北部一帯のメラネシア、オーストラリア、アンダマン諸島、アジアの南岸、マライ群島、合衆國の南部等に居住せり、皮膚の黒色なるを特徴とすれども亦一樣なるに非ずして或は黄色を帶び或は赤色を交ゆるあり而して長頭、長顔、平背、窪眼、廣鼻、大口、厚唇、突顎等を以て本種の通有性と認められる、別れて二部を爲し、西黒人はアフリカ及びアメリカに住み、東黒人はアジア及びオセアニアに棲めるが、甲者に頭髪の捲縮せるを覩、乙者に直毛若しくは漉毛を覩るなり。

(a) 西黒人（Nègres africains）即ちアフリカ黒人（Nègres africains）はアフリカの最

要部に居を占め稠密なる處も少なからず然れども他人種を混じたる跡顯著にして充分なる種別を爲すこと困難なり、大別して三派と爲す。

(一)ニグリチア派　本派(Nigritie)は黒大陸の中部即ちスーダンの地(ニール河畔よりセネガルに至る北緯十九度以南の地)を占めて員數(九千萬人)最も多く、アフリカの黒人と云へば本派を想起す、皮膚は黒しと概言すれども帶赤、帶藍、眞黒等あり、身丈高く、頭骨長く、髮は黒くして或は縮緬的或は羊毛的なり、髭は少なく額は突出し、顴骨秀いで、四肢長く脚整著しからず、本派を更に分ちて東方、中央、西方、沿岸(ギニア)の四群と爲すが、最も純粹なるものはコルドファンのゴディアト(Godiat)、下シァリ河の左岸に於けるケリビナ(Keribinas)、チァーデ湖畔のハウッサ(Haoussa)等稍、名を知らる、而して東アフリカには元來の黒色人と他の侵入人との混和せるありてアラビア的侵入の結果はニッピア人、アビシニア人、ガルラ人等と成り、マライ的侵入はマダガスカルのホヴァス(Hovas)、サカラヴ(Sakalaves)を生せり、此等の外來人はアフリカの中部、西部に

ザンカ

も其の跡を認むるも顯著ならず。

ザンカは白ニールの兩岸に住みて幾多の小部族を包括して雜黒人(Négrailles)に屬せり、殊に奇とすべきは匠、河水の氾濫する地に住めるを以てナルーク、ヌエール(Nouers)等と同樣に脚細く長く蹠廣く平にして泥土の中を歩むときは恰も鷺の如し、由て渉水人(échassiers)と稱せらる、女子は皮製小形の前掛を着用するも男子は赤裸々なるを以はず、牧業を營みて山羊を飼育せざるに非ざるも、畜牛最も多く、盛に利用せられ、從て牝牛を崇敬すること深く之に神事するに至ると云ふ。

(二)バンツー派　言語の同系なるに依りて組成せられたる本派は體形上差異の著しき若干の民族、部族を包括し、分れて東、西、南の三群を爲せるが、此等民族の本源に溯らば一般の黒式に對して大差なかりしものなるべきも。南はホッテントット、ボシェスマンに隣り、北はネグリロ及びエシオピアンに接して漸次に混和して各種の變態を生せし者なるべし、而して此の原種をニグリチア派の黒人に比するに體軀稍、小さく、頭骨稍、短く、顎骨の突出少なく、額廣く鼻狹くして低からず、皮膚は青銅色を呈し、腦量の多きより見るも進化の跡歷々たり、西群は沿海部と內陸部とに分かれ、東群は新舊の二部を爲せる

が、南群は東のカッフル及びズールー中のベチュアナ、西のヘレロ(Her. ro)即ちダマラ(Damara)等より成れり。

カッフル (Cafres) 西洋人が與へし稱呼

アマコサス (Amakosas)、ズールー (Zoulous)、フィンゴ (Fingos)、等の若干の部族より成れり、皮色黒く、毛髪は羊毛狀を呈するも、鼻形好く、體格秀で、形相姿勢に優れたる所あるのみならず、智力豊に、文化にも見るべきものあり、牧業を主とし牛、山羊、綿羊、馬、等を飼育するも栽培は黍、菜豆、煙草、等を與ふるに過ぎず、被服は簡にして男子は牛皮製の肩衣を用ふるのみなるも女子は皮若しくは布にて作りたるものを腰衣及び袴の如くに用ふ、牧畜を少年に委ね耕種を女子に任かすを常例とし、男子殊に壯年者は狩獵兵事に當りて、尚武の風を爲し、投鎗、棍棒、大楯は從來彼等得意の武器なりき、茅舍は始原的にして圓錐形を呈し、入口は烟突竝戸を兼れ、村落部落には世襲の酋長ありてイギリスと戰ひし際には統領を戴きたり、又信仰に關しては思想極めて單純にして造化の妙、自然の機を支配する神人の存するありと爲すも物體又は偶像を崇拜することなきが如し、要するに本種族は黒種中の優式に屬し半開以上の民と認むるに憚からざるなり。

(三)ネグリロ派 本派はネグリロ (Négrillo) 小黒人の義 即ち俾濘 (Pygmées) を總稱せるが、身丈の低きを以て世に知られ、平均は百四十一糎なるも種族に依りては百三十糎に下だり、廣頭を有せるもの多く、皮色は黒褐にして赤色を帶ぶ、大黒人に屈服して意氣昂がらざるも性温良にして狩獵に巧なりと云ふ、ギニア派より古き住民たる本派は二ッに分かれ、其の一は西スーダン、北ギニアに棲み、其の二は幾何かの小群を爲してガボンより大陸の中部 大湖の西に於ける赤道下の大森林中、南北の三度及び四度の間 に散居せり。

以上の三派の外に黒種に因みありて異趣を呈せるホッテントット及びボシェスマンあり、ボシェスマンはアフリカ最舊の住民にしてホッテントット幷にカッフルの爲に常に苦められしが、現時にありてはカラハリ沙漠の西方、ナマランドの瘠地に住めり、ホッテントットは稍前者に優れりと雖、他の黒人に比すれば甚しく劣れり、往時は住域も廣く勢力も强かりしならんもカッフルの侵入以來漸次に衰へて今日に至れるが、カッフルとの雜種少なからず、南アフリカの南西部に住せり。

ボシェスマン

ボシェスマン (Bosjesmans)(オランダ語にては「ボッシ」(Bosch)は森林にして「ボッシェ」(Bosje)は叢なり、當該地方には森林なきを以て「ボッシェスマン」(叢雜人)と云ふを可とす)はフランス

ホッテントット

ス人のボッシメン(Bosc.imans)、イギリス人のバッシメン(Bushmen)にしてホッテントットのサン(San)又はサアンクア(Saan Cua)、カフルのアバッア(Abatua)なり、アフリカ洲の最劣の種族とす、體軀は矮小(男一米突三七、女一米突二二)にして外觀頗る醜劣なり、皮膚は汚黄色を呈し、亞長頭、菱形顏、突顎、黒髪、鼻廣く、唇厚く、眼小さく虹彩は褐色なり、殊に肉附の異常なるが爲め皮弛み皺多く恰も老衰者の如き觀を呈し、女子は「ステアトピジー」(Steatopygie)(臀脂の異常に發育せるを云ふ)を以て知らる、性慵惰にして所有貯蓄の念に乏しく多妻主義行はれ、親子夫妻の關係の如きは極めて疎なり、各處に散居漂遊して殆ど部落を爲すことなし、智力極めて鈍く生業の道に暗く、僅に自然的弓矢を用ひて「アンテロペ」「クアッガ」等の野獣を獵獲するを常とし、稀には山羊を伴ふことあり、草根蟲類を食ふを厭はざるのみならず、暴食絶食なお意とせず、殺害申に穴を掘り、樹枝樹葉を以て屋被を作り降雨の際には羊皮を補用することあり、身は皮片に依りて僅に腰部若しくは陰部を蔽ふに過ぎざるも、頭髪に羽毛又は骨片を結び附けて裝飾と爲せり、實にボシエスマンは人類の最下級を占むるものなるに相違なきも亦岩石の表面に戰況、獵狀などを描出刻成して美術的觀念の皆無ならざるを表示せり。

**ホッテントット**(Hottentots)はホイホイ(Khoi-khoi)又はクアクア(Qua-qua)と稱する一派に屬す、往時は十六種族の一たりしが、現今はホッテントット以外にはナマクア(Namaquas)、コラナ(Koranas)を存するに過ぎず、身長中位、皮色汚黄、眼骨斜にして顴骨秀で、殊に縮

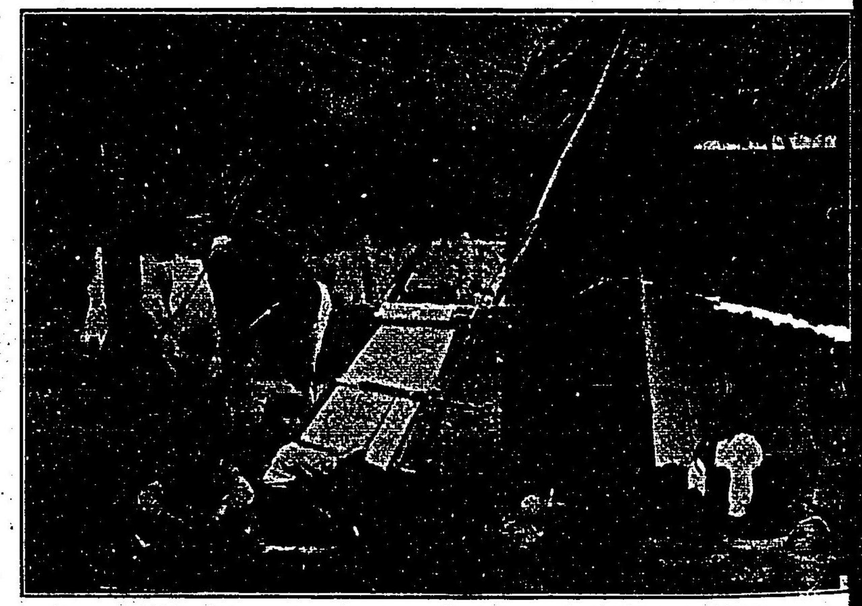


髪、廣鼻、厚唇、突顎を呈して黒種との類縁を示せり、牛又は羊の皮を用ひて身を覆ひ、頸環、耳環、帶を作りて身を飾り、女子は獸脂に色を附けて顏面に塗れるが、男女とも不潔にして奇臭を放てり、牧畜を主として牛、綿羊、山羊を飼育し、鋼器、鐵器を製す、多妻主義は行はるるも第一婦人は特權を有せり。

**(b)東黒人**(Nègres orientaux)はアンダマン諸島、マラッカ半島、マライ群島、オーストラリア等に棲めり、分ちて三派と爲す。

**(一)ネグリト派**　本派(Négritos)はパプアシア、マライ群島、マラッカ半島、アンダマン諸島、ヒマラヤ山脈の南面、印度の內部等に散居せるが、往時の住域は廣大にしてアジアの南東部に亘りしものの如し、來侵者の爲に追はれ山地、離島等に逃れてルソン島のアエタ(Aetas)、アンダマン諸島のミンコピー(Mincopie)、マラッカ半島のサカイイ(Sakaïs)及びスマング(Semangs)等を存するのみ、身長は一四五糎に達すること稀にして球頭、凸額、圓眼、突顎、黒皮、縮髪を有せり、狩獵を主とするも、アエタは耕種を勤め、ミンコピーは土器を製す、智識の度極めて低くミンコピーの如きは計數上、一と二との二を知るのみなるも、道義的念慮には稱すべき點少なからずして所有權を重じ、情誼に厚しと云ふ。

アエタ (Actus) [フィリッピン]



アラウカン (Indics Araucanos) [南アメリカ]

アエタ (Aetas) (約一萬人)はネグリト派の中にて最も純粋なるものと認めらるフィリッピン群島最古の住民にしてルソン及びミンダナオの僻地に棲めるが、密林中に潜みて外人に接するを厭ひ弓矢に依りて獵獲を試み、艸根木實を拾ひて食物に充て、又藥料に供すべき植物を採取して交換の資に供せり、智力鈍く殊に計數に拙きは亦野蠻の一特徴なるが所有親族に就きては多少の觀念ありて酋長を戴き一夫一婦の道を守り、數化の下には玉蜀黍粟を種ゆるを覺えて部落を爲すに至れるあり。

本派の身長は平均一三八糎にしてネグリロに比して稍低く、アジアの最古き時代には舊大陸の大部分に住居せしものと推斷せらる。

(二)パプア派　本派は東黑人中の最要なるものにしてパプアシアを始め多くの島嶼に分住し、二ッの亞派に分かる。

パプア (Papua) 亞派はパプアシアを主とし、マライ群島の一部に住めるが、丈高く皮膚黑くして多少褐色を帶び、黑色の髮と鬚とは縮れて波生し、而して一見雄悍の感を與ふるは廣顏坦額、肩骨秀いて眼凹み、鼻大唇厚、顎骨亦凸

出せるに由るならん。

パプアは性大膽にして恰悧ならざるに非ざるも島中に孤立せしが爲の文化は進まざりき、被服は腰部若しくは陰部に樹皮、介殻を纏ふに過ぎずして北岸の或地方にては男女共に赤裸なりと云ふ、然れども諸種の色を身體に塗抹し切解的文身を施し又は牙介羽毛を以て耳環、頸環に製し鼻、胸、脛、等の裝飾を爲すあり、殊に若き男子は毛髮に特別の注意を拂ひて奇異なる毛冠を戴けるが如き觀を呈す、食物は「セゴ」、魚類を主とするも豚、犬、小禽、昆蟲、等も用ひられ、人肉を啖ふの風は一般に行はるるに非ざるも敵を捕へ又は殺したる際は此の限に非ずと知るべし、住居に就きては北岸には杙上に設けたる茅屋の存するあるも南西岸には枝條にて作りたる小屋を覗るに過ぎず、又樹上に巢の如きものを作りて棲めるもありと云ふ。

メラネシア(Melanesia)亞派、はサロモン、新ヘブライヅ、新カレドニア、等に棲めるが頭骨狹く、顏面廣く、鼻は反戻し、頰骨秀で、眉骨、顎骨は兆れも突出し、皮色は濃厚ならずして頭髮は縮緬的なるも稀には長くして濃く波狀を呈し、身長は著しく一八〇糎以上に達することあり。

(三)オーストラリア派　本派が人類中の最下級を爲せるは事實なるべきも、廣大なる地域即ちオーストラリア大陸の周邊に散在して一百內外の部落

を爲せる彼等は居住地の情態に依りて變差を生せしは當然の次第にして
所地又は不毛地にあるものは少數にして神身共に劣等なるも、肥沃の地に
あるものは比較的多數にして體格が强壯なるのみならず、思想にも多少の
發達あるを認むべし、北西岸に棲めるものにはマライ人の混和を受けて皮
色淡く、毛髮滑なるありて、北東岸に於てはパプアの影響の下に濃色縮髮を
呈せるが、內部に生存するものは殊に本質を支持するが如し、然れども體軀
は一樣ならずして北部に稍小さく、南部は中位にあるも、中部は大にして百
八十糎に達するものあり、毛髮は密生し、色黑く滑にして時に小波狀を呈せ
るは、アフリカの黑人に比し、本派の特徵と爲すべきものなるが、頭骨甚だ長く、
額低く後に退り、眉骨秀で、目は大きく、虹彩、眉毛共に黑く、鼻は短くして低く
幅廣く、口大きく、唇厚く前に出で、齒白く美しく、頰凹み下顎骨短きも甚しく
突出せり、四肢は細く長きも脛短く、足裏平たく、皮色は黑からず、寧ろ濃褐色に
して赤味を帶ぶと云ふべし、殊に男子には鬚髯、肌毛共に多し、性質に關して
は旅行者、實驗者に依り寫述樣々なるも、智能の程度低く、識別力を缺き魯鈍
惰惰にして後事を慮らずと爲すに一致せるが、計數の念に乏しきには實に
奇とすべきものありて三又は四まで算し得るを常とし、六まで算し得るも
の計數上の大家なるべし、言語に就きては方言土語の夥しきに拘らず、同一
系統の下に屬するは慥にして多音式なるも現存せる他の言語とは毫末の
關係なしと認めらる。

本派も亦他の劣等種族と運命を異にするを得ざるにや、人口は次第に減
少しつつあり、計上の當否は判然せざるも兎に角ヨーロッパ人がオーストラ
リアに到着せし頃には三十萬人、少なくも二十萬人と稱せられしに、五萬五
千人(一八五一)、三萬一千人(一八八一)等を經て一八九一年には六萬足らずあ
りと註せられしに拘らず、一九〇一年には急降して二萬一千五百人と成り
しは概算法に差異あるに由るなるべし。

**II 黃色人種** 本種(五億六千萬人)は一に蒙古(モンゴリア)人種と稱せらる、
其の員數は顯著にして世界總人口の三割五分に當れりと云ふ、住域はアジ
アを主とし、其の東部より南東の方、マライ群島に到り、北部及び西部に逢し、

ヨーロッパの北部幷に東部に侵入し、他の人種に混じてはオセアニア、アメリカ等にも亘れり、體軀は大ならずして平均に達せざるもの多く、皮膚は概ね淡褐色を呈し、黄色を帶ぶるが、中には褐色或は黒色なるものあり又殆ど白色なるものあり、頭丸く顔は卵形にして幅廣く、眼は所謂モンゴル眼なるが鼻は中鼻にして高からず、顴骨秀いで口は稍大にして唇薄からず、顎短く耳大なり、髪長く太くして剛直、其の斷面は圓形を呈し、色は黒きを通常とす、本種を分ちて蒙古(モンゴリア)、支那、北方、フィンの四派と爲す。

(ハ)蒙古派は蒙古(モンゴリア)、東シベリアの要部、滿洲、朝鮮、北漢幷にヨーロッパの一部を占む、廣頭にして顔面は圓形又は卵形を呈し、顴骨秀いで、鼻は直にして狹く、斜眼を有せり、分れてモンゴル、トルコ、ツングスの三群を爲す、總員は三千八百萬人に過ぎず、

(一)モンゴル群即ち蒙古本群は黄色人種の外觀的特徴に關する標準なるも、アジアの中部に散居して總員は約五百萬人あるに過ぎざるが如し、ハルハ(喀爾喀)(Khalkhas)カルムク、ブリアト、ハザーレーの四部に分たる、其のハルハ(喀爾喀)族はツ

族は本群中の最要なるものにして外蒙古に於ては游牧に從事し、内蒙古にありては漢人と混淆せるもの多し、其のカルムク(加爾瑪克)(Kalmouks)族はゾンガル(準噶爾)、ホシオット(和碩特)、トルゴット(土爾扈特)、デルベート(杜爾伯特)等を含みて蒙古の西部及び南西部より、ヨーロッパの東部に散居せり、其のブーリアト(Bouriates)はバイカル湖畔に住み、其のハザーレー(Hazáreh)はアイマーク(Aimâks)と共にアフガニスタンのヘラットの南東に居れり。

(二)トルコ群は一にタタル(Tatars)群と稱せらる、アジアの西部幷にヨーロッパの一部に居を占め、東部のヤクーツ、ウイグル、中部のキルギス、キプチャク、ウズベク、西部のトルコマン、オスマンリ、等を包括せり。

ヤクート(Yakoutes)(約二十萬人)は東部トルコの一種族にして東シベリアに住む、純血のヤクートは中軀、淡黄、黒剛髪、短頭、不顔、秀額、低鼻、等の特徴を呈す、獵牧に從事し、各處に漂遊し、技藝に巧なるが好みて商業を營む、陽に基督教を信ずるも實際は一シャマン」の信徒たり。

キルギス(Kirghiz)(自稱のカザク(Kazaks)より訛傳せしならん)(約三百萬人)は中部トルコに屬し、シベリアの南西部より西はヨーロッパロシアの東部、東は、

清國の新疆省、南はパミルに至る地域に住み、カラキルギス(Kara-kirghiz)(黒キルギス)にして野蕃キルギスの意)とカザク(Kazaks)とに分かる、身長中位、皮膚褐色、毛髪剛黒、短頭廣顔、秀顴、斜眼、等を特徴とすれども雑種少なからず、牛馬、綿羊、山羊、駱駝を飼育するを主業と爲すが故に水草を逐ひて各處に遊移し、「キビトカ」(Kibitka)(木骨氈張の幕屋)に住みて「アウル」(Aul)(部落の意)を爲し「ハン」(Khan)を酋長に戴けり、耕種は貧者の行ふ所にして製作は至りて不振なり。

**ウスベク**(Uzbeks)も亦中央トルコに屬し、タジック(Tadjiks)の血液を交えたるが、中央アジアのフェルガナ、ヒバ、ブハラ、等に住み遊牧を事とせり。

**トルコマン**(Turkomans, Turkmènes)(約百二十萬人)は西部トルコに屬し、小アジアよりペルシアに至るの地に住む、分れて十有餘の小群を爲せるも、トルコ群中の粋にして代表者と認めらる、身丈高く、丸頭、廣顔、秀顴、短鼻、眼は蒙古的にして唇厚からず、皮膚は黄色を帶び、髪は太くして黒く、鬚甚少なし、牧畜を主とし移轉に便なる小屋中に起居せり。

**タタル**(Tatars)は成吉汗及び帖木耳の配下にありて偉大の活動を爲せしも、爾來衰へてアルタイ、シベリア(以上シベリア小群)、コーカシア(同名の小群)、カザン、アストラハン、クリミア、リトアニア、ポルスカ(以上ヨーロッパロシア小群)、等に住みて農商工の各業に從事し回々教を奉じ、西洋服を着用せるもの多し。

**オスマンリ**(Osmanlis)即ちオットマン(Ottomans)は西紀第十二三世期頃にはカイカールの一部たりしが、セルジュキド(Seldjoukides)の如く西漸して小アジアに來り、ギリシア及びセルビアの婦人を娶りて遂に今日の如きヨーロッパ的のトルコ人とは成りたるなり、

**ヂアーツ**(Djats)(約三千萬人)はアーリアの到着以前に於て北西門より印度に來侵したるトルコ的種族なり、體軀大きく發達好く形相活潑にして怜悧なり、狹鼻は端末に於て反屈し又鷲嘴狀を呈せり、眼小さく平に、顴骨稍高く、黒髪は滑に豊、鬚細く少なく軍人シーフ(Sikh)は本種の好標本たり。

**(三)ツングス**族は東シベリアより滿洲に亘れる地域に住み、體軀中位にして皮膚黄色帶赭、顔面圓く、額廣く平に、顴骨秀で、毛髪粗くして黒し、性驍勇にして騎射を好み、古より女眞、渤海、金、清、等の名の下に近隣諸國を征服したり、然れども獵漁と牧畜との外、他の生業を營むもの少なきが如し、沿海、北部及び南部に分たる。

沿海通古斯即ちラムート(Lamoutes)は東シベリアの沿海地に住みて漁業に從事す、三千人内外を算するに過ぎざるが性極めて淳朴なりと云ふ。

北通古斯のマネグル「瑪涅克爾」(Manégres)はアマラの下流、アムルアマラ間の地に居り、オロチオン「鄂倫春」(Orotchones)はチルクナ河の四、北西滿洲に居住せるが、共に狩獵

に長ぜり。

南通古斯のダウル(達湖爾)(Daurs)は嫩江の流域、其の他の地に散居し、ソロン(索倫)(Solons)は各地に住めるが最も著しきは滿洲人(Mandchous)なり、丈高く(一六九糎)、球頭秀顱、短鼻、黃皮、毛髮黑くして粗剛、鬚髯多からず、北滿洲に散在し又は旗兵として漢土に住めるも言語、風俗、習慣等は漢人に化せられ農牧に從事するものあるに至れり、總員未詳なり。

(b)支那派は黃色人種の最要部に當れり、蓋し文化上最優等たる種族を含むのみならず、員數(五億餘)に於ても殆と本種全部を占むるが故なり、住域はアジアの東部より中部に達し南部に亘り、分かれて漢土、日鮮、西藏、印度支部の四群を爲せり。

(一)漢土群(三億六千萬人)は漢人、福老、客家等より成れり、就中漢人は古來開明の域に達して、東洋文化の根底を爲せるが、漢土に來侵せし以來苗族、其の他の先住者の血液を交えたるのみならず、風土の影響を蒙りたるを以て純粹なる原種は目擊し難く、北漢人は南漢人に比し身長劣り皮色薄きが如き差異あるも概ね體軀は平均(一六三糎)より下位にありて皮色にも黃、白、褐等樣



々あり、頭髮は太くして長く黑色を呈し、鬚少なく、頭骨稍長く、眼小さく、鼻短く顴骨秀で顎骨も少しく突進せり、住域は漢土を主とすれども北は蒙古、滿洲新疆に達し、南はマライ群島に到り、西はチベット方面に及べるが、海外に亘りてオセアニア、アメリカ、アフリカ等の各處を含めり、客家(四〇〇萬人)は廣東省の北部を本據とし勤勉を以て聞ゆ、世に苦力と稱するものは多く此の客家より出づると云ふ、福老(三〇〇萬人)は福建省方面に多し、好みて沿海の地に住めり。

漢人は智力に富み若實にして堅忍なる、勤勉にして儉樸なる、實に天下無比なり、而も事物に對し輕侮尊重の差著しく、文藝を仰ぎて理學を疎じ、耕種を勵みて採鑛を顧みず、尊大に過ぎ慈愼に拘泥して進化發明せんとするの念慮に缺くる所あるが如し而して衣食住は高度の發展を爲し居りて娛樂と便利とを併有せる生活を爲し、物質的開化の方面には案外進歩せるものあり、衣服は官服、便服總べて滿制に依り、一般に上衣と下裳とに分かれ、履には靴鞋の兩樣あり、男子は辮髮し女子は蹇足を貴び、手爪の長きを美とするの奇風あり、飮食は頗る發達し地方に依りて稻米、粟、燕麥、蕎麥、高粱等の孰れかを主食物とし蔬菜、肉類等を副へ所謂山海の珍味を好み、調理極めて精妙にして多く油脂を用ふるが、阿片を喫するの惡習は漸次に減少する

ものの如し、家屋には瓦屋、木屋、土屋、等ありて衛生利便には缺くる所あるべきも亦親族の集居團聚たるには頗る適せりと云ふ。

(二)日鮮群(約六千萬人)は大和種族及び朝鮮種族より成りて外觀は漢人に酷似すれども言語、氣質、擧動、風俗、等に就きては著しき差異の存するあるを認む、アジアの沿岸島嶼の要部幷に高麗半島に居住せり。

大和民族(約五千萬人)は混成種族たるは事實なるべきも、先住者たる土蜘蛛、蝦夷等にインドネシア的の熊襲(隼人)幷にモンゴリア的の大陸人を交えたるものなりとするの當否に就きては未だ確說あるを聞かず、然れども混成狀態の均一ならざるにや、外觀上、外人の所謂優式(Type fin)及び粗式(Type grossier)の存するありて甲者には卵形の顏面に、眼口整ひ、直鼻稍高く、皮膚は色白く若しくは淡く「オリーブ」色を帶び、體軀平均以下なり、乙者には球頭、廣顏、斜眼、秀額、等を呈し、體軀は重厚の感を與へ、皮膚は濃色を有せり。

朝鮮種族(約一千萬人)にも混成の跡明にして北來南入の數種より成りて扶餘、秣鞨、濊、濊貊、大和、等の各種の血脈を混有すと認めらるるも、蓋し上流人士には額廣く鼻梁秀でたるもの多く、下等社會幷に北方の人には鼻柱低く額狹きを主とするが如き差異の存するに依りて知らるべし。

大和民族

朝鮮種族

(三)チベット雜(約六千萬人)はヒマラヤとドラービダとの二部に分かる。

甲部はボド(Boti)、レプチアス(Lepcias)、マンツェ(檀子)(Mantze)、シーファン(西蕃)(Si-fan)、タングート(西夏)(Tangoutes)、等より成りて外觀上頗る錯綜せるも體軀の小にして而も强壯なる、顏面の廣くして平なるは通性なりとす、高原の瘠地に棲めるものは矇昧にして可憐の生活を營めるが、其の他の地に於けるものには牧業に從事して娛樂多く世を過ごし、中には讀書に耽けるものありと云ふ、多妻、多夫の奇習行はる。

蠻子は四川省の山地に居住し、チベット的の家屋を構へ、耕種紡織に從事す、特殊の文字を用ふ。

西蕃は四川省の北東隅に居を占む、獸皮を着し、亂髮を蓄り、外觀は蠻風を脫せざれども性質溫良にして可憐の小民族たり。

乙部は黃人に黑人を交えたるを前種とし更に之に黃人を加へたるものを後種と爲せるが、他の種族の來移ありし爲め漸次に南移して印度半島の南部幷にセイラン島に限らるるに至りしも、尙ほ其の數は四千萬內外に達すと云ふ、前者にビル(Bhils)、コール(Kols)、ソンタル(Sonthals)、等ありて後者に

ヒマラヤ

ドラービダ

テルグ(Telugu)、タムル(Tamul)、カナラ(Kanara)等あり。

(四)印度支那群(約五千萬人)は舊時の黄人に漢族、ドラービダ族、マライ人の血液を交えたる數多の混成種族を包含し、外觀上差異の存するあるを認め得るのみならず、文化の上に於ても支那的(アンナム人)あり、又眞に印度支那的(シァム人)なるあり。

フメル種族

安南種族

タイ種族

フメル(印度支那)種族、安南種族、タイ種族

安南種族は一に交趾種族と稱せられ、トンキン、アンナム、コシェンシーヌ等に居住す、體軀は概ね倭小にして髮黒く、方面にして鼻低く、彩虹は褐色を呈し、四肢は調和を欠けり。

タイ(Thai)種族はシァム(暹)人、ラオス(老撾)人、シァン(掌)人、苗子、カレイン、タライン等より成れるが、最要なるはシァム人なり、身長短く四肢の比例宜しきを得、皮色淡褐にして赤味若しくは「オリーブ」色を帶ぶ、ラオスより出でて風俗習慣に於て印度的の感化を受け法律制度に於て支那的なる所あり。

フメル(Khmer)種族は一にクメルと稱せらる、先住者たるクイ(Kui)と優秀なる印度人との混成なり。



バルマ種族

苗族

バルマ種族は一にミャンマ(Myamma)種族と云ふ、恒河地方の原産なりと自稱して印度的の言語を用ふれども外觀は支那的なり。

ラハイン(Rakhain)はアラカンの平地に住む、バルマ人に比し身長低く、皮色黒くして連綴語を用ふ。

苗族は南蠻子、苗子とも云ふ、漢土の南西部に亘りて散居せり、體軀稍小さく、骨格堅固、體質強壯、牛眼突鼻にして形相醜からず、慓悍にして掠奪殺戮を事とすと稱せらるるも或は誇大に失するの疑あり、男子は獵牧、耕種に從事し女子は紡織に務む、交際を厭ひ、飲酒に耽ける半開の民たるの外、特に記すべきことなし。

(c)北方派はアジアの北部よりアメリカの北部に亘れる寒冷の地に居住する若干の種族を包含す、一説には本派に併はせてウグリア＝シベリア(Ougria-siberia)派と稱することあり、分れてアメリカ、東シベリア、西シベリアの三群を爲せり。

(一)アメリカ群即ちエスキモー(Eskimo)群は若干の小群を爲せるが、其のインヌイト(Inuit)約三萬人はグリーンランド、バッフィンランド、ラブラドルの北部及び西部、ハドソン灣の沿岸及び島嶼、北極圏以北のアメリカの海岸地、等に居住せ

り、軀短く（男一六二糎、女一五二糎）骨太く、皮色淡黄、髪黒く、太くして直剛、髪少なく、廣顔、秀顴、小鼻、小眼、等の如きモンゴリア的の特徴を有するも頭骨は高く尖れり、其のアレウト（Aleut）（約二千人）はロシア人のアレウチ（Aleuty）にしてウナンガン（Unangun）と自稱す、體軀中位にして顔圓く眼小さく鼻潰れ、髪黒く髪少なし、皮膚は褐色を呈し人相悪しからず、エスキモーに似たる所あるも別個の言語を有し、アラスカの南端及び附近の數島に住めるウナラチカ（Unalachka）と他の島嶼に住めるアッパ（Akkha）とに分かる。

**アレウト**は性懶惰にして平和を好み娯樂に耽り易きも、頑固にして恨み深し、女子は顔面に刺墨を爲し鼻柱、唇に穴を穿ちて環又は細長き骨片を嵌するも、冠りものを用ふることなし、後に垂れ、前髪は額を覆ひて眉に逢し、男子は頭頂を剃り、殘髪を丸形に刈れり、海獣の肉、草根、木實、等を喰ひ、冬には穴居し、夏は草舍に棲み、着衣には海獣の皮を用ふ、ロシア人に接して、ギリシア教を奉ずと稱するものあるに至りしも從來の「シァマン」（Chaman）は依然として崇拜せらる。

（二）東シベリア群はチュクチー（Tchouktis）、コリアク（Koriaks）、ユカギル（Youkagirs）ギリアク、（Ghiliaks）、カムチァダル（Kamtchadales）、等を含めるがカムチァダルはカムチァツカの中部及び西部に居りて廣頭、秀顴、厚唇、短軀、皮膚は黄色にして少しく黒味を帯ぶ、ギリアクはアムルの下流地方幷にサハリンに住めり、體軀小にして獵漁を營み大食家としてアナヂル以北ベーリング海峽に至る地に居れり、後者は中軀、淡黄皮、秀顴、直鼻にして形相に愛すべき所あり、而してコリアクはチュクチに接近せり。



**ヘルメン**（Helmen）（本土の人）（約三千人）はコリアクのコンチャロ（Kontchalo）にして四洋人は之に據りてカムチァダル（Kamtchadales）と稱するならん、言語上より考ふれば全く孤立せる小種族を爲し、柔弱輕浮、氣力に乏しく娯樂に耽りて老後を慮ることなし、而も奢風を墨守して唱歌蹈舞に巧みなり、冬季は穴居し、夏季には杙上式の茅舍に棲み、器物には棒細工多し、獵漁を專らにし、巧に小舟（Iaidar）を操り、稍、進歩せる漁具を用ひ犬橇にて走行す。

（三）西シベリア群はサモイイェード、ソイオト、ウリアンハイ、等を含めり、サモイイェード（Samoyédes）は北極洋に沿ひて白海よりイェニセイに至るツンドラに遊牧せり、小軀にして皮膚の色は淡黄、頭髪黒剛、頭短く、顔は平にして廣く、眼は黒くして小さく、短鼻秀顴なり、毛皮を蒙り、冬季には方形の「イウルト」（Iourts）

夏季には錐形の「チゥーム」(Tchoum)の中に起居し、獵漁を營み馴鹿を飼育して樞を率かしむ、名目上は基督信者なるも實際は「シァマン」に歸依せり、ゾイオト(Zoiotes)約二萬人はイェニセイの上流地方に住む、自らツーブァ(Touvze)と稱し、トルコ語を用ふるが、純種少なくしてフィン、サモイイェード、モンゴル、等の血を交ゆ、顴骨秀いで蒙古眼を有するも鼻高く狹く、唇は甚厚く、鬚少なく、皮膚は褐色を呈す、農牧を營み、貧富の差著し、佛教を信ずと稱するも「シァマン」を捨てず、ウリァンハイ(烏梁海)はコソゴルの附近に棲息せり。

(d)フィン派(約一千五百萬人)はヨーロッパの北東部に散居せる最舊の住民にして、五群を爲せるも、往時の盛況を呈する能はず、唯、フィンランド人に於て僅に餘喘を有つを觀るのみ、本派に屬すと認めらるるマジァアル(Magyar)即ちウンガルン(Ungrn)オスチアク語の「オゴル」(Ogor)「イウゴル」(Jougor)「ウイゴル」(Uigor)は高きの意にしてトルコ語の及び「ウンガルン」(Ungrn)も出でたり(地方を指示し、之より語源を同じうし、ウラ人は中央ヨーロッパに於て一國民を組織するに至れり、因に記す、フィン派は虹彩に黝色を呈し藍色若しくは綠色を帶び、毛髮は赤くして黃色を交ゆるが故に白種に入るべき性質を備ふと主張する學者あり、蓋し白種を交えたるを以て玆に至りしものと考ふるも亦一說たるを失はざるなり、本派は分かれてバルトフィン、ラップ、ボルガフィン、ペルミア、及びウグリアの五群を爲せり。

(一)バルトフィン群はバルト海の沿岸に住めり、フィン(Fin, Fenni)即ちスオミ(Suomi)沼池の義はタブァスト(Tavastre)、クブェーヌ(Qvæner)、キリアル(Kyrilæ)カレリア人サブォラック(Savolaks)等に分かれ、髮色淡褐、虹彩黝色、皮膚は褐色を帶ぶるが、其の他にブィロライステート(Vivolaister)ヒスト人リーブ(Lives)リヴォニア人チゥード(Tchoudes)等あり。

(二)ラップ群はフィンランドの北方に於ける地に住み、自らサブミ(Saami)と云ふ、體軀稍小さく男子一五三糎女子一四五糎頭丸く指度八七六を以てヨーロッパの最短頭なるが或は世界の最短頭人なるやも知るべからず、顏額共に廣く顴骨秀で眼小さく、口大きく、顎尖り、鼻短く、髮長く細く、黑くして光澤あり、鬚少なく、皮色黃褐なり、肉瘠せ、筋强く、足短きも胸圍廣く徒行に巧にして體質頑丈病稀なり、眼凹み眉高

く額に皺多きを以て面相に悲哀なる所あるも性頗る元氣にして子供らしき點多く、愛情激しく而も持續せず、感動し易く而も常なく、鋭鈍定まらず、怒り乍ら笑ひ、狡黠なる好人物なりとの評は蓋し始原的人性の特徴を具備せるに因るならんか、斯の如く形貌より觀るときはオスチアク、サモイエード、エスキモー、等に類似せる所少なからざるも、言語上の關係よりはヴォグル等と共にフインに接近せり、

(三)ボルガ、フイン群はボルガ河の沿岸に住めり、チュレミス(Tcheremisses)(約十七萬人)はボルガの中流、左岸の地に居りて森林を利用す、皮色濃く、髮柔く、鬚少く中軀廣顏なり、モルドキン(Mordvines)(約四十八萬人)はフイン派中の最も南に居るものにしてモクシャ(Mokchat)及びエルシャ(Ersia)に分かる。

(四)ペルミア群はビアルマ(Biarmes)ペルミア人、ジリアヌ(Zyriancs)、ヲチアク(Votiaks)等を包括せり、甲者(約六萬人)はロシアのペルム(Perm)州に住みて漁牧を營めるが往古よりスカンヂナヴィア人の血液を交えたり、乙者(約九萬人)はドキナ河の流域に居りて狩獵に從事せり、丙者(約二十五萬人)はキアトカ州に住みてチェレミスに似たる所多し、毛髮黒剛、皮膚褐色、強壯勤勉にして農業を勵めり、



(五)ウグリア群にオスチアク、ヲグル、ウイグル、等あり、オスチアク(Ostiaks)約三千人)は若干の小群を爲せるが、ツンドラに住みて遊牧するあり、オブ及びイルチシの沿岸に棲みて漁獲するあり、小軀、赭髮、皮膚は褐色を呈し、形相稍醜し、ヲグル(Voguls)は自ら「マンシ」と稱し、北ウラルに住み狩獵に從事して可憐の生活を營めり。

マジアル(Magyars)民族はウンガルンの平野に住む、久しき以前に於て南ロシアの「ステップ」に來りしが、西紀第十一世期頃に至りてドナウの流域に侵入し漸次にグルマニア人、スラブ人、等に接觸して變性したれども、言語より推究すれば本群に屬すべきものなれども亦トルコ群に入るべき理由あり、體軀は中位にして球狀頭、菱形顏、髮黒く、鬚長く、皮膚は褐色を呈す。



無所屬(Alloetyles)と稱するは主要なる性質に於て相悖る所ありて孰れの人種にも組入れ難き若干の小群族を云ふ、アイヌ、トダ、カフカズのチェルケッス、チェチェンズ、カルトフェル、オッセート、レスギ、の五小群及びバスコの如し。

**アイヌ**(Ainc)(約一萬八千人は邦人の所謂北海道蝦夷人にして十州島千島及南

棒太に住める半開の民なり、先史時代にありては本州島の殆ど全部に棲息せしのみならず、其の勢力も亦甚だ強大なりしが如し、然るに大和種族の發展せしが爲に漸次に北退して現況を呈するに至れり、千島に赴きしものには先住者クリル(Kuril)アイヌ語のクル或はクルより出でしの名にして人と云ふ義の血を交えしものあり、棒太に移りしものにはギリアクの風を習ひて穴居するに至れるあり、又大陸に渡りしものにはツングスと混淆して毛式ギリアクを與へたりとも稱せらる、十州島現住のものにも大和化したる跡著しからずとせず、されば純粋なるアイヌの形貌に就きては異說少なからざるも、短軀(男一米五七五、女一米突四七)長頭低額にして眉骨秀で、直鼻廣底、平眼にして虹彩黑く、睫濃く、唇厚きも突出せず、顏面は卵形にして皮膚は淡褐色を呈するが、殊に黑色直剛の毛髮は著しく發達して鬚髯長く、毛人の稱あるを致せり、性溫厚從順にして平和を好み、冇爲の心に乏しく懶惰風を爲して蒙昧不潔を厭はず、言語は膠着を先にし川言を後にするの點に於ては我が國語を始めとし、滿洲語、蒙古語、等に類すれども語源に就きて考ふるときは全然別派の語を爲せり、而して各地に住居するアイヌの言語を對比すれば多少の差異あるを見るも、要するに大同小異にして互に相通ずることを能はざるに至らざるが如し。

**トダ**(Todas)は一にツダ(Todas)と云ふ、南印度のニルギリス(Nilgiris)臺地に住める一小部族(約六百五十人)たるに過ざざるも、程度の低き牧畜的文化を有するか、故に夙に名を知らる、今を距ること一千年前にカナラの平野より移住したりと自ら傳ふれ



ども來歷頗る不明なり、言語はドラービダ的なりと稱せらるるが、形貌は體軀大きく男一七三糎筋肉逞しく皮色黑褐にして女一五五糎眉毛、鬚髯叢生し、殊に多毛なるを特徵とせり、性質溫順尙武の傾あるも平和を好み勞働を厭ひ、狩獵せず、耕耘せず、土地及び其の自然産を共有物とし、茅舍、家具、家畜のみを特有し專ら水牛の飼育に從ひ、乳汁を主食し交ゆるに草根、木實を以てす、腰衣を纏ひ幅廣き上衣を着し、男子は長き五六寸、女子は長く背に垂るる髮を冠れるが、着衣と相俟ちて容姿優雅なり、「マンド」(月)は通常五舍より成りて三舍を住居に宛て一を搾乳、貯乳に用ひ、一を牧舍とす、茅舍は竹、籐、草にて作られ、弧角の家根は美觀を添ふるが、窓なく、入口は板にて閉さる、「ペイキ」(個倨)と「カタ」(俗人)とに別れ、乳汁を敬ひ、搾汁に儀式あるが如き、謝恩の情に厚きも、偶像少なく、「後の世」の存在を深く信じ、絲葬木葉にて遺骸を覆ひたる乾葬も、後、火を懸けて灰燼と爲すを行ふが如き、堅固なる有神主義者たるに拘らず、一婦多夫の奇風、女兒制育の惡習あり。

カフカズ山脈の兩斜面に跨りて、棲息せる幾多の小種族あり、類別上頗る困難なるも茲には五小群と爲して略記を試みたり。

**(一) チェルケッス**(Tcherkesses)即ち西コーカシア人にしてシアプスグ(Chapsough)、ウビフー(Oubikh)、等の數部を含めるが、アバズ(Abazes)と同樣の言語を用ひてイスラム教を奉ぜり、ロシア人が本族の住地を確實に占領するや一八五八——一八六四年に於て四十萬内外のチェルケッスは去りて小アジアに移住せしに、一

八六四年にはロシア政府より退散を命ぜられ、黒海の諸港は八ケ月間に二十三萬餘人を臨時の收容地たるトレビゾンド、サムスン、シノペに向ひて輸送せしが、多數の死亡者を出だして、其の慘狀には言ふに忍びざるものありき。

(二)**チェチェンズ**(Tchetchenz)はミジェギ(Midjegulis)、キスト(Kistes)と云ひ高ダゲスタンを占む、廣頭、其の他の體形に依りて特殊の種族たるを明示し、南はツーフ(Toukhis)、プシアブ(Pchaves)、フェフスール(Khevsoures)に接し、西はインゲシア(Ingouches)に隣れるが、コーカシアの占領戰の際中立を保ちしのみならず、平穩に農事を務め、ロシア人の提供に係る改善的施設に對し反抗することなし。

(三)**カルトフェル**(Kartvels)即ちゼオルジア人は、ロシア人のグルジア(Grusia)人にしてコーカシアの南西部を占め、カルトフェル(甲)、イメール(Imères)(乙)、ミングレリア(Mingrelia)人オザフィ(Odishi)、ガリア(Gouria)人(丙)、スアネート(Founnèthes)(丁)の四部を含めるが、形態より觀るときはセム派に近き所あるも、言語より考ふればアーリア、セム、トルコの孰れにも緣故なきが如し、且又他のコーカシア人に異なれるは特殊の文字及び文學を有するにあり、身丈高く、長頭、黒髪、虹彩は黒色又は濃褐色を呈し、鼻は直くして狹く、唇薄く、皮膚は美白色にして體軀は調勢を有でり、セオルジア及びミングレリアの婦人に模姿の優麗なる所あるは世に知らる。

(四)**オゼート**(Ossètes)は一にイロン(Iron)と稱す、セム派に關すべしと云ひ、アーリア派に關すと云ひて未だ定說あるを聞かざるが、言語に依ればイラーン群に近きもの如し、コーカシア地峽の中央、狹隘ならざる區域を占むるも、總員は約三萬人に過ぎずして四部に分かれ、自然數にイスラム、キリストの二敎を加味せしが如き一種の混成敎を信仰せり。

(五)**レスギ**(Lesghis)(約六十萬人)はレキ又はレスキと云ふ、高ダゲスタン并にカスピに面する山地に據りて若干の部族、氏族より成れり、性强剛にして尙武の志厚く忍耐して克く勤むるも爭鬪を好むの風ありて統一の實を擧ぐる能はず。

**ウスカルヅナク**(Euskaldunak)(約八十萬人)はエスパニア人のバスク(Basques)なり、西ピレネーの兩斜面に跨り南部(六十萬人)はエスパニアに屬し、北部(二十萬人)はフランスに隷せり、ヨーロッパ最古住民の一にして其の起源には異說頗る多く、或は史前人種の遺族なりと主張せられしが、當イベリア的の一部族なりとし、或はハム派蒙古派の一種族なりと主張せられしが、當イベリア的の一部族たるは慥なる事實と認めらる、言語(ウスカラ)(Euskara)は連綴式に屬して西ヨーロッパの一奇觀たり、形貌には混淆の跡を認む、髮は黒色若しくは濃褐色を普通とすれども、栗色、老黄色、等少なしとせず、長頭を主とすれども廣頭少なからず、身長は中位にあるも體質優良にして疾病に罹ること稀なりとす、遊し風俗の淳朴なるのみならず、体育上の注意頗る厚きに由るなら ん、性豪膽にして活潑、能く戰ひて白刃を使ふに巧なり、無比の遠洋漁業者として知らるるが農牧を厭ふことなし、歷史を重じ、獨立に熱衷せる結果、兩强國に分屬するの止むを得ざるを知れるに拘らず主權國の民法を採用することなく、依然として長

子權を保持せり、其の他古來の踏舞(Mochico)、樂器（笛、太鼓、等）を存有せり。

III 白色人種　本種（八億五千萬人）は一にコーカシア人種と云ひ人類の過半を占む、體軀は中等以上にして皮膚は概ね白色（ヨーロッパの北部及び中部）を呈せるが、多少の帶色ありてヨーロッパの南部のものには褐色を帶ぶるを觀、アフリカの北部幷に印度に於けるものには濃褐色を呈し又は帶黑色の甚しきを觀るなり、顏面卵形にして額濶く、眼大きく鼻狹し、直顎にして口小さく唇薄く、髮は長く硬剛ならずして波狀又は卷狀を呈し、切斷面は卵形なるが、毛色には赤色、栗色、黃褐色、等ありて髭も亦頗る多し、住域は極めて廣大にしてアジアの南部及び西部、ヨーロッパの要部、アフリカの北岸よりアメリカ、オセアニア、等に亘れり、本種を分ちてヤペーツ（Japheth）、セム（Sem）、ハム（Ham）ノエの三子に因る稱呼の三派とす。

(a)ヤペーツ派（約八億人）はアーリア（Arya）派又はインド＝ヨーロッパ派とも稱せらる、文化の度に差等の著しきのみならず、混淆錯綜を極むるを以て內容の精査頗る困難なり、氣質、習慣、等に相類する所甚だ多く殊に言語上の關係より見るときは同一派たるを明示せるも、體形上より觀察して頭形、其の他に基づきて種別を試みんか、ヒンド、イラーン、ヘーレン、ラテン、ツートンの五群より成れる長頭若しくは亞長頭の一派とセルト、スラブの二群より成れる廣頭派との存在は慥に認め得べく、又皮色に據らば濃色式のアジア（インド＝アフガン）部と淡色式のヨーロッパ部とに大別し、甲部を黑褐の二群に分ち、乙部を棕褐の四群及び淺褐の二群に分つを得べし、蓋し本派の發生がコーカス山脈よりバクトリアに至る地域にありて夙に數枝に分かれ、東向してインド＝イラーンの一派を爲し西向してヨーロッパ派を爲すに至れるが如し。

(イ)アジア部はヒンド及びイラーンの二群を含みて濃色式のインド＝アフガン派に當れるが、皮膚は褐色を呈すれども濃淡一樣ならず、顏頭骸も長し、

(一)ヒンド（Hind）群はアーリア的種族にして印度に來住したるものの子孫なるも、年代の古きと人員の少なかりし故にや、其の踪跡顯著ならず、印度の上流社會を占むるブラーマヌ（Brahmane）殊にヒマラヤの高地、カシミルの高嶺に住めるものには白皮、淡色の髮、等を見るも、平野に居るものには多少

ドラビーダの血を交え、ハシア (Khasia) には印度支那的なる所ありて、カフィル (Kaffir) は藍色若しくは黒色の眼、黒色乃至栗色の髪質額等を呈せり、本群中に於て一頭地を抜けるはラヂプト (Radjputes) なりとす。

**ラヂプト** (約一千萬人) は一の種姓を爲す、アーリア的の種族にして西紀第四世期頃に印度に來侵せし以來、ウヂプタナな根據とし、其の他の各州に移住を試みたるが、往古の「クシアルトリアス」即ち軍姓の後繼者たり、體軀大にして形態整ひ、皮色淡く小兒婦女には純白なるものあり、眼大きく、形好く、虹彩は茶褐色を帶ぶるもの多く、髪色も少なからず、鼻は鷲嘴狀を呈し、髪は豊にして黒色乃至栗色を呈し柔く卷狀を爲し、鬚長し、殊に婦女には嫋娈の優れたるものあり。

**(二) イラーン** (Irān) 群 (約二千六百萬人) はアーリアが東方に往住せし際イラーン高原に殘留せしものの子孫なるべしと推せらる、相貌の秀麗なるを以て聞ゆるタジック (Tadjiks) は南カブルに住みて農事を勤め、商賈としては西の方オレンブルグより東の方新疆までの間を往來し、アフガン は高原の東北部に居りてプラフイ、バルチは其の南に住めり、此の外にタルド、オッセート (?)、アルメニア人等あり。

**パルシ** (Parsis) 即ちファルシ (Farsi) は、體多く、虹彩は藍色を有せり、四紀第七世期の頃印度に移住し現時に於けるも十萬人内外を算す、銀行家、文學者多し。

**タジック** (Tadjiks) は一にパルシアン (Parsivan) と云ふ、イラーン高原の北部并に中央アジアの一部に居を占め若干の部落を爲せるが、體軀は高く (一七〇糎内外)、頭丸く、眉目秀いで廣額長顔、鼻骨稍突出し、直鼻は長く隆く、上唇小さし、毛髪は豊にして黒く細く、骨格に重厚なる所あるも皮色は白くして美し。

**ハヂエミ** (Hadjemis) は前者に比し體質上又は風俗上大差あるを認めず、髪は滑にして太く、鼻は小さきも形整ひ、中軀、中頭を有せり、ペルシアの西部を根據とし、其の他王國内の各處に住みて總人口の要部を爲せり。

**アフガン** (Afgans) はアフガンパタン (Afgans Pathans) 或はパチー (Patchon) と稱す、顔長く、鼻は鷲嘴狀を有し、活眼強髪髪色、虹彩は黒きを常とすれども、中には髪の淡褐色若しくは栗色なるあり、虹彩も藍色又は黝色を呈するあり、アフガニスタン及び北印度に住めるが、國境に居るものは若干の部落を爲しハイベル越のアフリヂ (Afridi) 并にペイシアエル附近のユサフザイ (Yusafzai) は少しく名を知らる。

**バルチ** (Baltchis) は一にベルチ (Peltchis) と云ふ、バルチスタンの中部及び西部に住む、皮色稍濃きも虹彩は黝色を呈し、毛髪は赤褐色若しくは淡褐色を有せり。

**ブラフイ** (Brahuis) はバルチスタンの中央山地に住む、言語に就きて考ふれば印度

より來移せしものと認め得べきも、體質より觀るときは皮色濃褐、平眼中鼻、短身等は混成種たるを證して餘あり。

**クルド**（Kurdes）は多少のトルコ的血液を交えざるものなきも、外觀は頗るアフガンに似たり、頭丸く、顏面卵形にして顴骨秀いで鼻は高く鷲嘴狀を呈するが、尖端に特徴あり、眼は黑く大きく髮黑く皮膚は褐黑色を帶び、體軀中位以下にあるが殊に老人の姿樣には崇敬を促がすに足るものありと云ふ、ペルシアと小アジアとの境に密棲するも、ペルシアの北に於ける沙漠の地より小アジアの中央に逢するまでの間にありては各處に小群を爲して散居せり。

**ハイ**（Hai）即ちアルメニア人はバン湖の濱、アララット山の近傍に密住するに過ぎずしてアジアの南西部、コーカシア、ロシアの南部等の各處に散居せり、百語上より本群に屬すべく見做さるるも、體形上よりも觀るときはユダヤに酷似すと云ふ、身丈高く、頭はイラーン的に長く、眼は黑く大きく、額低く、鼻は隆く長く、著しく鷲嘴狀を呈し、顏は長し、皮色白く肌細かなるも、老すれば燒けて濃色を帶ぶるに至る。

(ロ)ヨーロッパ部は形貌より觀れば淡色式に當りて毛髮の濃褐色(棕櫚色)を呈するもの四群と淡褐色(老黃色)を呈するもの二群とを包含せるが、文化大に進み、經濟上の振興は政治上の發展と相俟ちて國語の成立、國民の組織を促したるの結果、言語の威力は形貌を厭するの慨あり、由て本部に關する民族に就きては言語に重を置ける種別法に從ひ、純粹なる歷史的種族（Races historiques）としてヘーレン、ラテン、ツートン、スラブ、セルトの五群の記述を試みんとす。



前記の如く形貌と言語との關係に相容れざる所多きを以てヨーロッパの住民の實情に鑑みて言語別に從ひしが、形貌別の大要を記すれば次の如し。

(a)棕櫚種（Races brunes）即ち毛髮の棕櫚色を呈するものはアドリア、沿海、西方、イベリアの四群を包括せり。

(一)アドリア（Adria）群は一にヴナリア群と云ふ、アドリア海より北東に當りて海岸とサエ河との間に於ける地方の住民中に本群の標式に適合する代表者あるが故に斯くは名づけられたり、アドリア海の北西にある地、アルプ山中、シウィッ等に於ける散住區はロアール（Loire）、ソーヌ（Saône）間の地より、モルアン（Morvan）ブォージ（Vosges）、モゼル（Moselle）の谿谷を經てアルデンヌに至る諸國に住める各民族の隆起線を越え、而して本群の形貌上の特徴は體軀大（一七二糎）の中にある新群の一帶を連絡せり、きく、頭極めて短く、毛髮は黑色又は濃褐色を有し、鼻狹く、鷲嘴狀を呈し、虹彩の黑きを通常とす。

(二)沿海群はナペルの河口よりジブラルタル、ヴァダルキビレを經てピスカヤ灣に至る沿海地方料乃至二百に據れり、體軀中位（一六六糎亞長頭にして毛髮虹

淺褐種

彩は殆ど黒し。

(三)、四方群は一にセノール(Cévenole)群と云ふ、フランスの西部、中央山嶽、西アルプ、等の方面に於て良好の代表者を有するが、フランスよりロシアに達する間にありては他種族の混和甚だ顯著なり、體軀は平均以下なるもの多く、頭骨は長しく短く、黒髮褐眼、圓顏、直鼻なり。

(四)イベリア(Iberia)群はイベリア半島并に西地中海の島嶼を占め、フランス及びイタリアに多少の代表者を有せり、體軀中位にして頭骨は甚しく長く、毛髮、虹彩何れも黒く、皮膚も亦焼けて黒し。

(b)淺褐種(Races blondes)即ち毛髮の老黄色を呈するものは東方及び北方の二群に分かれてヨーロッパの北部に亘れり。

(一)東方群はヨーロッパの東部に存して就中東プロイセン、ロシアの中部及び北部に多し、體軀中位、頭稍丸く、方顏にして虹彩は藍色又は鈍色を呈し、髮は直くして灰色的淡褐色を有せり。

(二)北方群はバルト海の沿岸、スカンヂナビア、ホランド、ドイツの一部、イギリスの東岸及び北部、スコットランドの北部并にアイスランド、等に亘り、高軀(一七三糎)にして髮色は淡褐又は赤褐の色を有し、頭長く虹彩は藍色を呈し、皮膚は白くして淡紅を帶び顏長く、突鼻にして直し。

(三)ヘーレン群(約六百萬人)はバルカン半島の南部并に小アジアの沿岸等に住めるギリシア人及びアルバニア人を含めり。

ヘーレン

スキペタル

ラテン

**ヘーレン**(Hellènes)はヘラス(Hellas)人即ち近代ギリシア人にしてペラスグ(Pelasge)(古代に於けるギリシア人)とアーリア的の移住民との混成に係れるギリシア人の子孫にしてヘラス國以外、バルカン地方、地中海沿岸の各處に居住せり、體軀大きく、展額、活眼、直鼻にして相形優麗なり、智力に富み、文學を好み、體術に熱心なるが、商業に巧にして農業に冷淡なり。

**スキペタル**(Skipétars)即ちアルバニア人(約二十萬人)はトスク(Toskes)とゲーグ(Ghègues)とに分かれ、山地に孤立せし結果、言語、外觀、等に就きても他種族との關係薄く、最も近きものなギリシア人とす。

(四)ラテン群はイタリア、フランス、エスパニア、ポルトガル、ロマーニア、等の各民族を包括せるが、此等の民族寧ろ國民は孰れも當該地方に於ける先住者とアーリア的の來住者との混成に係りて錯綜を極め、外觀上明確に區分し難きを以て言語に基づきて種別を試みたるなり。

イタリア人は古代のリギュール(Ligures)セルト以北部エトリュスク(Etrusques)人の提要地理汎論　人類地理　種族の記載

中部ヘーレン南部並に中古のヘリゥール (Hérules)、オストロゴーッ (Ostrogoths)、ロンバルド (Lombards)、アラブ (Arabes)、ノルトメン (Northmen)、等の混成に係れるが、現時にありても北西部にはリギゥール式に成れる小軀、褐皮、短頭の人稀ならずして、中部にはローマ式の亞長頭、廣額、直鼻、美口、丸顋を覩るに困難ならず。

フランス人 フランス人は最舊のカンスタッド (Canstadt) 及びクロ・マニョン (Cro-Magnon) の兩式に加ふるに小軀短頭の人と高軀長頭の人とを以てせしのみならず、小軀の鑄金人淡髮のガリア人、南部のセルト、リギゥール、北部のブルトン (Bretons)、北西部のフラマン (Flamands)、南西部のガスコン (Gascons)、等より混成せられ、智能に豐なる種族を爲すに至れり。

エスパニア人 エスパニア人は最舊の住者たりしものを基と爲しイベール (Ibères)、バスク (Basques)、セルトを交えし後、カルタゴ、ギリシア、ローマ、ゲルマニアの影響を蒙り、中古のアラブ及びベルベール (Berbères) の來侵を受けて始めて完成せしが、特徴としては中軀、痩身、筋肉遒しく、皮色淡褐、顏面卵形、唇稍、強し、殊に婦女は目大きく、虹彩黑く、眉毛秀いで、手足北車にして擧止に優雅なる所ありと云ふ。

ホルトガル人 ホルトガル人は前者に近きも、多少のスエーブ (Suèves) 及びキジゴーッ (Visigoths) の血を交え、マウル (Maures)、ユダヤ人、黑人を加へたるの差あり。

ロマーニア人 ロマーニア人はダース (Daces) 及びジート (Gètes) と攻略者ローマ人との混成に係はるマジアル、スラブ、等を多少加味せしものにして、ローマ的の平野民と骨格の遒しき山地民とに分かるるも、皮膚は褐色を呈し、虹彩は濃色を有し、毛髮黑く、眸もラテン的の語を用ふ。

ツートン (五)ツートン群(二億一千五百萬人)はドイツ、スカンヂナビア、アングロサクソン、等の諸種族を含み、身丈高く、虹彩青く、顏は櫻花色を呈せり、住域は中央ヨーロッパの高地よりドイツ平原、オランダ、ベルジック及びフランスの北東部に至り、スカンヂナビア半島に及び大ブリタニア群島に達せり。

ドイツ ドイツ (Deutsch) は往古のゲルマニア人即ち北部のインゲフォン (Ingevons)、東部のイステフォン (Istevons)、中部のヘルミノン (Herminons) 及び南部のスエーブ (Suèves)、等の混成より成れるが、高地ドイツ亞群にシュワイツ、スエーブ、ヘルザッ

イギリス

スカンヂナビア

スラブ

ス、バイイエルン、オーストリア、等ありて低地ドイツ亜群にプラットドイツ(Platt Deutsch)、フリゾン、オランダ、ブレミシュ、等あり。

アングル(Anglo)及びザクソン(Saxons)は共にインゲフォン族に屬せるが、西紀第五、第六の兩世期頃、大ブリテンに渡りて先住者に混じ、同第九乃至第十一世期に於てダヌ(Danes)及びノルトメンを交えて優秀なるイギリス人を完成したるが、其の後新世界に移住して所謂ヤンキー(Yankees 土人の那呼にして寇盜者の義成りたり。

ゴーツ(Goths)はイーランドに於てシンブル(Cimbre)に和してダヌと成りスカンヂナビアに入りてスイオン(Suions)スエトン(Suetons)等に混じてスエリゲ、ノルゲを爲し、出でてはスコットランド、アイルランド、イングランド、ノルマンヂア等に赴き、イスランド、グリーンランド等に達したり。

(六)スラブ群(二億三千五百萬人)はベネチアよりウラルまでの東ヨーロッパ幷にアジアの中部及び北部に住めるが、周圍の事情に差異あるのみならず、接觸せる他種族の混和を受けたるを以て純粋なるものは之を小ロシア又はクロアチアに於て求むべく、短頭、方顏、鼻少なく(以下略す)毛色皮色は北人に淡く南人に濃きを常とせり東スラブにロス(Ros)大ロシア、マロロス(Malo Ros)(小ロシア)、ビエロロス(Bielo Rus)(白ロシア)、スルブ(Srb)、クロアト(Croates)、スロブェーヌ(Slovènes)等あり、西スラブにボル、チェヒ、スロブァク、エンド(Vends)、バルトスラブ(ルセーヌ、レット)等あり。

大ロシア人(五五六七萬人)は短頸、廣顏、短頭にして虹彩は黝色を有し、白ロシア人(二二三八萬人)は前者に比し副次的の變差あるのみならず、小ロシア人(五八八萬人)は頭丸く、毛髮、虹彩、皮膚は濃色なり、ブルガル(Bulgar)は形貌上はフイン的なるがスラブ的の言語を用ひ、スルブ(Srbs)は大軀、強格にして相形整へるも顏骨は稍、著しく毛髮は淡色を有せり、ボル(Pol)(七九三萬人)は短頭にして毛髮、虹彩、皮膚に淡色を呈し、チェヒ(Tchèques)はゲーメン及びモラブィア人を算せり。

(七)セルト群(約三百萬人)はヨーロッパに現存せる住民中の最稀なるものに

屬し（來住期を石器時代とす）ガエリック(Gaelique)とキムリック(Kymrique)との二部に分かれて甲者はアイルランドのアイリッシュ(Irish)、スコットランドのハイランダー(Highlanders)即ちゲルス(Erse)及びマン島のマンクス(Manx)を含み、乙者は一にブリトニック(Brittonique)と云ひてエールスのエルシュ(Welsh)、ブルターニュ(フランス)のアルモリケン(Armoricain)及びコンエーのコルニック(Cornic)を包めり、而して形貌には判然せざる所頗る多く勿論單一の標式を爲さざるも、毛髮は栗色にして赤味を帶び、虹彩は栗色又は黝色を呈し、皮膚に光澤なく、身長中位なるは通性と認むべきか。

(b)セム派は往昔に於けるアッシリア、フェニキア、カルタゴ等の住民を含めるが、現今は總員三千萬人を以てアラビア人、シリア人、ユダヤ人等を主とす、長頭、直顎、長顔にして額廣からず、耳骨隆く、鼻は鷲嘴狀を呈して唇厚く、眼は細長く、虹彩黑く、睫毛長し、髮髭皆も黑くして皮膚は白色的なるも青銅色を帶ぶるを常とす。

アラビア人即ちアラブ(Arab)はアラビアを本據としてペルシア灣に出でゝ、レスチナ、シリア、メソポタミア、ペルシア、インド及びマライ群島の若干島に雜居し、アフリカの北部、中部に亘れり、身丈中位以上にして筋骨逞しく、長頭、長顔、黑瞳、黑眼、直鼻狹隆、美口白齒殊に婦女は輪廓秀麗に、四肢の比例好く、步調優雅なり、純種はアラビアの內部に遊牧し爭鬪奪掠に走るの傾向あり、其の他の地に住めるものには幾分の異分子を混和せるもの少なからず、殊にアフリカの北部には雜種極めて多し、攻略傳道に依りて廣く各地に亘り、古代の學術を繼承し、各種の產業を普及せしめ以て中世に於ける開化の統率者文化の指導者たりき。

ユダヤ人は西アジアには僅少にして二十五萬人內外に過ぎざるも、約八百萬人は世界の各方面に亘りて、其の半はロシア及びロマーニアに、三分一はドイツ及びオーストリアに、六分一は其の他の地に居住せり、されば接觸せる種族に從ひて變差を生じ、イギリス式と成り、ベドイン式を現はすが故にユダヤ種族、ユダヤ式の存在は容易に認め難し、然れども亦二三の特徵の保存せられざるに非ず、凸鼻、縮髮、下唇の厚き、齒園の廣からざるは屢、目擊する所

たり、又言語に就きてもヘブライ語は既に死亡して使用せられず、居住地に隨伴せる各種の訛成語行はれ殊にユダアドイツの語最も盛なり。

(c)ハム派(約二千五百萬人)はアジアより移りしものなりやヨーロッパより來りしものなりやは明ならざれども、新石期の頃、黒人が居住せし北アフリカに現はれたる白種人より出生したる混成的のベルベリア(Berberia)人を始め、エシオピア(Ethiopia)人、其の他フラー(Foulah)、サンデ(Sande)等を包含し、てアフリカの東部より北部に亘る地に居住す、皮色は黒褐にして赤味を帶び、長頭、縮髪、顔面は卵形若しくは矩形、突鼻狹細、足甲高し、分かれて三群を爲せり。

(一)ベルベリア群はセム的のハムにしてアフリカの北緯十五度以北の地を占め、東部のルアタ(Lauata)、中部のゼナタ(Zenata)、西部のサンハガ(Sanhagn)に分かれ、カビール(Kabyles)、ツアレグ(Touarg)、ベドイン(Beduins)、チッブ(Tibbou)等を含めり、カルタゴ人、ローマ人、ワンダル(Vandals)、殊にアラビア人の征服する所と成りたるが爲め、多少の變質は免れざりしも、喞鼻、滑髪等の特徴を保持し得たり。

カビールはカビリアの山地に住む、ベルベル(Berbers)種族の純粋なるものにして體軀中位にありて方顔、凹曲鼻を有せり。

ツアレグ即ちイモシァル(Imgeclars)は中央サハラに多し、身丈稍高く皮色稍淡く顔面卵形、直鼻にして常に「リタン」(Litham)と稱する特殊の黒頭巾を用ふ。

ベドインはアラビア人とベルベリア人との雜種なり、エジプト沙漠の地に漂遊せり、アラビヤ人の中にも同じ稱呼のものあり、混ずべからず。

チッブはアラブ、ベルベル及びネグロの雜種にしてチベスチに住めり、

フェルラー(Fellahs)は古代エジプト人の子孫にしてアラブの血液を交えたるものなり。

(二)エシオピア群即ち眞のハムはアフリカの北東部、北緯二十五度と南緯四度とに限られ、西はニール、バールエルアズレク、アビシニア高原の西緣、ロドルフ湖、ケニア山に止まり、尙ほ紅海及び印度洋の沿岸、アデン灣よりダーンフォード(Durnford)に至るの地に住めり、體軀痩せて稍高く(平均一六七糎)、皮色は黒褐にして赤味を帶び、頭長く顔は卵形若しくは矩形を呈し、突鼻狹細、唇稍厚く、毛髪は色黒く滑なるを常とす。

ベッヂァー　(Bedjas)はエジプトとアビシニアとの間に漂遊して山羊、綿羊、驢馬、駱駝等を飼育し幾多の小部族を爲せるが、母算主義の下にマホメット教を奉ぜり。

ハベシ　(Habech)即ちアビシニア人は南アラビアより渡來したるアラビア人にしてアビシニアの山地に活動して先住者たる黒人を征服したるものの子孫なるが、土人の血液を混ぜざるを得ざりき。

ガルラ　(Gallas)はアビシニア高原の南、タナ湖とケニア山との間に亘る東アフリカの地に住めるが本群中の最も純粋なる種族たり。

ソマーリ　(Somalis)は東經四十度以東にありてザブチ岬よりザンバの河口及びアデンフィッダーに至る海岸とに限らるる地に住めり、ガルラ及びアラブの混和より成れり。

ダナキル　(Dunakil)即ちアファル(Afars)はアビシニアとザブチ岬、ハムフィラ灣間の海岸とに限らるるアフリカの東部に居り、慨形上前者に似たる所多きもアラビア的分子稍少なし。

(三)フラー＝サンデー　(Foulah-Sandeh)群はネグロ的ハムなり、スーダン方面に於て若干の部族を爲せるが、混淆の狀態樣々にして標式を促ふること困難なりとす。

マッサイ　(Massai)はロドルフ湖と南緯六度との間に居りてサンデ群に屬するも、北方にありてはネグロの混合強く、南方に於てはボシエスマンの影響を蒙れり。

ニアムニアム　(Niam-Niam)即ちサンデ　(Sande)或はザンデー(Zandeh)はウエレ、ウバンヂの北よりスッレ、イッペ、其の他、白ニールの支流の高臺に遙する地に住めり。エシオピア人とスーダンの黒人との雜種と認めらるるが今に人肉を喫ふの惡習あり。

フルベ　(Fulbe)にプール(Peul)、フラー(Fellah)、フラタ(Fellata)等の稱あり、西スーダンに於ける雜種民なり、根底はエシオピア的なるし混和分子にアフア、ベルベル、ネグロの孰れにか偏するに依りて標式に變差を呈せり、牧畜と爭鬪とを好めるを以てダルフル方面より、ネグロの住域に來徙して下セネガルと北緯十度との間及びダルフルとカメルンの後園との間に於ける地に散居するに至りたり。

I.マライ副種(約三千六百萬人)は、マライ人種又は褐色人種と稱せられ、五人種の一に算へられしことありしが、人種學に進歩ありし結果、黒、黄、白三種の混淆より生出したるものなりと認められるるに至れり、然れども此等の三分子の混和狀態は勿論均一なる能はずしてインドネシア(Indonesia)マライ(Malay)及びポリネシア(Polynesia)の三派に區分するを適當とす。

(a)インドネシア派は印度支那半島の北西部に起り同半島よりマライ群島に亘れる地を住域と爲せしものなるも、マライ人、アラビア人、支那人等の驅逐する所と成りて半島並に各島の內部に逃避して今日に至れりと爲す。

モイ

印度支那半島には安南のモイ(Mois)、ラオスのハー(Khas)、テナセリム高地のカレーン(Karens)等あり、マライ群島にはスマトラのバッタス(Battas)、ボルネオのダヤク(Dayaks)、セレベス及びモルカのアルフル(Alfurus)、ルソンのイゴロット(Igorotes)、チングイアヌ(Tinguianes)、ミンダナオのマノボ(Manobos)等あり、我が臺灣の蕃人も亦本派に屬せるが如く推せらる、中には支那人、アラビア人、インド人等に接觸して血液を混せしが故に體格にも多少の變差あるを免れざるが、先づ體軀は中位以下(一五七糎)にありて筋骨逞しく四肢は好く發達せり、皮膚は稍、淡き銅色を有し、黒髪は細く長くして滑なるを常とすれども、波狀を呈することあり、長頭若しくは中頭にして平眼直鼻、面貌醜しからざるも顴骨は少しく隆起し、顎骨も稍、突進せり。

**モイ**(Mois)はラアイ(Laai)又はロイ(Loi)と云ふ、孰れもアンナム人の所謂蠻民、山民にしてラオス人及びシアム人のカー(Ka)又はハー(Khas)に當り、プメル人のプノン(Phnon)、トンキン人のムオン(Muongs)なり、形貌、風俗、言語、信仰等より推考すれば一種族を爲すべきものなれども、實際は幾多の小部族に分かれ印度支那の東部、メコン河と海岸との間にありて北緯十一二度より同二十二度に亘る山地に住めり、體



軀は平均約一六〇糎最小はトラオス(Traos)の一五〇糎にして長頭を有するが、最大はボロブエン(Boloren)の一六四糎皮色は濃褐に至らざるも赤味を帶び、額狹く、丸く、眉骨著しからず、平眼廣鼻、鼻稜は屈曲し鼻孔大きく、顔面廣く、顴弱く、髪は滑なるを常とすれども亦波狀を呈するありて、殊少なく、齒並び好く、姿樣細緻なれども調和を缺かず、半島最古の住民なるも、アンナム人、タイ人等の來住を蒙りて山間の地に驅逐せられし結果、現況を呈するに至りしものなり、

**バッタス**はスマトラの内部に住めり、皮色濃く、黒髪豊にして頭稍、長く直鼻平眼なり、「サロンカ」(Sarong)(大形の布片)を用ひて腰に纏ひ、肩を覆ひ、髪の大部を剃り盡を黒染にす、棲家は杙上に作られ屋蓋の四隅な水牛角にて飾る、人肉を啖ふの風衰へしも、今に妻を購入す、耕種に從事し「ラヂャー」(Radjah)を酋長に戴き元老會の決議を重ず。

**ダヤク**はボルネオの中部に多し、皮色淡く髪は黒く滑に、平眼突鼻にして相形整へり、杙上に大屋を作りて共同の棲家と爲し、獵漁を好み甘藷野菜を栽培す、人肉を啖ふの風行はれ、首狩に熱中すと云ふ、鉈、刀、楯等を製し、裝身具を作り、製鋼術を知り描畫彫刻に巧なり、イスラム教を奉するものあるも多くは精靈偶像に神事せり。

**アルフル**はセレベス、モルッカ、等の内部に住めり、體軀稍、高く、皮膚は色濃く毛多く、長頭なるも四肢の發達惡しからず、布片又は樹皮にて腰部を纏へるのみにて爭鬪を好み首狩に熱心なり。

**ベツィレオ**(Betsileos)(約三十萬人)は一に南ホバと稱せらる、マダガスカルの中央高

地の南部に住めり、髪は黒く長く、皮膚は稍黒く銅色を帯ぶ、性質温順なるも氣力に乏しく好みて耕種に從ひ、文身するの風あり。

(b) マライ派は黄黒二種の混和より成れるものにして、印度支那の南東部を以て發生の地と認む、爾來漸次に發展してマライ群島に達し、ポリネシアよりマダガスカルに亘れるが如し、彼等が群島の北部其の他に到達するや常に沿海の地に據りて先住者を内部に驅逐したり、スマトラ及びマラッカ半島在住のものを以て最純粋なるべしと認むるが、體軀は中位（男子は平均百六十一糎）にありて手足小さく、皮膚は黄色稍、強くして褐色を帯び、黒髪は剛にして豊かなるも鬚少なし、頭短く、後部に偏平を覺え、顴骨秀で、斜眼多し、短鼻にして穴廣く、口大きく唇厚し、然れども接觸せる支那人（ジャバ、北ボルネオ、北フィリッピン）、アラブ（ミンダナオ）、ヒンヅー（ジャバ、スマトラ、南ボルネオ）、ネグリト、パプア、等の影響を蒙りて體格體質に變差を生成せしこと尠少ならず、住地に從ひてジャバ人、マヅラ人、バリ人、スンダ人、等の別を設くるが、フィリッピンには タガル（Tagals）、ビサヤ（Bisayas）、ビコル（Bicols）、等ありて我が臺灣には所謂蕃人あり、マダガスカル島のホヴ（Hovas）も亦本派に屬すべきものなり。

マラッカ半島、スマトラ、ジャバ、等に住めるマライには文化の度稍、高きものあり、被服は極めて單簡にして短袴、「サロング」（我が國の風呂敷に似たるものにして之が慣用は印度人より傳はりしなら）鉢巻、帽、草履、等を用ふるに過ぎざるが、女子は胸掛の外に耳環、指環、腕環、等にて裝身せり、「ベテル」（betel）と檳榔子を咀嚼して齒を黒染に爲すの風あり、木造の方屋又は杙上屋に棲み、航海通商を得意とするも亦米、甘藷、珈琲、甘蔗、等の栽培、家畜の飼養に長じ、織物、皮革、染物、指物、船舶、武器、裝身具、等の製造にも拙ならず、第十世期以來イスラム教を奉じ小邦の群設ありて安穏に世と移るも進取の氣に乏しきが如し。

タガル（Tagals）（約百五十萬人）はインダオス（Indios）（昔教を奉ずるもの）の最要なるものにしてフィリッピン群島にありてはルソンの中部（ミンドロ、等を占むるが、マリアナ列島、シンガプールにも居住せり、支那人若しくはネグリトの血液を交えたるありて水邊に茅屋を構へて漁獵耕種に從ふ、快濶にして信に厚きも勤勉ならず、娯樂の友にして音樂、舞蹈を好み殊に鬪鷄に耽けるの風あり。

ビサヤ（Visayas）（約二百五十萬人）はフィリッピン群島の中部を占め、專ら農事を務むる

が不潔にして飲酒に耽けるの缺點あるに拘らず、製機に熱心なるが如し。

**ビコル**（Vicol）（約四十萬人）はルソン島の南部に住みてネグリト及び支那人の影響を蒙りしこと多く、進歩的資質を有せざるに非ざるも、周圍の事情は開情の性を誘致せしにや、低度の生活の中に安逸を貪れり。

**臺灣蕃人**　臺灣蕃人は臺灣島最蕃の住者を總稱せしものにして、体質、言語、風俗、等に基づきてマライ派に屬すべきものと認めらるるが、化熟の度に從ひて熟蕃及び生蕃に大別せらる。

熟蕃は一に平埔蕃と稱せらる、往時は臺灣西部の平野に居を占めしものなるも、支那種族の壓迫を受けし爲め、現今にありては中央山地の西麓に當れる高地を始めとし、北東の宜蘭方面より蘇澳、花蓮港等を經、東岸に沿ひて南下しつつあり、體格強壯にして而も相貌に柔和なる所あり、性質順良にして頗る活潑なり、力役を厭はず、能く農事を務め又漁業を好めり、支那人を始め、其の他の來住者と共に雜居するを以てはず、生存競爭の場裏に立ちて進化を企圖するの資を備ふるものと云はざるべからず、此の種族は他の蕃種と異なりて北方（沖繩群島？）より移住したるものなるべしと の說は兎も角、体質、言語はマライ派に屬すべきを明示せるが、肥沃なる平野に永く居住せし結果、半開の民たるに至りしものならん。

生蕃（約十二萬人）は未だ化熟するに至らず、蠻風を存するものの概稱にして蒙昧未開の民なるも、中には化熟せんとするもの、將に風化に向はんとするものなきに非ず、



今に臺灣島の五割四分餘（生蕃地一二七〇方里、非蕃地一〇六一方里）を占め、七百足らずの蕃社を爲せど、大別してタイヤル、サイセット、アミ、プヌン、ツオボ、パイワン、ピユマ、ヤアミの八蕃種と爲し、埔里社地方より中央山脈を橫斷して花蓮港に達する一線に依りて北蕃と南蕃とに區別せられ、住地の高低に據りてタイヤル、サイセット、プヌンを山地蕃、ツオボ、ツアリセン、パイワンを高地蕃、アミ、ピユマを低地蕃と爲す を得べし、身長に就きては平埔蕃に劣れるを常とすれどもアミ、パイワン最も高く、タイヤル、サイセット之に次ぎ、プヌンは最も低くし、皮膚は褐色にして黃色を帶ぶるも、タイヤル、サイセットに稍〻淡く、パイワン、アミは濃く、其の他は中位にあり、虹彩は茶褐色、頭髮は黑く硬くして直狀を呈し、頭形はアミに長頭にして其の他に亞長頭なり（此等の體式より考ふるときは印度支那のモイ、パー、カレーン等に似たる所多く、インドネシア派に編入すべしと主張するに理由あり）、言語はマライ語系に屬すべきものなるも、地方に依りて變遷を生じ、南北兩蕃の共に談ずること能はざるは勿論、隣接する部落の間と雖も相通ずるに困難なるは敢へて珍とせず、採取、耕種を主とし、狩獵之に次ぎ、水邊の地にありては漁獲に從ひ、平坦なる處に於ては養豚、牧牛を試みるあり、其の他、粗製の器物、幼稚なる武器の產せざるに非ざるも、外物、銃器、彈藥、彈丸、鍋、綿布、釦鈕、食鹽、等は孰れも支那種族に讓りて土產の野獸、肉、鹿角、獸皮、等と交換せら る、家屋に關しては北タイヤルは丸木を叅互して屋根下を組み、覆ふに萱又は竹を以てし、南タイヤル、プヌン、ツアリセンは丸木と粘板岩を用ひて棲家を營み、パイワン

ピユマ、アミの家屋は稍、進歩の狀を呈し、居間、臺處、穀倉、牛舍、豚牢、鷄塒、等は各個別々に作られ、中には石壁、彫柱、石板の公廨(palamban)あり、衣服に就きては原始的のものに長短の二種あり、二片の長布を背及び脇に於て縫合はせ、長衣を常用に宛て、短衣は礒裝の際に上着に供す、又鹿皮にて作りたる長衣を勞働の際に用ふることあり、陰部を蔽ふには男子は布片を腹より垂れ、女子は方布二片を左右より臀部及び脚部に纏ひ上端を腹部に挟めり、冠物は一般に慣用せられ、タイヤルの藤帽、其の他の皮帽、平地落に漢人風の竹笠行はる、裸體にて之を見るのみにしてタイヤル及びアミの一部に於て外出するを厭はざるは僅にアミの外は漢人の風化を受けざるものなく、或は刺繍を施し或は線飾を附するあり、稀には長袖衣の着用を試みるものありと云ふ、文身も廢く行はれ、タイヤル、サイセット、ツアリセンは顔面に、パイワン、ピユマは手甲に施せるが、アミは全然之を爲すことなし、耳朶に穴を穿ちて竹管、木栓、貝類等を懸け又は貫きて裝飾を爲すことは蕃人間に大に行はれ紅頭嶼のヤアミの男子のみ例外とす、又二枚の切齒を拔取るの風は山地蕃間に行はる、飲食に關しては、米、粟、甘藷、芋を主食物とし小豆、木豆、稗、薏苡仁を補助に供し、野獸、野禽、川魚、南瓜等を副食物とし、雞豚の如きは饗應の資に供す、食鹽、醬、胡椒の使用頗る多く、米酒、粟酒を醸し煙草は業卷又は刻になして喫せらる。

**タイヤル**(Tayal)(約三萬人)はサイセット(約十六方里、七六〇人)と共に北蕃を爲して、風尺、溪頭、大嵙崁前山、同後山、太魯閣、等の各蕃を含み二百四十二社に分かれ、林產製



腦、礦產に對し有望なる五百二十六方里の地に據れり、體軀稍、大きく性質博悍にして怒り易く、鬪爭を好み、掠奪を繼にし、今尙ほ頭顱を狩るの風あり、山腹の林中に點在して茅舍を構ふるを常とし、外敵に備ふるの必要あるときは集團して部落を爲せり、耕種に從事せざるに非ざるも肥料を施すことを知らず、地力盡くれば從て遷移す、又狩獵を好めるが如し、男子は額及び頰に短直線の刺墨を爲し、女子は額及び耳下に網狀線より成れる刺墨を施せり。

**アミ**[阿眉](Amiis)(約三萬人)は花蓮より卑南に至るの沿海地(約百三十八方里)に住みて、海岸、秀姑巒、卑南、等の諸蕃より成れり、體軀稍、大きく、筋骨、皮肉頗る發達し、裸體を厭はず、文身、缺齒を好まず、酒、煙草を嗜み檳榔子を嚼めるが、他の蕃人に比し風俗習慣も亦異なる所少なからず、土器を製造し、新年の祭を行ふが如き稍、進歩の狀を現はし子弟の公學校に入るもの少なからず、尙ほ迷信ありて高等の學術を修めんとするものあり。

**パイワン**(擺安)(Paiwans)(約二萬一千人)は**ツアリセン**(Tsarisen)(約一萬三千人)と共に南部の高地(約二百方里)、海拔三百乃至一千二百米突に居を占む、生蕃中最も古昔より在住するものと認めらる、軀幹稍、大きく、皮膚は銅色を帶び、頭髮は黑くして直し、野獸を捕獲するに巧にして平地にあるものは養豚、牧牛に從ひ、定耕地に依りて農作を營めり、糠皮及び蕉布を以て作れる衣服は膝下に至り、釦にて合襟す、漢人の風に習ひて連續せる家屋を造り、村族制ありて世襲の土目を戴けり。

**ブヌン**(Vunun)(約一萬六千人)は中部の山間地(約三百方里)を占め、海拔一千乃至二千米突の山腹に丸木と粘板岩とを用ひて長方形の樓家を作り、狩獵、耕種に從事せり家族聯合制行はれ土目たるべき家柄一定し、大社小社の組織あり。

**ピユマ**(Puma)(約六千六百人)は一にチボン(知本)と云ふ、パイワン族種に次ぎて本島に來りしものなるが如し、卑南の方面に約十五方里の地を占むるに過ぎざるが身長稍小にして無質溫和なり、河海の沿岸地に居りて捕魚に從ひ、山間に入りては獵獲を務め、平地にありては耕種を業とす、其の他、木工、金工等ありて半開の種族たるに近し、住屋相隣接して集團部落を爲し道路を備ふ、公廨に二種あり、一は杙上式に作られ兒童の宿泊所に用ひ、一は普通の會所に充つ、女系的の家族制行はるるが故に男は女家に入る。

**ツオオ**(約二千三百人)は臺島の中央に於ける高地(九三方里)、林產、製腦、石油の關係よりして屢〻其の區域に居りて農事を務め狩獵に從ふ、男女共に上部の切齒を拔き、耳朶に穴を穿ちて貝殼製新月形の耳飾を挿入す、杙上式の公廨を作り未婚男子の宿泊所に充て、又は公議所に用ひ、女子の入るを嚴禁す、嘗生兒を不祥と爲して必ず其の一人を殺すの風あり。

**ヤアミ**(約一千七百人)は平坦の地に乏しき紅頭嶼(Botel Tobago)(三カ里に住みて農事に從へり、孤島に居るが故にや蒙昧無知にして生蕃中最も劣れるものなるべし家屋は木柱、石壁にして粘板岩にて家根を葺き、石垣を設くるなど頗る堅牢なりと云ふ。



さるべらず、男女共に手機の粗布を纏ひ、男子は腰を、女子は耳朶に夜光貝を懸く、木盆、椰殼匙、紫燒土器を製し木偶、土偶又は舟の模型を作れり。

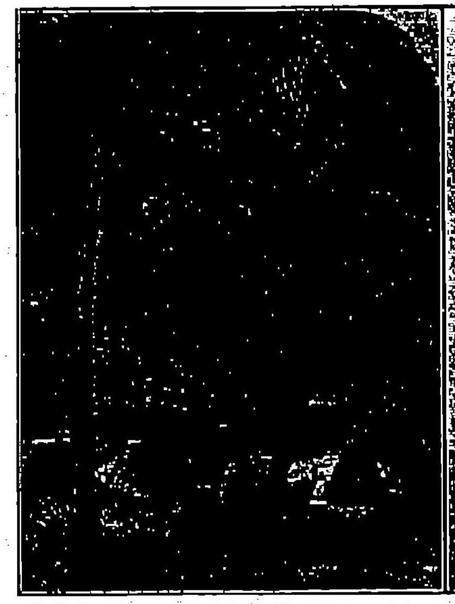
**ホプア**(Hoyus)はフープア(Houyes)又はアンメイメリナ(Anta Imerina)と稱す、マダガスカルの最要住民たり、今を距ること八九世期以前に於てマライ群島より「プラホス」(Prahos)(天秤舟)に乘りて漂着せしものなるは口碑並に體質、言語の證する所なり、體軀小さく、皮色はカリーブ的にして、髮は黑く滑かに、髮は少なく、額は丸く後部に偏平にして額廣く斜に、顏骨秀いで、鼻短く唇強く、顎骨は少しく突出せり活潑にして才氣あるも狡黠にして殘酷なり、鬪爭を好むも尙武の風あり。

**(c)ポリネシア派**は南の方新ゼーランドより北の方ハワイに至り、東はマンガレヴァ(Mangareva)より西はカロリナに達する廣大なる區域間に存する數多の島嶼に亘れるが、各地の離隔せるに拘らず、任意的若しくは偶然的に幾回の移住は繰り返へされたるが爲め住民の間には大差を見るに至らざりき、體軀高く、一七四糎、頭丸く、髮は黑くして直きを常とするも中には波狀若しくは鉤狀を呈するあり、鬚少なく鼻直く高く、眼丸く皮膚は黃色にして少しく燒け又は褐色を帶び男女とも姿樣頗る異れりと云ふ、本派はインドネシ

アのダヤク、バタス、アルフル、等より出でしものにて、マライ派が廣頭派たるに對し、長頭派に當れるが東西の二群に分かれ、甲者は新ゼーランドのマオリ（マオリ）を始め、ソシエテ、ハワイ、等の住人を包括して直顎長頭式なるが、乙者はトンガ、サモア、其の他の島嶼に亘りて亞長頭的と成りて少しくマライ派に接近せり。

**マオリ**（Maori）はポリネシア派の最たるものなり、皮膚は銅色を帶び、毛は黒く滑にして豊なるが、頭最く眼大きく、鼻は稍〻腐きも突起し、唇は強く頤は廣し、性怜悧にして武を尚び膽大なり、學ぶに速く摸倣に巧なり、新ゼーランド麻（Phormium tenax）にて製したる蓆を以て身を被ひ、沸地の棉衣を下着に爲す、島の羽を裝飾に用ひ犬皮にて外套を製し、文身するの風あり、耕種漁猟を勤め好みて水邊に住めり、各姓に長あり、各部族に總長あり、社會には貴族、自由民、奴隷の三階級あり、文字なきも長記、昔話、口碑、歴史は子々孫々に忠實に傳へられたり。

**カナカ**（Kanaka）はハワイ群島に住む、體軀優良にして面貌醜からず、方顱は前に凸曲し、眼は稍〻大にして虹彩黒く活氣を含めるが口大きく唇は所謂ハワイ的なり、鼻は低くして幅廣く褐色黒く波狀を呈し毛少なし、西洋人の到達以前に於ても既に文化の度稍〻高く農事を務め漁猟の法に巧にして漁猟に拘ならず、茅舍に起臥し「ナイ」（Lumai）（大屋）内に集まりて遊樂をなすとぜり。



[ダホメイ] 牡牛

[フィジー] 食人者

[サロモン島] 俘虜の内人

## 人肉を啖ふの蠻風

人肉を啖ふが如き忌み嫌ふべき事實は四洋人の所謂「アントロポファジー」(Anthropophagie)、「カンニバリスム」(Cannibalisme)と唱ふるものにして不期的と習慣的との二派に分かれ、甲者は飢僅、饑荒、等の如き偶然の發生に係る事情の下に現はるゝに止まり、乙者は常習、常例と成りて存し當該社會にありては榮も醜事として惟まるゝことなきなり、斯る風ふべき惡風も史前時代にはヨーロッパに洽く、我が群島、等に行はれしは慥にして、アメリカ發見の當時には同地殆ど到る處に啖人者の生存を認めざることなかりき、現時に於てもアフリカの內部、等に蠻風の存するは疑ふべからざるの事實なり、されば人肉を啖ふなど以て吾人の天性に基づくものなるべしと疑ふに足るものあるも、實は全然道德的にして、斯る惡習は文化の進み行くに從ひて漸次に其の跡を絕つべきものなりや明なり、而も營養上の必要に基づき肉食の補として啖人の行はるゝことあるは事實にして或は啖人の本體たるべく列ぜらるゝも、猪豚、其の他の食用家畜の飼育が發展するに及びて蠻風の消滅を來たせるはポリネシアに於て目擊せし所なり、爭鬪の際に於ける分捕品とし、怨恨に對する復讐とし、飢饉を衒し祕奧を張りて敵人の肉を喰ひ血を吸ふ如きはフィジー、新カレドニア、アフリカ、等に出現せしことあり、人肉を以て無上の美味と賞し嗜好の奴隸と成りて恥つべき敢行と知りて捨つること能はざるものなニューヘブライズ、アフリカのファン、ニアム、ニアム、モンブツ、等の部族中に見出だすこと少なからず、迷信的に勇者の肉を喰ひ、血を吸りて英傑に肖かり、近親を腹內に葬りて孝道親切を極むと心得るが如きパッタスあり、其の他、今に人身を犧牲に供し所謂「御下がり」を有り難く頂戴するものあり、蠻人の愚、未開者の間は誠に憐むべくして善道に導くの要あるなり、妄に誹謗視して歩者を貴むるは放なきなり。



**サモア人**は本派の最純なるものなりと信ずる所のサヴァイヤ(Savaiki)島を以てポリネシア人が其の發生の地との說は疑なき能はず、身長高く勇氣あり感覺あり、清潔を尚ぶも淫情の風あり、好みて文身を施し「ドラケナ」(Dracaena)樹の纖維にて製したる前垂様のものを用ふ。

**トンガ人**

**トンガ**(Tonga)人は身長著しく外觀顯る拳れり、性快活にして愛想好く、情に厚く人と交りて信あり才氣ありて道義心に富めることポリネシア人中の最たるものなりと稱せらるるが、住屋、器具、兵器、等の製作に就きては頗る好評あり。

**タイチ人**

**タイチ**(Taiti)人も亦本派の優等代表者たり、身體の發達好く男一七七糎相形美にして皮膚は赤褐色を有するも濃淡一樣ならず、鼻高く毛深し、性溫良にして勇氣あるも惰情にして窃盜に陷ゐるの傾きあり、舞蹈、唱歌等に熱中する娛樂の友たり。

西洋人がポリネシアに出現せしより爾來、本派の人員が漸次に減少するは顯著なる事實なり、或は必然的若しくは自然的なりとして優勝劣敗に歸するあり、或は不幸なる事情の併發に基づけりと爲すあり、ポリネシア人が爭鬪を好めるに銃器の輸入ありて殺傷を增し、迷信男尊主義虛榮心、殺伐的慣習等に起因する殺兒の惡風は依然として改まらざるに、飲酒の弊習漸く擴まり、梅毒、肺結核、癩病等の疾病は侵入以來、其の勢を逞しうし被服の變改は

從來の慣習、氣候の影響に戻り娯樂の制限は陰鬱を醸し、信仰の混亂は煩悶の源を爲せり、要するに宣教師、商人、海員、等の如き西洋人の行爲に統一の存するなきに當り、判斷取捨の能力に乏しきものの常として薄志弱行の人と成り、生存競爭上の敗者として身を終るに至るなり、而してポリネシア人の減少が一般的なるは事實なるも亦除外例の存せざるに非ず、ヌクノル(カロリナ)、フツナ、ニウハ(Nioulua)等の各島に於て生產の死亡に勝れるに依る所の良好なる增加狀況を目擊し得るに徵すれば古來の遺風と西來の文化との調和ありて生存狀態の改善とも成らば悲況が一變して順潮に復するの日も來らんか、然れども一面より察するに住民混同の結果として純種の支持に缺損を生せんも雜種の增加に得る所ありて人口總員に倍加を見るの傾向あり、之を以て悲觀の事由とは爲すべからず。

尙ほ一言を要するはポリネシアと概稱するも島嶼の火山質なると珊瑚質なるとに從ひて住民の進化に差等の現出せし一事なり、乙者は土地低く、小さく、氣候の特狀、植物の偏況、等は住者をして薄幸の人たらしめ、交通の妙趣を悟らしむるに至らざりき、實に低島のポリネシア人は農事を勵まず、獵漁に拙にして器物器具は粗製に限られ、裝飾的思想は殆ど缺如せり、珊瑚島のツアモツ人と高島のタイチ人とを比較せんか同じ種族に屬し互に相隣接するに拘らず社會の狀態、其の他に於て大差あるを認むるを得ん。

II. アメリカ副種は從來赤色人種若しくはアメリカ人種と稱へられて五人種の一に算へられしも人種學的研究の進むに從ひて黃白二種の混淆を本とし之に多少の黑種を加味したるものなるべしと認めらるるに至れり、本副種の根源は之をアジア又はヨーロッパに求めたれども未だ充分に推定し得るの運に至らざるが、アメリカ洲の先住者を總括して赤色式を組成するは甚だ理由なきことと云はざるべからず、蓋し有名の人種學者ドニケーの說に依ればアメリカの土人に就きて體質上共通なるものを求めんか、之に合格するは唯一の皮色あるのみ、然れども此の皮色の根底は黃にして決して赤に非ず、新世界の孤の小民族を擧ぐるも赤色を呈するものあることなし、偶〻赤色者に出會せんも少しく意を留めて熟視するの勞を取らんか、土人が其

の特習に從ひて赤色の顏料を皮膚に塗抹せるの跡を認むべく、エシオピア人の有するが如き赤皮は反りて白人と黑人との雜種に見るを得るのみ、要するにアメリカに於ける各種の土人は暗褐色乃至「オリーブ」色即ち蒼白色を滯ぶる黃色的の皮膚を有するものと爲さざるを得ざるべし。

身長に關しては最も高きパタゴン(Patago-)と最も低きチャンゴス(Changos)(チレーの北に住める小部族)との間に於て差等樣々あり、胴肢の比に就きてはパンパの住者に胴長く、アンデス山地の人に廣く短く、頭髮は直毛を主とすれども縮毛も少なからず、然れども各地に散居せる小種族間に體質上共通なる點なきにしもあらずして鼻は高く鷲嘴狀を呈し頭形の尖頂的なること、額の狹隘なること、等は蕃大陸の住人に對比して異なれる所なるべしと思意せらる、又一面にはアンデス山脈中に棲めるものには白種的に傾けるあり、メキシコ灣の沿岸にはカナリア群島の白人が混和せしやの疑あり、グリーンランドに近づけばスカンヂナビア的の分子の加はるを見るべし、要するにアメリカの先住者は黃種にして之に幾分かの白人的血液を混せしもの、如し、今玆に本副種を分ちて北、中、南の三派、赤皮、メキシコ、アンデン、オリノコ＝アマゾニアン、東ブラジル、パンパ、ソエゴの七群と爲す。

北派即ち赤皮(Red Skins)群は第十六世紀の頃約百五十萬人を算して北アメリカの要部を占めしが、人員は住域と共に漸次に減縮して全滅も遠からざるべしと疑はる、其のアサバスカン(Athapascans)は北、西、南の三部に分かれ、甲者は身長中位(一六六糎)にして中頭を有しマケンジー及びユーコンの森林地に住みて獵漁に巧なり、乙者はフーパ(Houpas)と稱してオレゴンの南部、カリフォルニアの北部に居り、丙者はナヴァジー(Navajos)及びアパーチャ(Apaches)よりなりてアリゾナ及び新メキシコに住めるが、身丈稍高く(一六九糎)頭形少し廣く、平闊を好み掠奪を行ふの風あるも農業に從事せり、其のアルゴンキアン(Algonquians)はハドソン灣、ビ河、アレガニー山脈に達したり、目下は九萬五千人を以てカナダの東部幷に合衆國の北東部に住み、チップワ(Chippewas)、オッタワ(Ottawas)、モヒカン(Mohicans)、チェイエンス(Cheycunes)等を含めるが鷲嘴狀の鼻を有し、外觀頗る擧がり、殊

に來侵者に抵抗せし勇を忘るべからず、其のイロコイアン (Iroquois) (約四萬三千人)は前者に酷似せるがエリエ、オンタリオ、ヒューロンの各湖の沿岸に住みてイロコイ (Iroquois) 及びヒューロン (Hurons) の二部に分かる、其のムスクホジアン (Mu-khogeans) はアパラチ (Apalachie)、ナッチェズ (Natchez) 及びクリーク (Creek) 即ちムスクホギー (Mush-hogie) 等より成れるが甲者は其の跡を絶ち、乙者は將に全滅せんとし、丙者は身長中等、皮色は黄にして褐色を帶ぶ、往昔は武を好み、專ら狩獵に從事せしが、一八三三年を以てミシシッピ沿岸の住地を讓りてインヂアン領土に移り農牧を勤め基督教を奉じ自治制の下に生活すれども人口は漸次に減少せり、其のダコータ (Dakotas) は一にシュー (Sioux) と稱せらる、往時はミシシッピ河とロッキー山脈との間の地を占め十一部に分かれて強大の聯邦を組織せしが、身長骨格に壯ならざる所あるのみならず、中頭、秀額、眼稍斜に、髮黑く皮膚乾粗にして黄色を帶び、相貌畧がらず、而も獵漁に巧にして文化の度稍高し。

此等の種族の外、尙ほ太平洋斜面に若干の小種族あり、コロラドの「カニョン」地





方に居りて石灰的絶崖に存する天然の窖窟に棲める絶崖人 (Cliff dwellers) あり、メキシコ方面には石造の大屋 (Pueblos) に住めるプエブロあり。

中派即ちメキシコ群はソノリアン＝アズテク (Sonoriens-Aztèques) にしてメキシコ及び中央アメリカに住める土人を總括せり體軀中等、胴肢の比例好く、廣頭低鼻、秀額、狹額、唇厚く髮は剛く黑く鬚稀に、皮膚は黄褐色を呈す、其のアズテク (Aztec) (約十五萬人)は最後にアナウアク (Analhuac) 即ちメキシコに來住したる土人にして一三二五年を以てメキシコ市を建て長足の進歩を爲して文物にも見るに足るものありき、エスパニア人の來侵 (一五一八以後、永く壓迫の下に侮蔑を蒙りしも近年に至り漸く復起せんとす、其のザポテク (Zapotecs) (約二十六萬五千人)はメキシコの南部に住む、前者と同樣の文化に達せしものなるが、メキシコの獨立の爲に戰ひて殊勝なりき、メキシミリアン帝に反抗したる有名のファレズ (Juarez) は本族より出でたりき。

此の外、オトミ (Otomi) あり、身丈稍低く、頭形は廣頭よりは中頭に近く、メキシコ最古の住人と認めらる、タラスコ (Tarascos) (約二十萬人)はミコアカンの山

トトナック

マヤ

ロステク

モスキト

ウラチア

地に住みて繪文字(Pictographie)を有し、トトナック(Totunacs)はベラクルス方面に居り、マヤ(Maya)はユカタン、グアテマラ、サルバドル、ホンヂュラスに住む、體軀小にして太く、額骨秀で、鼻は突起して凸曲せり、來住期極めて古し、ワステク(Huastecs)はメキシコのタマウリパス(Tamaulipas)州に住む、體軀中位にして強健なり、モスキト(Mosquitos)(約六千人)はブリヮーフィールド(Blewfield)潟の近傍に居る、短軀にして皮膚は暗黒色を呈せり。

南派 即ち南アメリカのインヂアンを研究するに當り地理的の自然狀態に基づきてアンデス山地、オリノコ及アマゾンの平野、ブラジルの東部平野、パンパ臺地、チエラデルフエゴに分つを得べし。

アンヂン派はコスタリカより南緯四十五度に達するアンデスの山地を占むるが、皮膚は濃淡の一樣ならざる「オリーブ」的褐色を呈し、體軀稍低く、斜額平眼を有せり、其のチブチヮ(Chibcha)は北より南に趣くの順に從ひてタラマンカ(Talamancas)、グアイミー(Guaymi)、コロンビアのチブチヮ等を含めるが、多くはエスパニア語を用ひ、母語にて談ずるものは甚だ少なし、リオマグダレナ



キチュア

アラウカン

カライブ

のチブチヮ即ちムイスカス(Muyscas)は同族中にも最も進歩せしものなりとの聞えありしが、其の蹤を絶つに至れり、其のキチュア(Quichuas)はキトーより南緯三十度までのペルー及びボリビアの高臺地幷に沿岸地に居りて住民の要部を爲せり、身長短く廣頭、退額、額骨稍秀いで、皮色は「オリーブ」的なり、往古は六部に分かれ、其の一たるインカ(Incas)は智略ありて、富強の國を創立し、建築に、文學に、各方面に顯著なる發達を爲せしが、エスパニア人の來侵以來、漸次に衰退し、現時にありては農牧に從事し茅屋に接み飲酒に耽けるもの多きが如し、其のアラウカン(Araucans)は一にマプチヮ(Mapoutche)と云ふ、チレーアンデスの山地に住みて總員は四萬人内外と註せらる、廣顏、秀額、短鼻にして、大口、厚唇、皮膚は稍濃色を呈す。

オリノコ＝アマゾナス群はオリノコ及アマゾナスの兩河の流域に屬する平野幷に森林地に棲息せる土人を總括す、其のカライブ(Caraibes)は語系的に一群を爲して、グイヤナ、ベネズエラ、アンチル、等に散在し、大陸にありてはヤプラの水源より南緯十四度までに最も多く、アマゾナス以南のブラジル

中部の地に起りしものの如し、アンチル方面に移住したるはコロンブスの到着以前二三世紀位なるべしと推せらるるが、今や殆ど絶滅して僅にグイヤナに近き島嶼に少數を存するのみ、グイヤナ在住のカライブは體軀小さく男一五八糎女一四五糎中頭を有し、皮膚は褐色にして黄色を帶ぶるが、身體に塗料を施すの風あり、アンチルに居住せし往昔のカライブは身丈短く、皮色淡く、額骨に壓迫を加へて頭形を扁平に爲すの奇習と人肉を啖ふの惡慣とを以て聞えたり、其のアロワック(Arouaks)即ちマイプル(Maipures)はグイヤナよりオリノコ及びアマゾナスの兩河の水源までの間に散居せるが、ボルトリコ、ハイチ、ジャマイカ及びクバの先住者がアロワックなりしは地名に依りて推斷せらるるも、茨に絶滅の悲運に會ひたり、其のパノ(Panos)は東ペルーの北西部を主としブラジルの西部、ボリビアの北部に住めり、其のミラニァス(Miranhas)はイスァ(Iça)及びヤプラの沿岸に住み、黒髪は滑なるか若しくは波狀を呈し、顴骨秀いで、頭長く、皮膚は褐色を呈せり。

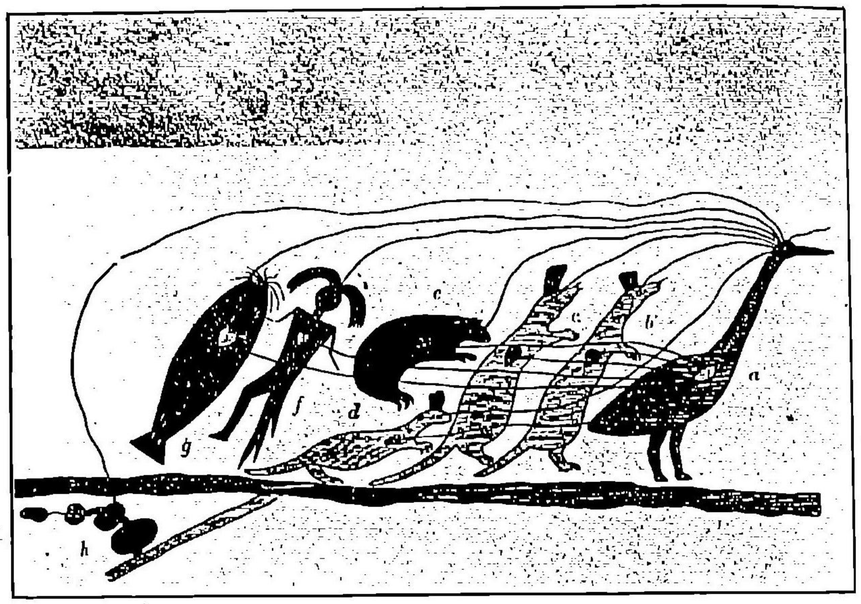
東ブラジル群は北の方、小アンチル列島より南の方パラグアイに達するの地域に棲居し、皮膚は黄色にして赤味を帶び、方頭、滿面、鼻は短く狹く低く、眼は小さく、斜に外眦昂り、鬚髯稀にして相貌女性的なり、又胴太く僂廣きも手足の纖細なるもの少なからず、其のボトクドス(Botocudos)は本名をアイムル(Aymoure.)と云ひ、東ブラジル最舊の住民と認めらる、唇及び外耳に奇異なる裝飾を加ふるが故に異名を以て世に知らる、其のグアラニッピ(Guarani-Ipi)はブラジルの南西部には僅少なるもパラグアイには稍多く、幾多の小部落を爲して生存せるが、發生地はパラナとリオグランデドスルとの灌域なるべし、此の外に數多の小種族あるも枚擧に遑あらず。

パンパ群は大コルヂレラの東、パラグアイより大陸の南端に達せる地域に居住する土人を總括せり、體軀太く短く筋力強く、頭丸く、額狹く、鼻低く、口大きく、唇厚く眼小さく、遊牧するあり土着するありて半開の民と認むべきものなきにしもあらず、パンペアン(Pampéens)は身丈高く(一六八糎)、皮色濃褐にしてチァルア(Charrua)、プエルチェ(Puelches)、テェルチェ(Tehelches)(南人)、ガウチォス(Gauchos)(東人)等を含むが、チァルアは既に全滅し、プエルチェはパンパの南部より

ボトクドス
グアラニッピ
プエナゥ

オコロラドの北に居るを常とすれども稀にはリオネグロに赴くことあり、遊牧に従事し馬上獵者として「ボラ」(bolas)一團の飛礫繩を用ひ巧に野獸を捕獲せり、ガウチョ(Gauchos)はパンパに棲みて放牧の取締に當れり、騎馬に巧にして能く「ナバヒア」(navaja)「ボラ」(bolas)「ラッソ」(lazo)を使ふ、テエルチの即ちパタゴン(Patagons)(約二千人)は大陸の南端リオサンタクルスとマジラン海峽との間に棲む、體軀の高き一七三糎乃至一八五糎を以て聞え、皮色黒黄直髪、方顔、狹鼻、斜眼、秀顴、幅頭なり、遊牧に従ひ狩獵を好めり、石器を常用すれども亦金屬を扱はざるに非ず、

フエゴ群即ちフエギアン(Fuegians)はチエラデルフエゴに棲みて一小群を爲せるが、皮膚は褐色にして淡く赤味を帶び、頭大きく顔廣く、眉毛濃く顴骨秀いで、虹彩は褐色を呈し、鼻は上狹下廣、唇厚く齒美くし斯の如く南端の住人に蒙古式の存するは北端のエスキモの蒙古的なるに合はせ考ふべし、猶若しくは海豹の一枚皮を以て身を覆ひ、樹幹を束ね細枝を載せて小屋を作り、獵漁の外野草を採り貝類を拾ひて衣食の料に供す、性質温和にして共存を爲すも首長を戴くことなし、器物は石或は貝にて作り始原的の武器を用




描畫的睛願卷(チップエイ)

マオリの文顔

マルキザスの文手

## 描畫的請願書

描畫的文字(Pictographic)はメラネシアの土人を始めとし、オーストラリア土人、ボシェスマン、等にも其の跡を存せるが、アメリカの土人が最も得意とする所に係れり、本圖は一八四九年に於てサッブアイ(Chippewas)(土人の部族)がアメリカ合衆國の大統領に提出したる請願書にしてスーペリオル湖(圖の下部に横はれる黒帶)の請り、道路(圖の左下隅にある斜線)の右側に於ける若干の小湖(h)に關する所有權を主張せるものなり、主唱者(α)は鶴を氏物(Totem)とせる氏族の首長にして該湖に對する意見ありて(湖を眼に擬さ)之を大統領に致さん(眼より出づる短線は大統領に達すべきを示す)とせしに(b)(c)(d)(e)(f)(g)の各氏族も意見願意を同じうする(各氏物の眼より出づる線は主唱者の眼に達して見る所を同じうするを示し、心臓を線にて連れて願意の同じきを表はせり)次第を描出したるものなり。

## 文顔文手

文身(Tatouage)(タヒチ語の「タッツー」より來る)は人身の外面に不滅的の圖樣を作出するにあり、方法としては傷痍式と刺墨式との二種あり、圖樣には單なるものに數條の直線曲線より成るあり、復雜なるものには模樣、畫樣あり、起源甚だ古く石器時代に於て既に表現したり、用は記章として起り漸次に進みて裝飾と變じたりと考ふるを至當とす、アイヌの婦人が入墨するは記號的にして大和種族の或者が施すものは裝飾的にして畫樣には巧妙なるものあり、アンダマンのミンコピーは全身に幾條かの傷痍線を作り、新カレドニアのカナックは凸出せる突傷的に奇樣を作れるが、オーストラリア土人は傷痍に炭粉を挿入せり、ニューギニア、ニューヘブリデ、等の土人は刺墨式に依れるも、ニュージーランドのマオリには一段の進歩を見、ハワイの土人は花卉鳥獸の圖を刺出せり。

よ、金屬品を扱ふは近時の事なり、其の其のアラカルフ(Alakaluf)は二百人ては主島中に廣く多く住みしが白人減少して目下は一千人内外を算するに過ぎざるべし。

## 壬、言語の分布

アリストテレスの言に曰く禽獸に聲あり、人に語ありと、實に古來先哲の間には言語の起源に就きて論議頗る多く、或は神授に因れりと爲すあり、或は規約に起れりとするあり、吾人獨得の妙技若しくは能力活動の結果に歸するあり、然れども現存の言語九百種乃至一千五百種に就きて其の起源及び進化の蹟を尋ね、現代の事情に基づきて往時の變遷を探らんか、蓋し思半に過ぐるものあらん、劣等の蠻人が語るに拙なる事實に鑑み、兒童が言語を習得するに至るの次第に察せんか、言語に關する進化の狀況、發達の由來を了知するに困難なかるべし、抑、吾人の言語なるものが始原期にありし當時には禽獸の發聲と

多く擇ぶ所なく極めて意想の表出に拙なるものありしならんも、擬聲(Onomatopée)暗比(Métaphore)類似(Analogie)等に據りて漸く語意を精しうし、語數を增し、四圍の事情に起因せる思想の發展に促がされ、永き年月を經過する中に、吾人進化の根本たる彼の積成性に基づきて遂に現時に於けるが如き情況を呈するには至れるなり、而して現在世に行はるる所の言語に就きては本語(Langue)、語派(Dialectes)、變語(Idiomes)、土語(Patois)、生語(Jargons)等の變差甚だ多く、其の主要なるもののみを擧ぐるも二百五十有餘を算するなるべし、されば博言學者は理論的若しくは自然的に各種の言語を分類せんと試みたり、甲者は言語の構造のみに據りて類別を爲し、乙者は各地に行はるる言語の間に存する關係を多方面より考査して系統を立てんと案したり、理論的類別法の一に依れば、合成語(Langues synthétiques)と分解語(Langues analytiques)とに區分すれども語系上關係の深きものを離隔せしむるの大缺點あり、而して自然分類法の一たる系統法(Classification généalogique)は單音(Monosyllabique)、連綴(Agglutination)變動(Flexionnel, amalgamant)の三式を設くるにありて、頗る巧妙なる所あるも亦此等三式の中に編入し難きものの存するあり、且又此等の三式は毫も言語の進化上に關することなく即ち言語は單音に生れ、成長して連綴と成り變動に老熟せるものと認むることより考ふれば簡潔にして明確、達意上に便なるものを優視すべきなれども形式の不備を補ふに實質の趣味を以てするもの少なからざれば、言語の優劣は輕々に判定し得ざるも、智力の活動、思想の情態等を寫出し得て妙なるが故に文化の度を忖度するに資して可なり。



單音語(Langues monosyllabiques)は孤立せる語根(Racines)より成りて語體に變化變動を認めざるものにして語の主客の如きは章句中に於ける位置に依るものとす、連綴語(Langues agglutinantes)は若干の語根の連綴に成れるものにして、其の主語は語根を爲し他の語は語意を定むる爲めに前置(Préfixes)若しくは後置(Suffixes)として主語に添加せらる、又合成語(Langues polysynthétiques)は前者に類するものなれども、字母若しくは綴音を略し、省語を施して一語と爲せるの差あり、變動語(Langues à flexion)にありては一語若しくは一字母の添加に依りて語根に變形を與へて語意を完成せり。

單音語は漢語、チベット語、印度支那語、等を含みてチベット以東、太平洋に達し

北は萬里の長城に起り南は印度に到れり、博言學上の研究に依れば此等單音的の言語は連綴の變化より生じたるが如く推せられ又同音の語も發聲の調子に從ひて意義を變異するものあり。

漢語は漢族生成の原由と使用區域の廣大なるとに基づきて著しき異同變差を來たし、遂に地方に依りては全く互に相通ずること能はず、本語に因ある土語に就きて主要なるもののみを擧ぐるも五十餘種あるを致せり、其の北京語は直隷、山東、山西、陝西、等の地方に行はれ、其の南京語は江蘇、安徽、江西、等の地に、湖廣語は湖南湖北の二省、廣東語は兩廣地方に川ひらる、獨り官話と稱するものは清國內一般に通ずる普通語なれども官吏、文人、富裕者の如き中等以上に位する人士に非ざれば此の種の言語を知らざるなり、而して官話に二種あり、北京官話は主として朝廷并に官吏の間に行はれ、南京官話は眞韻と稱せられ文語として重ぜらる。

| 發音比較表 | 漢字 | 北京語 | 四川語 | 廣東語 | 漢字 | 北京語 | 四川語 | 廣東語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 甘肅 | カンスウ | コムスク | | 太原 | タイイウアン | タイイウエン | タイイウン |
| | 河南 | ホナン | ホナム | | 濟南 | ツィナン | ツァイナン | ツァイナン |
| | 安徽 | ニアンホエイ | ニアンフアイ | オンフアイ | 江寧 | キアンニン | キアンリン | コンニン |
| | 湖北 | フペイ | フペ | ウペク | 南昌 | ナンシアン | ナンチアン | ナムチェウン |
| | 浙江 | チオニアン | チェキアン | チッコン | 桂林 | クエイリン | クイリン | クアイラン |





連綴語は赤道以北、スーダンの邊境に達する地方の黑人語（Langues nègres）、前置（préfixes）に據れる赤道以南のバンツー語、後置（suffixes）の多きオーストラリア及びパプアシアの土語、印度の一平印度兩洋に蔓布せる島嶼に廣く行はるるドラブィーダ語、太アより滿洲に達し、トルケスタンよりウンガルンに到れる廣大なる地域にりあてタタル、蒙古、ツングス、フィン＝アルタイ語等を包括せるが、日本語、朝鮮語、アイヌ語、コーカシア語、等を孤立せしむるあり又日鮮群を以てウラル＝アルタイの中に組入るべしとなすあり。

黑人語はスーダン方面即ちニグリチアに行はるる若干の土語を總稱するものにして二十四語より成れり、就中最要なるはウロフ（Wolof）と爲し、其の他にマンデ（Mandé）、フェルプ（Feloup）、ソンライ（Sonrai）、ハウサ（Haussa）、ボルヌ（Bornu）、クル（Kru）、エグベ（Egbe）ミチ（Mitchi）、モスク（Mosgu）、バギルミ（Baghirmi）、マバ（Maba）、等ありて純然たる連綴語なるも亦之等に同一の根源を與ふること能はず。

バンツー即ちバヌツー語はアフリカに於てカメルンよりモンバスに至る線以南に

行はるる若干の土語を總括せり、前記の黒人語には毫も關係なく、反てハム的の語に多少の脈絡の存するやに推せられ、語の組成上に關し前望のみを川ふるを特徴とす、例へば「バ ワ」(Ba-Wa)或は「ワ」(Wa)は複數を表はし「ムウン」(M'un)或は「ウム」(Um)は單數を示すべきものなるが、ゴゴ(Gogo)の國民を「ワ ゴゴ」(Wa Gogo)と云ひ「ゴゴ國の人」を「ムゴゴ」(M'Gogo)と云ふが如く「ヌッ」(Nu)は男子の意なるが、一人の男子を「ウムヌッ」(Um Nu)と稱し、多人數の男子を「バヌッ」(Ba Nu)と稱するが如し、語法の整へるのみならず、流暢にして音調の佳なるを以て知らる。

合成語は二百有餘の土語より成れるも悉皆アメリカの最舊住民たる所謂インヂアンが使用せるものに係り、東部の山地幷にアマゾニアの森林地方に行はる。

膠働語は最も廣く行はれて二派に分かる、其のハム＝セム(Ham-Sem)派はアフリカの北部、スーダンまでの地幷にアジアの南西部、アラビアよりイラーン高原に至るの地に行はる、其のアーリア(Arya)派は印度よりヨーロッパに亙れる地域に行はれ、フランス、イタリア、エスパニア、ガレゴポルチュガル、ルーマンシュ(グリソン地方)、ラヂン(チロルの南東部)、ロマーニア等の各語より成れるラテン群、イギリス、フリゾン、スカンヂナピア(スエリゲ、ノルゲ、ダンマルク)、ドイツ(ザクセン、ハンノーフェル、等に行はるる低ドイツとバーデン、ユルテンベルヒ、バイイェルン、エステルライヒ、等に行はるる高ドイツ)等の諸語より成れるゲルマニア群、ガエリック(スコットランド)、エルシュ(エールス)及び低ブルトン(ブルターニュの東部)を含めるセルト群、ルス、ボル、チェヒ、ズゴスラブ、ブルガル、等の各語を包容するスラブ群、其の他アルメニア語、イラーン語幷に印度の北西部、ガンガの谿谷に行はるる諸語、等を包括せり。

ギリシア群はヘルラス(Hellas)及びアルバニア(Albania)の兩語を含める小群なり、甲者は光輝ある古のギリシア語を傳承せしものなるも、傳承者たるヘルレーン(Hellnes)にはスラブ的血液を交えたる跡顯著にして、乙者はスキペタル(Skipetar)人の自稱の所川に係りて、語系上直接の關係に乏しきも、現時にありては甲者及び乙者に言語を傳へ、乙者は甲者に血液を交ゆるの傾向ありと云ふ。

ラテン語は寧ろ新ラテン語と稱すべし、ローマ人が大帝國を建設せし當時、ラテン語は武器に隨伴して各地に傳搬せしも殊に西ヨーロッパに於ける奏功に著しきものあるも、然れども、兵士、商賈、等の訛傳に據れるが故に正格なる言語の勢力は比較的微弱にして、土語の影響は、徙移者がローマの文明に浴しキリスト敎を信奉せし

ギリシア語

ラテン語

に拘らず、文法に立入り混淆を誘致して、遂に中紀第九世期頃より四ヨーロッパに於て新ラテン語（Langues Neo-Latines）と概稱する所の若干語は現はれたり、即ちイタリア語及び其の屬語あり、「オック」語（Langue d'oc）の「プロヴェンサル」（Provençal）、「ランゲドシアン」（Languedocien）、「リムーシン」（Limousin）、「ガスコン」（Gascon）、「カタラン」（Catalan）等あり、「オイル」語（Langue d'oil）の「ロロン」（Wallon）、「ピカール」（Picrd）、「ノルマン」（Normand）、「サントンジョー」（Sa'intongeais）等あり、此の「オイル」及び「オック」の兩語は殊にフランスにありては國語の下に方言として存するに過ぎざるもの多し、而してエスパニア語を爲せる「カスチヤン」（Castillan）、ポルトガル語を生みし「ガリシアン」（Galician）、ドナウ下流の沿岸に於けるロマーニア語あり、其の他「グリソン」（Grisons）が用ふる「ロマンシュ」（Romanche）、南チロルに行はるる「ラディン」（Ladin）等あり。

ゲルマニア群はヨーロッパの中央井に北部に於て數多の枝語を包括せるが、ツートン、スカンヂナヴの兩部に分つを常とすれども、イギリス語を割きて一部と爲すを適當とす、蓋第五世期頃の古「フランス」語及び第十一世期頃の古「サクソン」語が本語を組成する上に於て要素たるのみならず、文法の極めて平易なるはツートン式の語に認め難き特性を有すると同時に世界第一の有力語なればなり、而してツートン部には中央ヨーロッパの高地に行はるる高ドイツ語あり、ルーテル以來ドイツの文語として用ひらるる、低ドイツ語あり、中央ヨーロッパの低地に行はれ、ネデルランド（オランダ）、フレミシュ（ベルジック）、フリジアン（Frisian）井に「プラットドイツ」（Plat Deutsch）即ち「サクソン」語、等を包括せり、スカンヂナヴ部にはスエリゲ、ゴーツ、ノルゲ、イスランド、ダンマルク、ユトランド（Jylland）等あり、而して夙にドイツより離れたるが爲之との別は判然たるも亦オランダ、フリジアン、低サクソンに接近せる所少なからず。

スラヴ群は使川者の多數なると行はるる區域の廣大なるとを以て著はれ、分れて三部を爲す、其の東スラヴは本群の中堅にしてロシア（大ロシア、小ロシア、白ロシア）及びユゴスラヴ即ち南スラヴ（スルビヤ、セルボクロアシン、スロ等ヴェス）を含み、其の西スラヴはボル、ヂエヒ、スロヴアク、ソラブ、等を容れ、其のバルトスラヴは往時に於てはエルベとニエメンとの間の地に亘りてエンデ（Ven'es）及びプルツイ（Prutzi）人の祖先をも包含せしが現今はリトアニアンとレットとの存するあるのみ。





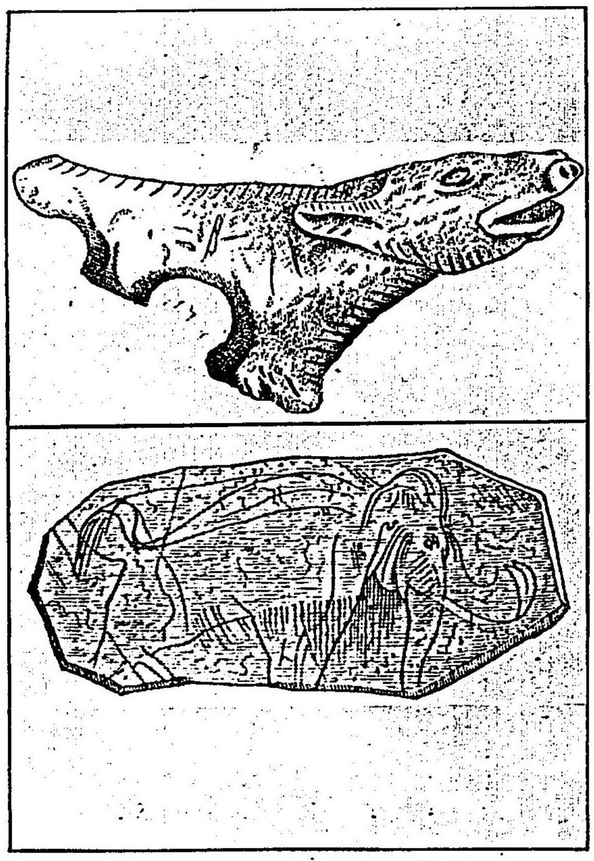
弦に一表を作りて言語の類別と分布との關係を示せば次の如し。

| 式 | 族 | 派 | 群 | |
|---|---|---|---|---|
| 單音式 | 支那 | 支那 | 幹語、枝語、・變語、 | 漢語（官話、土語、等）福老 客家 苗子 猓々 西番 |
| | | チベット | チベット語 ヒマラヤ語 | ミシュミ（Michmi）、ボド（Bodo）、ガロ（Garo）、シンポ（Singpo）等 |
| | | 印度、支那 | | ミヤンマー（Myanma）語 パルマー ラファイン ペグアン タイ（Thai）即ちシアム語 シアーン、ラオス、カレーン、等 安南語 トンキン コシエンシーヌ モイ（ハー）等 フメル（Khmer）即ちカンボヂア語 |

提要地理汎論　人類地理　言語の分布

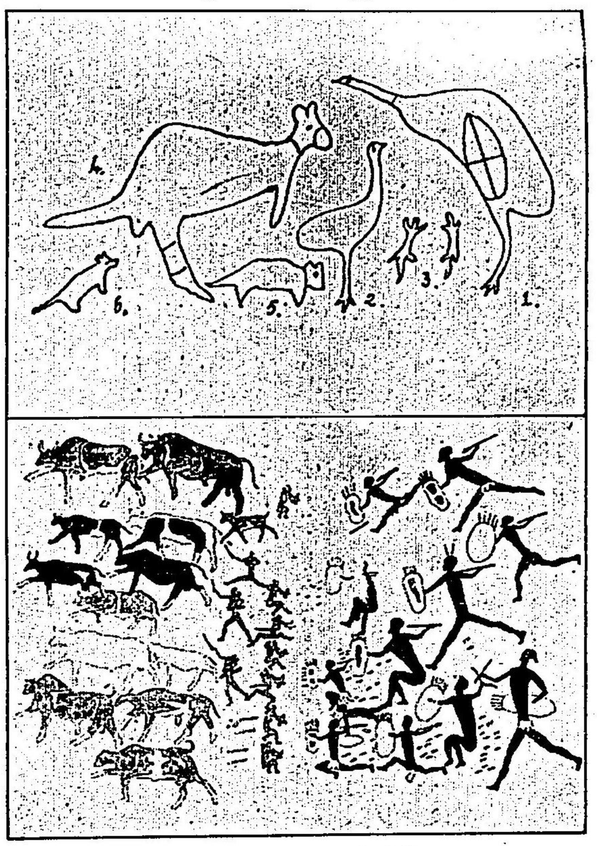
| | | | |
|---|---|---|---|
| 混淆式 | ニグリチア派 | 東中西部 | フラ人(Fourava) メヒーレ(Nouër)ヂンカ(Dinka)等 |
| | | | ハウサ(Haoussa) ワダイ(Ouadai) |
| | | | バンテ語 ヨロフ ミクミール ヤンヤンガ等 |
| | | 海岸 | クルー(Krou) アニー(Agni) アシャンチ(Achanti) アスロ ヒダス |
| | バンツー派 | 西 | ムポンゲ(Mpongwe) バヌダ(Banda) |
| | | 東南 | カフル ザンベジ(ベロンベ ベヒベ ヒダンガンダベ) |
| | | | セチュアナ(Sechuana) ヘケサ(Tekesa) |
| | ホッテントット派 | ホッテントット | ナマン(Naman) コロナ(Corona) ヒコヒコ(Hko Hko) |
| | | ブッシュマン | サン San) ボスキスマン(Bosiesmans) |
| | オーストラリア | | パルンカラ(Parnkalla) カニワロイ(Kanilaroi) キンキ(Kingki)等 |
| | | ネグリト | |
| | | パプア | |
| シマラ族イ＝ポリネ | マラ人 | | タガル(Tagal) イロカノ ビヒヤ タラオンド クナクマンギ ガクル ダヤク等 |
| | | | マラガシ(Malagasi) アンコバ(Ankova) サカラバ(Sakalava) ベチミサラカ(Betsimisaraka)等 |

彫刻



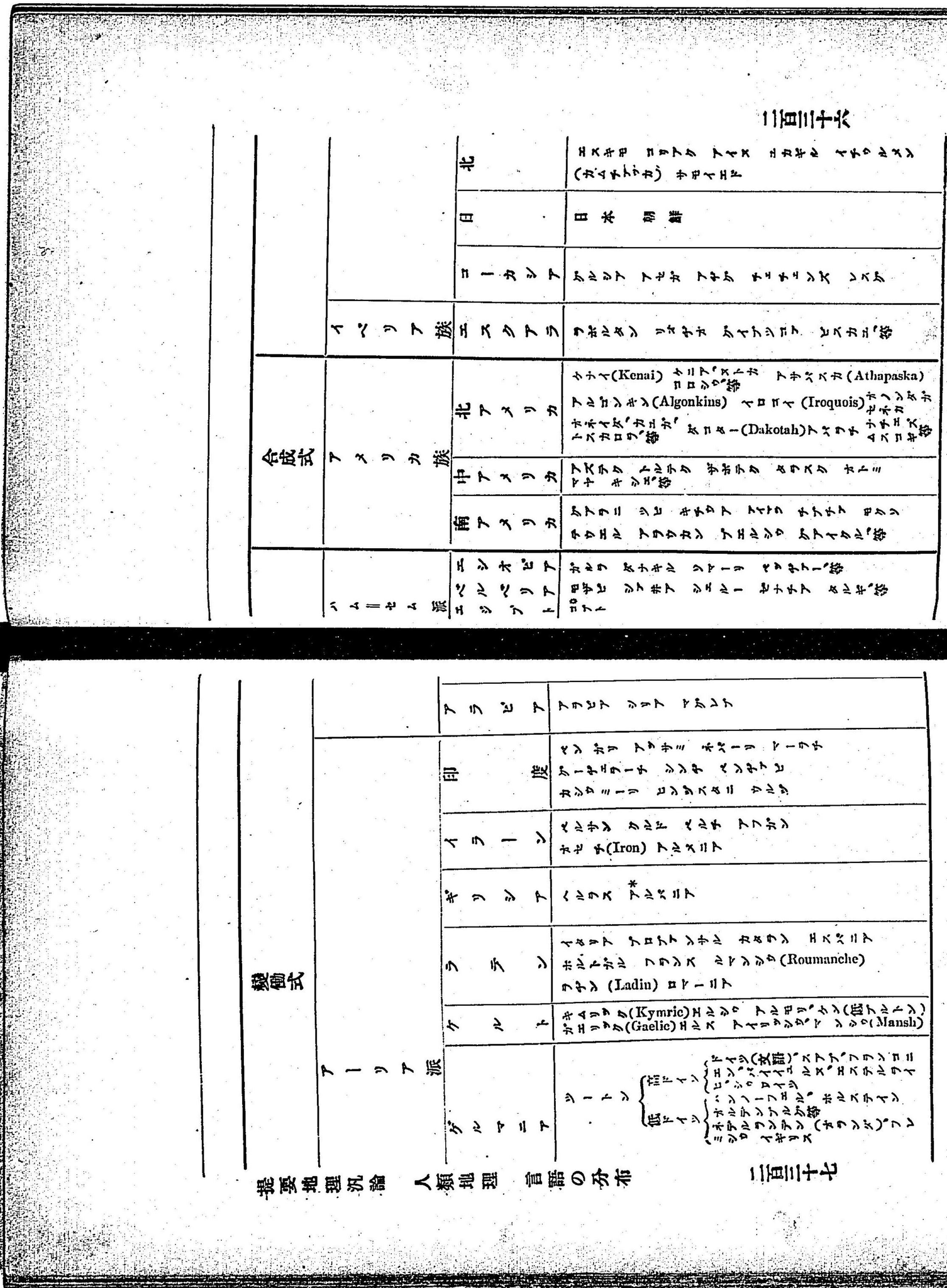
（上）ヒッポポタモスの頭—材料馴鹿角
（下）マンモスの圖—材料象牙

繪畫



（上）オーストラリア土人作
（下）ボシェスマン作

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アイヌ | アイヌ | 琉球 | 琉球 | 琉球 | 琉球 | 琉球 | アイヌ |
| 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 二、三〇〇 | 二、三〇〇 | 一、三〇〇 | 一、三〇〇 | 一、三〇〇 | 一、三〇〇 | 一、三〇〇 | 一、三〇〇 |
| 一、三〇〇 | 一


提要地理汎論
人類地理
言語の分布
三百三十七
綴術式
ハムーセム派
エベニ
シルベリアア
トアア
合成式
アメリカ族
イベリア族
ゲルマニア
ケルト
ラテン
ギリシア
イラーン
印度
日本
北
ニヴヒ
ユカギル
アイヌ
ニコバル
アンダマン
ニューカレドニア
ヴァヌアツ
ソロモン
ビスマルク
ニューギニア
ミクロネシア
ポリネシア
ニュージーランド
ハワイ
ミクロネシア
ポリネシア
ニューギニア
ビスマルク
ソロモン
ヴァヌアツ
ニューカレドニア
ニューカレドニア
ポリネシア
ミクロネシア
ニューギニア
ビスマルク
ソロモン
ヴァヌアツ

各派族群の言語に就きて使用者の員數を算して一千萬人以上のものを列擧すれば支那派に四、一〇〇〇萬人、マライ＝ポリネシア派に三〇〇〇萬人、セム派に三〇〇〇萬人、アーリア派に七、四〇〇〇萬人(印度群に二、七〇〇〇、イラーン群に二六〇〇、ギリシア＝ローマ群に一、六五〇〇、ゲルマニア群に二、一五〇〇、スラブ群に、一、三五〇〇)、等あり。

シュラデル(F. Schrader)に依りて世界總人口十六億を言語別にすれば

| | | | |
|---|---|---|---|
| インド＝ヨーロッパ語 | 八、〇〇〇萬人 | 單音語 | 四、二〇〇萬人 |
| 日鮮語 | 六〇〇〇 | ウラル＝アルタイ | 六〇〇〇 |
| ドラービダ語 | 六〇〇〇 | セム語 | 五〇〇〇 |
| マライ語 | 三〇〇〇 | 其の他 | 一、二〇〇〇 |



| | | |
|---|---|---|
| スラブ | 南東スラブ | 大ロシア　小ロシア　白ロシア |
| | 西スラブ | ブルガル　イリリア　スルア、クロアト |
| | 沿海スラブ | ポル　チエヒ　スロブアク　スロブエヌ等 |
| | | リトアニア　レット |
| スカンヂナブ | | イスワンド　ノルゲ　スエリゲ　ダンマルタ |



## 癸　宗教の分布

凡そ世界の各處に居住する部族、民族は土地の形勢、生存の情態、心性若しくは知識を異にするに拘らず、信仰的思想(Croyances religieuses)を有せざるものは殆ど罕にして之に加ふるに天變地異に對する畏怖、天賜地惠に關する報恩の如き念慮を以てするのみならず、宇宙の幽玄、造化の妙趣は世界觀(Conception)と成り、道義の發達、制裁の不備は來生觀(Eschatologie)を誘ひ、優秀者の影響創建者の勢力、奇拔の傳說等は現生觀を導きて遂に各種の崇拜、各派の宗教は實在するに至れるなり、されば教理、訓戒、信條に於て、祭祀、儀式、犧牲、供物に於て、祈禱、信願に於て、各、其の趣を異にすべきは勿論にして、信仰に關しては純然たる崇拜(Culte)に止まるなり、道義を加ふる宗教(Religion)あり、兩者の中間に位して程度差等の存するあり、要するに崇拜と云ひ、宗教と唱へ、道義と

稱するも、廣義に於ける吾人の自衛の道、自存の法にして吾人の天性、知識の程度、外圍の事情、等の影響せしが爲に種々樣々なる狀態は現はれしなり、信仰の効果に就きては勿論茲に是非輕重するの限りに非ずと雖も神格、經義、儀式、等の變遷に關して其の跡を尋ねんか、積成の功績空からずして進化發達を觀るを得、適應其の宜しきに叶はずして退化墮落を免るる能はざるものあるは事實に徵して明なり、崇拜即ち自然的信仰（Cultes naturels）に關しては諸物、其の物を神格として崇拜する所の氏物崇拜を始めとし植物崇拜、動物崇拜、等の如き諸物崇拜あり、天地、日月、星辰、山岳、河海、現象、元力、物素、等に精靈の備はれるを信じ、之を神格とせる精靈崇拜あり、人間崇拜（Anthropolâtrie）に關しては人物崇拜あり、祖先崇拜、英傑崇拜の如き神靈崇拜あり、殊に祭天、風水、神巫、妖魔、等の如き宗教的情態を呈するありて崇拜と宗教との連鎖を爲せり、宗教、即ち道義的信仰（Religions Gthiques）に關しては萬有神教、多神教、交替神教、二神教、一神特教、一神公教、の別ありて進化の狀態を明示せり。

氏物崇拜（Totemisme）は宗教の原形なるべしと認めらる、氏物（Totem）とは氏族、



族の氏神として崇拜を受くる動物を云ふなり、往昔はエジプトに鰐、蛇、牛、等を氏神とせる部族ありて、ギリシア最古の神は狐、狼、禽類なりしが、現時にありても北アメリカ、オーストラリアには鴫、鷲、「カンガル」、等を氏神と仰ぐ氏族若しくは部族は現存せり、鴫を以て氏物と戴ける氏族は鴫の子孫にして鴫を以て彼等族人の高祖なりと信ずるなり。

諸物崇拜（Fétichi-me）は生物なると否らざるとに拘らず、物には功德の存するあれば之を崇拜して其の功德に預らんとするにあり、神體（Fétiche）はポルトガル人の「フェイチコ」（Feitico）（魔物）にして天然物若しくは人工なるを問はざるも、信者の思想に依りては物體、其の物を崇拜するとの別を生じて程度の均一ならざるを示せり。

精靈崇拜（Animisme）は現存物に就きて形體と精神とを分別し、精靈は變態し得べしと信じ、萬物は悉く靈魂を有せりと爲すにあり、斯る思想の進化するありて天然崇拜（Naturalisme）と成り、輪廻（Métempsycose）現はれ、一轉して神靈崇拜に進み、祖先崇拜、英傑崇拜、等を觀るに至りしが、一面には神靈宗、妖魔宗（Magisme）、等の如き邪宗教は發生したるなり。

天然崇拜には天象崇拜、星辰崇拜（Sabéisme）、元力崇拜、物素崇拜、等ありて日月星辰、虹、雨、風、水、火、等に神靈の存するありと尊信するなり。

祭天宗は天即ち上天を崇拜し、自然を祭祠するにありて、支那に行はるるが、天然崇

諸物崇拜

精靈崇拜

祭天宗

拜中にありて優越なる發達を遂げたるものなり、北京に設けらるる祭天壇に於て犧牲を供へ、君主は天子として親ら祭祀し五風十雨の恩賜を祈ると云ふ。

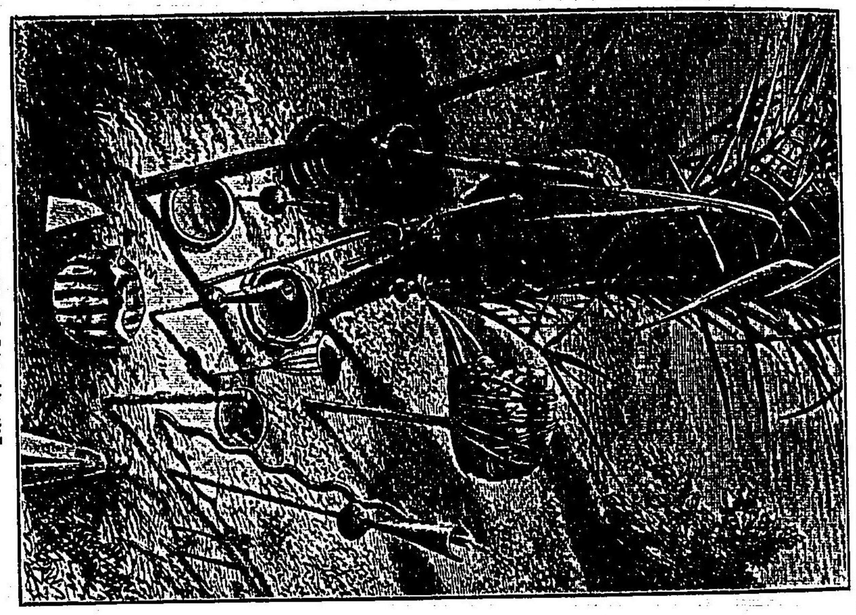
風水宗　風水宗は淡土に行はる、陰陽の理、木火風水、等の現象に依りて吉凶を判斷するにあり、易經之が基を爲し、迷信之が大成を爲せしものの如し。

神巫宗　神巫宗(Chamanisme)はシベリア井に蒙古、新疆の一部に行はる、巫神、及び惡神は各處諸物に寄宿して禍福を分配すと信じ、神巫(Chamans)の媒介に依りて禍を避け福を享けんとするにあり、シベリア井に西蒙古の一部に行はる、而してボンボ(Bonpo)宗なるものあり、本宗の一派なるも佛教の感化を受けて黒教(喇嘛の紅黄二教に對し)の稱あり、チベット最盛の信仰にしてウイ、ツァンの地方に信徒を有せり。

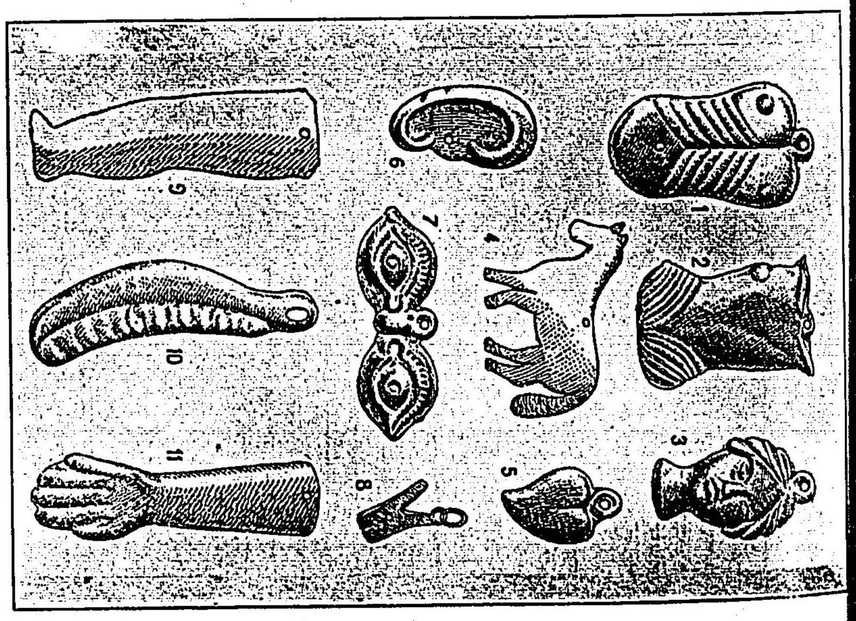
妖冤宗　妖冤宗(Magisme)は精靈宗の變態にして惡性の精靈即ち冤神を仰き以て玄妙不可思議を實現せしめ得べしと信ずるにあり、往時はエジプト、アッシリア、カルデア、等に行はれ、現今尙はアフリカの中央を始めとし、其の他各地に於て無智のものの間に存せるが、形式は星占(Astrologie)、降巫(Médiums)、天眼通(Voyantes)、明眼(Clair-Voyants)、蝙蝠(Philitres)、護符(Talisman)、呪符(Amulettes)、等極めて錯綜せるが故に悉く枚擧するに遑あらず、而も近世に至りては科學即ち物理學(光學、音學、水學、等)、化學生理學(催眠、動物電氣、等)の進歩に伴ひて黒冤術(Sorcellerie)の多くは降神術(Spiritisme)、又は白冤術(手品遊び)と成りしもの少なからず。



神靈崇拜は神聖なる靈魂を崇拜するにありて神人式に當れるが、各種の崇拜中



黑人の祈願所[奴隷岸]




病氣平癒の護符[ボルトリコ]

丘岡の蔵那樹の修に設けられし

## 黒人の祈願所

神(悪魔)黒人の蛇に乗りて空を翔ける形を彫刻したるもの

ひたるもの

ナーシャ即ち美麗なる黒人の頭形を彫刻したるもの

ロカレミヌスには猿性を表現して病の平癒を祈るなりと

オスと云ひて彼の世の神イフアに伴へる占具なり。

小棒は打鉢に血塗しくたる所断り川に蛇に巻りて蛇を沈き心臓、螺線状に巻かれたる所断の頭に「ルッ」(ホーン)製の盃にて支那人間にては一般に行はるゝ鮫の歯なりと云ふ。

## 病気平癒の護符

疾病の忘也、く厭ふべきは一にして支那に於ても、之を禁ずるの法には奇抜なるの法にして而も有効なるには驚くべきもの少なからず、左に掲ぐるは四国はルトリニ

1、胸前面(心臓)
2、胸前面(肺)
3、頭
4、馬
5、心臓
6、耳
7、目
8、眼病
9、足面
10、頭
11、手腕
S、歯痛
口中一切の病
耳病
頭痛、脳病
肺肋膜の病
背腰の病
心臓の病
眼病
足部の病
歯痛
属手の病
家畜疫病の際

在住の黒人間にては一般の護符なり、疾病に罹りたる際、之を懐中して祈願をこめ、且つ病の平癒を祈るをつねとせり、殊に病勢加回の際なるときは患者はメルクリ

ることなくして病の平癒に効果ありと信ずるなり、

## 病気平癒の護符

疾病の忘也、く厭ふべきは一にして支那に於ても、之を禁ずるの法には奇抜なるの法にして而も有効なるには驚くべきもの少なからず、左に掲ぐるは四国はルトリニ

1、胸前面(心臓)
2、胸前面(肺)
3、頭
4、馬
5、心臓
6、耳
7、目
8、眼病
9、足面
10、頭
11、手腕
S、歯痛
口中一切の病
耳病
頭痛、脳病
肺肋膜の病
背腰の病
心臓の病
眼病
足部の病
歯痛
属手の病
家畜疫病の際

様に調製したる形容な賜の護符なり、疾病に罹りたる後、携帯

「オス」と云ひて彼の世の神イフアに伴へる占具なり。

ロカレミヌスには猿性を表現して病の平癒を祈るなりと

小棒は打鉢に血塗しくたる所断り川に蛇に巻りて蛇を沈き心臓、螺線状に巻かれたる所断の頭に「ルッ」(ホーン)製の盃にて支那人間にては一般に行はるゝ鮫の歯なりと云ふ。

ナーシャ即ち美麗なる黒人の頭形を彫刻したるもの

ひたるもの

## 黒人の祈願所

丘岡の蔵那樹の修に設けられし



最も優たるものなり、英、蘇、露、仏は已に基督教、希臘教、回回教、等の信仰に帰するものの若しくは政治、軍事、学藝、技藝、等を以て世を益せしものの盛なる崇拝するにあり、而して祖先崇拝は父母を始めとし、祖宗の神霊を崇拝するにありて古来より広く各地に行はるる所なるが、其の程度には勿論差異の存するありて人智の発達と共に高度の進歩なきものあるなり、玄妙不可思議に陥ゐるの弊なく、高崇純潔にして而も道義的信念を鞏固にするに極めて有力なりと云ふ、蓋し戸々家々に於て祖先を崇拝する美習真慣あらんが、性自、資家の基を為し、家族、親族、民族の一致和合に資する所多く、民族を編成し、国民を組織するに及びてし、優勢なる援助を与ふくし殊に我が国の如き皇統連綿たるは啻に宇内に唯一無二の大資たるのみならず、構成の理に適くる次第にして大和民族に日本帝国に特殊の国結の存するは故なきに非るなり。

宗教は宇宙の玄妙を観じ、人生の微弱無常を悟り、現世に慊焉たらずして来世を慕ひ、神秘を旨とし道義を唱ふるを以て特徴とせる信仰なり、教義に基づきて数種を別つ。

万有神教(Panthéisme)は物質唯一を主義とし、万物皆神ならざるなしと為すにあり。

多神教 (Polythéisme) は數多の神の存在を信じ、主として偶像、星辰、庶物の三式に依りて表示せらる。

交替神教 (Kathé rothéisme) は唯一神を數多の現象、物素に依りて交換的に尊信す、吠陀神話の宗教即、婆羅門教の如き之に屬せり。

二神教 (Dualisme) は性質の相反する二神の存在を信ずる宗教なり、明暗教 Mazdéisme) は一に崇火教と稱せらる、ペルシアのゲーブル (Guèbres) 及印度のパルシス (Parsis) の奉ずる所に係れるが、善と明との神たるオルマズド (Ormazd) 及悪と暗との神たるアーリマン (Ahriman) の實在を信せり。

一神教に二種あり、其の一神特教 (Hénothéisme) は一部族、一民族が奉ずる所の一神教にして、其の一神公教 (Monothéisme) は廣く世界に亘れる一神教なり、兩者は等しく唯一神の存在を信じ造化を以て此の神の自由意志より現出せしものと爲す上に於て一致するも、甲者は地方的にして乙者は世界的なるの差あり、印度教は從來甲者に屬すと認められしが、信教を印度以外に有せる今日に於ては如何に遇すべきや、佛教、耶蘇教、回々教は乙者に屬せるが、猶太教の如きは甲乙號に屬すべきや判定し難し、要するに一神教を二種に別つは實際上無益なると云はんより反りて不便なりとす。



佛教 (Bouddhisme) は西紀前五世期の中葉に摩掲陀國に起りて印度に傳播したり、開祖釋迦牟尼佛 (Çakya-Muni Bouddha) (西紀前五五七—四七七) は釋迦族より出でし人にして俗名を悉達羅曇 (Siddhârtha Gautama) と云ひ恒河中流の一國、迦毗羅衛城 (Kapilavatt) の城主淨飯王 (Souddhot-na) の長子に生れ、二十九歳にして出家求道に決し、沙門として修行すること六年、豁然大悟して教滑弘法の佛陀 (大覺悟者) と成り、世に出でて精舍 (Viliarag) を結び、教團 (Sangha) を擴め、傳道教化に從ふこと四十餘年、終に八十歳の二月八日を以て無餘涅槃に入りぬ一說に西紀前五四三年とす佛陀は四民を平等に教へ導き、法を說くに普喩を以てせしも、毫に菲せしことなかりき、されば入滅後、比丘、長老、上座、等の結集ありて戒律 (Vinaga)、經理法則 (Dharma)、哲理 (Abhidharma) を纂定して苦集滅道の四諦を始とし八正道、五戒、十即障、六高德、等を傳ふるを得たり、爾來佛陀は衆生の救主と仰がれ、眞理の化現と崇められて、佛教は完成を告げたるが、チアンドラグプタの孫阿育王 (Asoka-Piyadasi) (西紀前三世期中葉の人) は佛法僧に歸命して經典を蒐輯し、五印度は勿論、遠くベルシア、バクトリア、錫蘭、緬甸、等の方面に布教を實行して佛教極盛の時代を現出せしめたり、然れども王の死後、佛教は上座正統派と大衆革新派とに別かれ上座部に十部、小乘 (Hinagâna) に二十部の現ばるるありて四分五裂の姿

を畧するに至りしを以て、カシミラの迦膩色迦王(Kanishka)(西紀第一世期)は大に佛教を保護し、上座派の正統宗義を結集して、其の論藏大毘婆娑を梵語にて記錄せしめしが、後出の馬鳴(Aryaghosha)は一切有部に一頭地を抜きて眞如生滅の理を明にし三佛身崇尊を說き彼れの所謂大法に據りて哲理と宗義との合一調和を圖りて大乘佛教(Mahāyāna)の基を爲し、支那、日本等に傳播すべき北方佛教の源泉とは成りぬ。第二世期には龍樹(Nāgārjuna)、提婆(Kāṇadeva)出でて大乘空教を唱道し、第四世期には無著(Asaṅga)、世親(Vasubandhu)現はれて、大乘有教を宣傳し、茲に相反せる兩教系の對立を見るに至れり、又此の兩教系以外に密教と淨土宗との興るありて、甲者は龍樹の創意に係り、龍智之を完成し、乙者は夙に馬鳴の唱えし所にして龍樹、世親、相承けて漸次に發達したり。

斯の如くして佛教は空理に走り奇說に亘り、多神教と化し萬有神教と變じ、密教には種々樣々なる迷信現はれ、魔術をも見るに至りしが、第七世期頃に及びては漸次に印度教に包括せられて皆では盛なる南北兩派とも自滅せざるを得ざるの悲運に際會し、僅にネパール、カシミラ、錫蘭に餘喘を保つに過ぎず。

喇嘛教(Lamaisme)は教理上より觀るときは大乘佛教に溫婆派の密教及び特吐羅(女神崇拜)を加味したるものに外ならざるも、制度と相俟ちて特殊の狀態を呈するに至りたり、佛教の始めて傳來ありしは第七世期なりしも、ポンポ(Bonpa)教徒井に佛教徒の忌む所と成りて辛苦の中に數世期を經過し、第十一世期に至りてカーダンパ(Kādampa)及びカルギュトパ(Kargyutpa)の兩派に屬する大喇嘛に高大喇嘛に主權を世襲的に附與して政教一致の基を爲し(一二七一)、其の後、明の世に至りてカーダンパ(Kādampa)及びカルギュトパ(Kargyutpa)の兩派に屬する大喇嘛に高位を授けて三派の鼎立を圖り主權を俗王に復せしめたり、然るにアムド(Amdo)國の僧ツォンカパ(Tsong Khapa)(1355-1417)は化身轉生を以て傳燈し、僧侶に帶妻を禁じて革新派(Gelougpa)即ち黃教、黃色の衣服を用ふ)を起こし舊派(Nyingmapa)即ち紅教と相對峙し、新設(一四〇九)のガールダン(Gāldan)の喇嘛院に居りて大喇嘛と崇められたり、二世の大喇嘛(Gedun-Groub)は喇嘛教制を完成して始めて「ダライラマ」(途賴喇嘛と稱したりしが、五世の逸賴喇嘛(Ngavang Blobzang)は政教一致の實を回復し「シェルワリンポチェ」(Gyelva-Rinpotché)と號し(一六四二)、清廷も政略上庇保を加へて蒙古、蒲洞、漢土(北四部)、等の信徒を管理せしめ、黃教を以て喇嘛正教と認むることと成りたり、而して正教の最高僧「ダライラマ」はルアッサ(拉薩)のプタラ(布途拉)山に居り、ダライラマと





ありて中絕せしが第八世期の中葉、ヨガーチャーリア(Yogāchārya)密教派の僧にサンタラクシタ(Santa Rakchita)及びパドマサンバワ(Padma Sambhava)なるものあり、チベットの王(Khri-Srong De-Tsan)(七四〇—七八六)の招に應じて入國し(七四七)、ヴアーニプッダ(Dhyāni Boudda)の崇拜を唱へサミヤス(Sa-Myas)に始めて喇嘛僧院を建立したり、開祖パドマは僧侶に妻帶を允許せしのみならず、女神、冤神の崇拜を混容せしを以て、ボンパ(Bonpa)教徒井に佛教徒の忌む所と成りて辛苦の中に數世期を經過し、第十一世期に至りてカーダンパ(Kādampa)及びカルギュトパ(Kargyutpa)の兩派に屬する大喇嘛に高大喇嘛に主權を世襲的に附與して政教一致の基を爲し(一二七一)、其の後、明の世に至りてカーダンパ(Kādampa)及びカルギュトパ(Kargyutpa)の兩派に屬する大喇嘛に高位を授けて三派の鼎立を圖り主權を俗王に復せしめたり、然るにアムド(Amdo)國の僧ツォンカパ(Tsong Khapa)(1355-1417)は化身轉生を以て傳燈し、僧侶に帶妻を禁じて革新派(Gelougpa)即ち黃教、黃色の衣服を用ふ)を起こし舊派(Nyingmapa)即ち紅教と相對峙し、新設(一四〇九)のガールダン(Gāldan)の喇嘛院に居りて大喇嘛と崇められたり、二世の大喇嘛(Gedun-Groub)は喇嘛教制を完成して始めて「ダライラマ」(途賴喇嘛と稱したりしが、五世の逸賴喇嘛(Ngavang Blobzang)は政教一致の實を回復し「シェルワリンポチェ」(Gyelva-Rinpotché)と號し(一六四二)、清廷も政略上庇保を加へて蒙古、蒲洞、漢土(北四部)、等の信徒を管理せしめ、黃教を以て喇嘛正教と認むることと成りたり、而して正教の最高僧「ダライラマ」はルアッサ(拉薩)のプタラ(布途拉)山に居り、ダライラマと

## 提要地理汎論　人類地理　宗教の分布

同格の「パンシエンエルテニ」(班禪額爾德尼)はタシルンポ(札什倫布)に住めり。

**白蓮教**　白蓮教は一に在理教と稱せらる、佛教の一變派なるも民心を惑亂するの恐ありて嚴禁者は死をも厭はざるに至ると云ふ、北淸地方に行はれ、信者の數は漸次增加するの傾向を呈せり。

**耆那教**　耆那教 (Djainisme) 即ち閻伊那逸摩 (Djina Dharma) は佛徒の所謂外道にして、毘濕奴 (Vishnuu) の化身なる第一耆那(世苦の超越勝者) リシアヴス (Richabha) に起り二十三世の耆那に至りて完成したりと稱せらる、其の第二十二耆那跋陁摩那 (Vardhamana) は利帝利の婆羅族より出でし人にして釋迦牟尼と時代を同しうしたりと「アザヴ」(無生)即ち物業と「サヴ」(有生)即ち精靈との存在を認め、不滅の精靈は物業より成れる外皮を被りて各種の生物を爲すとし、功德 (Dharma) は外皮を薄うし、即障 (Harma) は之を厚うするが故に各自に於て禁欲苦行を勵まば神木は禽獸に進み、禽獸は人と成り、人は解脫精靈、常滿精靈と化して二十四人の耆那 (Djinas tirthamkaras) が列座せる天界 (Nirvana) に上逸し得ると信ずるにあり、本教の信者は印度に限られ、約百萬人に計上せらるるが、農夫職工たるを厭ひて概ね商業を營めるに、淸廉潔白にして信用するに足るものありと云ふ。

**印度教**　印度教 (Hindouisme) は一に新婆羅門教と稱せらる、婆羅門教の變化と云はんより寧ろ墮落に生れたる特殊の混成教にして萬有神教、多神教、偶像宗、拜物宗等を包括し、婆羅門的經義、佛教的思想に交ゆるにドラーヴィダ、コラリア等の如き非アーリア的部族、民族の鄙俗陋習を以てせしものに外ならず、佛教興起の後、西紀第三世期の頃婆羅門教より派生したるも、一千餘年の星霜を混沌たる狀態の中に經過しつつ、一偉人の出でて之が統合を圖らんことを待ちたりき、然るに第八世期の末商羯羅阿闍梨 (Çankia atcirya) は內秘教と公開教との別を立て印度固有の思潮を振興せしが、吠檀多 (Vedânta) の哲理に據りて第二なき唯一を唱へ、梵 (Brahma) 即ち原一の最上精神 (Paramâtman) と差別の生活精神 (Djivatman) との同一なるを主張したり、宗義に就きては梵天 (Brahma) に毘濕奴 (Vichnou) 及び濕婆 (Çiva) を加へて三種現體 (Trimûrti) と稱し、三者を能造 (Radjas) (愛)、維持 (Sattva) (喜)、破壞 (Tamas) (悶) に擬し、英雄神「キリシナ」(Krischna)、「ラーマ」(Râma) を以て毘濕奴の化身 (Avatâra)、女神「パールバチ」(Parvati)、「カーリ」(Kali) を以て濕婆の化身と信じ、偶像、墳墓、遺物、動物、植物、庶物等の崇拜を混化したるが爲め、濕婆派、毘濕奴派の大別の現はれしのみならず、女神派、太陽派等の如き幾多の小分派を生じたり、新教の經典たる窣闍那 (Puranas) は經義、儀式等を支持するの力なく、卑陋を極むる俗習の襲擊に堪えずして皿特羅 (Tantra) (女神崇拜派の經典) は咒文 (Mantra)、咒字 (Bija)、咒符 (Yantra)、咒札 (Kavaca)、咒念 (Nyâsa)、咒印 (Mudrâ) 等の秘法を始めとし各種の慣行、迷信を許容するに至れり、斯くの如くして民間の信仰は墮落に墮ぐに墮落を以てして私利淫靡の風獨り殷なりしか、濕婆派の苦行は徒に慘烈な街ふに過ぎざりき。

然れども一面には宗教上の風趣に慨嘆すべきを覩じて之が改善を試み革新を

ユダヤ教

シク教

圖りしものありき、ラーマーヌジャは局限唯一論を唱へて特に南印度を教化し、第十二世期、マドワ(Madhva)は二元主義を說明し(第十三世期)、ラーマーナンダ(Râmânanda)は通俗的教化を重じ(第十四世期)、カビール(Kabir)は回教的感化に基づき唯一神を唱へて大に改革せんとする所ありて毘濕奴派の聖人と仰がる(第十五世期)、然るに其の繼承者即ち道者中に意見の異同生じて分派起りしが、勢力の最も盛なるはナーナクのシク教なりとす。

**シク教**(Sikhs)(弟子)は印度教毘濕奴派より出づ、開祖ナーナク(Baba Narnak)はカビール(Kabir)(第十五世期の人)の弟子と成り、印度教に回教的風趣を加へて、多神教を排し、迷信を破り、種姓を除き、最上の一神「ハリ」を奉じて偶像を廢止せんと唱へ、教團を創立し、自ら「グル」(Gur)(指導者)と成りて信徒を結集せしめんと勉めたり、第四世の「グル」たるラームダース(Ram Das)が政教一致の基礎を立てしより爾來、アムリツァルの本山は化して一政府と變ぜしが、モガル朝の忌諱に觸れて「グル」が誅戮の災に罹るに至りて、軍隊式熱狂心は大に加はり團結は益〻鞏固と成りて國中に一國を爲し勢甚だ振ひしが、イギリス人と戰ひて勝つこと能はず、遂に一八四六年以來忠實なる同盟者として今日に及べり。

**猶太教**(Judaïsme)はイスラエル人がモーセ(Moses)より受承したる一神的法制教(Mosaïsme)にして舊約全書の所載に係り、信條道義、祭祀儀式、民法刑律の三部より成れるが、ユダヤ人の性質に適合せし故にや結合力を強くし、萬難に堪えしめし効果に就きては實に驚嘆すべきものあり。

キリスト教

**基督教**(Christianisme)はイエスキリスト(Jesus Christ)の創成に係る一神教なり、使徒(Apostles)の宣道に從ひて教會は漸く擴まり、イエルサレム、アンチオキヤ、アレクサンドリア、コンスタンチノープル等の總司教を戴き、殊にローマの司教即ち法皇は全信徒を統轄して勢威強大なりき、さればアリウス(Arius)(二二〇—三三六)、ネストリウス(Nestorius)(三八〇—四三九)、エウテシエース(Eutychès)(三七八—四五四)等の異端を唱ふるありて信仰一致に不安の念を起せしのみならず、未開人の來徒ありて世を震駭せしめしも、教會は勇を鼓して之に當り、勝者として新社會を大成するに與かりて力ありき、然るに第九世期に及びて東西兩教會の分離は終に止むべからざるの事實として現はれ、第十六世期に至れば更に改革を唱ふるものありて新教(Protestantisme)の分立を覩たり、されば現時に於ける基督教徒に就きて教會別を爲して分類を試みんか次の如き狀況を呈すべし。

I. **ローマ公教會**(Eglise Catholique Romaine)は**ラテン教會**(Eglise Latine)、**西教會**(E. d'Occi

dent)と稱せられ、廣く世界の各地に亘れるが、我が國にては天主公教會として知らる、ローマ法皇の統轄の下にあるを特徴とせり、別に一致ギリシア教會あり、祭儀に異れる所あるもローマ法皇に從屬し、分れて一致アルメニア派、一致カルデア派、一致コプト派、等を爲せり。

II. 分離東教會(Eglises Séparées d'Orient)はローマ法皇を以て特殊の教長と認めず、分かれて四部を爲せり。

a. ギリシア正教會(Eglise Orthodoxe Grecque)はロシア教會、ギリシア(王國)教會を始めとしブルガリア、モンテネグロ、ローマニア、スルビア、ウンガルス、トランシルバニア、キプロス、等の教會あり、孰れも自治の教會なるが就中ロシア教會は強大なりとす。

b. コプト教會(Eglise Copte)はエヂプトとアビシニアの二教會を爲せり。

c. アルメニア教會(Eglise Arménienne)はグレゴリア派の教徒より成れり。

d ネストリア教會(Eglise Nestoriennes)は一に景教と稱せられ、カルデア派、シアコビ派、等の小教會を抱括せり。

III. 新教會(Eglises Protestantes)には幾多の宗派、分派ありて悉く枚擧するに遑あらざるも、教義に基づきて若干の宗式を設けんか、ルーテル、プレスビテール、イギリス、コングレガニスト、メソヂスト、等の數派に總むるを得べし。

**イスラム**教(Islam)(認從)はマホメット教又は回々教と稱へらる、モハンメド(Mohammed)即ちマホメット(Mahomet)(西紀五七一年を以てアラビアのメッカに生れ、同六三二年メヂナに死す)の創意に係れる一神教にして「神(Allah)は神なり、マホメットは其の預言者なり」を以て根本主義と爲し「コラン」(Coran)即ち經典「スンナ」(Sunna)即ち傳說及び「イヂマ」(Idjma)即ち詮衡に據りて經律を立て、「キヤース」(Qiyas)(義解)を施し、神秘を設けて漸次の發達を遂げたり、信者は自ら祈願布施、ラマダン(Ramadan)の斷食、メッカの參拜の四者を實行して造物主に直接するを得るが故に宗禮、宗儀、祭祀を要せざる答なるも、人間社會の本質は「最後の神使」が遺したる規定を無視せしめて「ユレマ」(Ulema)の階人は現はれて宗務法務を兼ね行ひ、教團宗社の組織成りて「シェイク」(Cheikh)(統領)を戴くに至りたり、而して本宗は法と劍とを提げ、政教一致の勢力に據りて領域を擴張し、一時は隆盛を極めしが、暫くにして大帝國は土崩瓦解して教徒の間にも四分五裂するを觀ざるを得ざりき、正教スンナ派(Sunnites)(約二億一千萬人)は傳說「スンナ」を信じ、アブベクル(Abu-Bekr)、オマル(Omar)、オスマン(Osman)の三「カリフ(Kalifes)」を以て正統の繼承者と認め、東方、北アフリカ、エヂプト、シリア=アラビアの四教團を包合せるが、其の他には八宗、七十二派の分立あるを觀るなり、就中最著しきシイヤ派(Schiites)(約一千萬人)は「スンナ」を棄てずして、教祖の義子アリ(Ali)を以て眞の繼承者と爲せり、而して神秘的主張を有せるスフイエ宗(Soufi-me)は北アフリカに於ける若干の教團、トルコに於ける僧團中に行はる。

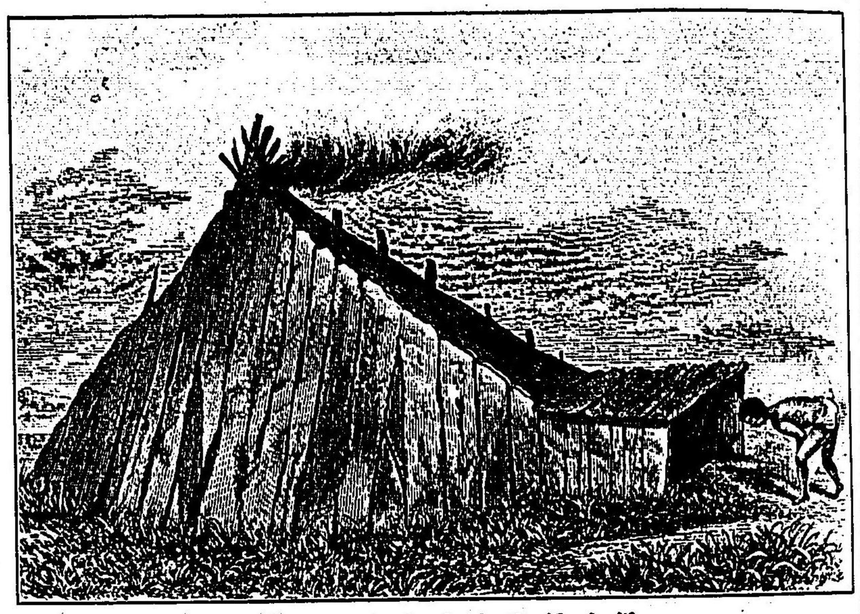


## 各種の崇拜、各派の宗教に就きて地球の表面上に於ける分布の狀態を觀

## 提要地理汎論　人類地理　宗教の分布

察せんか、崇拜は自然的信仰なるを以て小は未發風を脫せざる民族、部族に係はるものより大は高度の文化に浴せる民族、國民に關するものに至るまで、崇拜者其のものに密接して進化發達を遂げたるものなるが故に崇拜に様々ありて變差に限りなきを認むると同時に其の分布に就きては區々として廣大なるもの甚だ少なし、氏物崇拜、土人間に行はれ、諸物崇拜が中部アフリカの土人を主とせるは事實なるも、意外に廣き地域に亘れる各種の精靈崇拜の間に介在するを認むべし、殊に祖先崇拜は自然中の自然にして敬愛に基づけるが故に其の起源極めて古く、夙に其の發達を印度に認めしが、今に其の跡を絕つことなし、ギリシア人、ローマ人等も同じ思想を分ちたり、東洋方面にありて偉大の發展を遂げて支那、安南等に行はれ、就中我が國に於ては天然崇拜若しくは儒道、佛教の影響を蒙り、神道各派の淵泉と成りしは事實なるも、太古以來卓絕せる地位を確保して渝ることなし。

精靈崇拜に屬すべきものなるも宗教情態を呈するに至りたる神巫宗の



北アメリカ土人の板小屋

ブラジル土人の土小屋

# 居構の遊化　（其一）

居構（Habitation）は棲住者の特性に依り文化の程度に比例するものにして其の狀態に千差萬別は存するなり、人類が世に現はれしより以來、所謂曾天井生活を營みしこと案外に永く、意外に少なからざりしならんも、一面には天然に成れる避逃處を樹間、樹下、樹窩に求め、礁間、崖下、洞窟に探りしことありて居構の起因を爲せし次第は僅ずるに足れり、然るに周圍の事情樣々にして自然的に土地、氣候、天産、等の影響を受くるあり、人爲的に生活、社交、積成、等の刺戟を蒙むるあり、殊に生存狀態は漂遊式と土着式との二樣を呈して居構の進化に關係せしこと極めて大なるものありき。

居構の原形（Prototype）は風除け（Paravent）なるべしと爲すに不可なるを見ず、茲に風除と稱するは地上に幾何かの條枝を樹つるに過ぎずして或は集合的に作るあり或は二列を連行に作れるありオーストラリヤの土人間に存するものは殊に單簡にしてセイラン島のヴェッダー（Veddahs）、アンダマン列島のミンコピー、等は二本の杙と一本の横木とを用ひて支と爲し、ブラジルのボトクドス其の他の土人は濕木の幹を交叉し樹て懸けたる後、葉枝、椰葉、等にて蔽はんが、方形式若しくは圓形式の居構は茲に端を啓くなり、而して風除の上部を掩め、草束、樹枝、蓆屑、樹皮を用ひて各處の間隙を塡充し、風雨を凌ぐに便すれば粗造の小屋は現はるゝなりフエギアンの如く堅實なる枝條を用ふれば圓錐形と成り、オーストラリヤ土人の如く曲り易き葉枝にて作れば半球狀（蒲鉾小屋に似たる所あり）、ビクトリア湖畔には孤角的圓錐小屋は造られて兩者の折中に當れり、然るに雨雪、風力、日光を避くるの方法に一段の進歩を意味せる半穴居式の居構は小屋下の土間を掘り下ぐるにありてナックチ、カムチアダル、ギリアク、等の間に見る所なり、周圍に柱を樹て縱側面を地上に作りて家根と壁とを具備せる圓錐圓壔式の草屋（Paillotte, Chaumière）はシーザー時代のカアンボの所用に係り、現時のカツフルーズールーの所設に依れるが、ニジエル沿岸地方にも行はる、又方形式の居構にも同樣の進化ありて太平洋、印度洋、ギニア灣の沿岸地、其の他、內部の地にも林の高きを特徵とする木屋の行はるゝ處少なからず、特に海岸、湖岸、河岸には鳥の巢然たる始原的の樹上屋を始めとし各種の杙上屋は造られて漁業の便と防禦の利とを兼ぬるあり、乾燥地にありては夙に粘土の塊を利用して壁を築くの便を悟りたるなるべきも、一轉して天日乾の瓦片は作られて、往時はバビロニア人、エジプト人、等の所用を足し、當今も尙ほトルケスタン、メキシコ、スーダン、等の地方に行はる。



如きはシベリア在住の若干の種族間に行はるるが、宗敎の傳播は主として宣敎に依るべき筈なるに、イスラム敎は漂遊的アラビア人の展開に伴はれて舊大陸の沙漠帶に南隣北接する地域に擴まり、ローマ公敎はポルトガル人及びエスパニア人の攻略に從ひて南及び中のアメリカに亘り、ギリシア正敎はロシア人の侵略と共にシベリアに入り、又通商貿易の媒介に俟つことあり、而してローマ公敎がラテン派に、ギリシア正敎がスラブ派に、新敎がツートン派に於けるが如く、布敎が人種的に行はるることあり。

佛敎は釋迦牟尼の滅後一千有餘年を經て殆と其の跡を印度の本地に絕つに至り、僅に餘喘を錫蘭島に有つのみ、而して印度地方以外に於ける佛敎の現狀を察するに、往昔佛敎の興りし當時、北上して中央アジアに出で、愛育王（西紀前第三世期）が四方に宣敎せしめし頃、西域を經て支那に來りし傳道者ありしも奏功なく、後漢の明帝の世（西紀第一世期）迦葉摩騰も弘法を試みしが、効果著しからざりき、然るに第四乃至第十世期の間に於ては內には法顯、宋雲、玄奘、義淨、等の如き求法僧の出づるあり、外よりは菩提達磨、等の渡來あ

りて禪宗、天台、淨土、瑜伽、等の如き大乘的の各派起り、阿彌陀、釋迦牟尼、三寶、觀音、文珠、彌勒、等の崇拜盛なりしが、元明に至りて漸々衰へ、清朝に及びて壞敗の極に達し、徒に形骸を存するのみにして僅に本教の一變派なりと認むべき白蓮教に多少の活氣を見るに過ぎず、印度支那に於ける布教も夙に行はれカンボヂア、シヤム、ビルマ、等に傳播せしがシヤム國に於ける小乘佛教は始原的にして而も純粹なる狀態を保持せりと云ふ、我が日本國に於ける佛教は大乘に屬し朝鮮又は支那を經て傳來せしものなり、朝鮮にありては高句麗の代に佛教始めて傳はり高麗の世に最盛を觀しも李朝以來衰退して目下は一千未滿の寺院と六千未滿の僧尼とを存するのみにて教化上に何等資すべきものあるなし、而して內地に本教弘布の端緒を開きしは欽明天皇の十三年(西紀五五二)に百濟王より佛像、經論、等の貢獻ありし時なり、爾來聖德太子(573—621)は神儒佛合一に依りて政教相資の基を爲し、行基(670—749)の本地垂跡說出でて弘布の實擧がり、南都六宗(倶舍、法相、成實、華嚴、戒律、三論現はれしが、最澄(767—822)は神佛同體主義を以て天台宗を說き、空海(773—835)は南都習合に基づきて眞言宗を弘めき、茲に於て佛教大に行はれ、歸依するもの天下に普く寺院佛閣は各地に建立せられ、空前の隆盛を觀るに至りしも、年を經るに從ひて弊害百出して教義の紛亂、僧徒の橫行と成り、其の慘毒實に昷るべからざるものありき、されば之を救濟せんが爲、良忍(1072—1132)は融通念佛宗を唱道し、源空(1133—1212)は淨土宗を開立し、覺鑁(1095—1144)は眞言新義派を提げ、榮西(1141—1215)は臨濟宗を傳へて佛教の革新を圖りたり、其の他親鸞(1167—1257)の世俗的眞宗出で、道元(1200—1235)の淨規的曹洞宗現はれ、日蓮(1222—1282)の妙法蓮華經の功德を稱揚し、一遍(1229—1279)の時宗を開き、諸國を遊行して念佛を勸說するあり、斯くして鎌倉時代は宗教中興の實を擧ぐるに至れるが、室町の世には臨濟、曹洞の二宗に盛衰あり、戰國の時には各宗の僧徒の間には軋轢を生じて、紛爭亂鬪絕えざりき、然るに德川幕府の監督的保護政策の下にありては小康を得て黃檗宗の創始を觀しのみなるが、維新以來神佛分離と成り、再變して放任主義に移り、各宗は獨立自營の苦境に陷りしのみならず、又科學的思想の發達は佛教の前途に頗る寒心すべきもの

あるに拘らず、宗派は雜多を極め、政統合の實を擧ぐるには英傑の手腕に俟たざるを得ず、我が國の文明に資せしことの偉大なる佛教の將來には光明の發揮する所以の存するにや、又本教の特派たる喇嘛教に就きては紅教は第八世期に起りしも、黄教の出現せしは第十四世期の終りにして政教一致に基づける現制を見るに至りしは第十七世期の中葉なりき、而して信徒約八百萬人はチベットを始め、蒙古、滿洲、漢土(北西部)に亘り、カルムク、キルギス等を包括してコーカシアの東方に達せりと云ふ。

耆那教は印度に限れるが、一九〇一年の調査に依りてバルマー地方の佛教徒を合はせば一千八十一萬人を算すと云ふ。

印度教は印度を中心とし、ネパール、錫蘭、シャム、アフリカの東岸及び南端、等に多少の信徒を有せるが、信徒の總數は二億一千萬人に計上せらる。

シク教は印度のパンヂャブ、中央州、等に行はる、信徒は二百二十萬人に達し頗る軍職に適すと稱せらるるが、工業に熱心なること印度第一の評あり。

猶太教は世界的に傳播し居れりと稱せらるるのみならず、宣布は全然ユ



ダヤ人の繁殖に依れりと爲すには首肯し難き點あれども、兎に角中心はヨーロッパの東南方面即ちヨーロッパロシア(五二一萬人)、エステルライヒ(一二二萬人)、ウンガルン、(八五萬人)等にして、アジアの南西部、オーストラリアの東部、アフリカのエジプト、ベルベリア幷に南端、アメリカの合衆國、其の他に亘り、教徒の總數は一千二百五十萬人と概算せらる。

基督教は廣く世界の各地に亘り信徒の總數は五億六千萬人に達し、勢力には實に強大なるものあり、分かれて三部を爲せるが、其のローマ公教二億七千三百萬人)はイタリア、フランス、エスパニア、ポルトガル、等のラテン諸國を始めとし、ベルジック、南ドイツ、ウンガルン、等の信徒に依りてヨーロッパの四割を占め、南アメリカの殆ど全部を保ち、北アメリカの一部を容れ、其の他アジア、アフリカ、オセアニアにも鞏固なる教會を有せるが其のギリシア正教一億二千萬人)はロシアを始めとし、バルカン半島の諸國に亘り、ヨーロッパの東半部を占むるのみならず、ロシア教會の盡力に依りてシベリア地方に宣教を試み、奏功著しからざるに非ず、其の新教(一億六千七百萬人)はツートン的の北

### 回回教

ドイツ、デンマルク、スエリゲ、ノルゲを中堅とし、オランダ、イギリスより合衆國、カナダ、ケープ、オーストラリアに亘り、各宣教團の盡力空しからずしてオセアニアの諸島、アジアの印度、錫蘭、支那、日本、アフリカの中部に新教會の成立せるを觀るに至れり。

回回教は約二億五千萬人の信徒を包括せるが、アジアにありては南西部アジアトルコ、オマーン、ペルシア、アフガニスタン、印度等を主とし、南はマラッカ半島、マライ群島に到り、北はコーカシア、中央アジア、清國の北西部に亘りて信徒の數は一億七千萬に近く、ヨーロッパに於てはバルカン半島、南ロシア等に約一千萬人の教徒を有し、アフリカ(約六千萬人)に於ては北岸方面のエジプト、トリポリア、ベルベリア幷に東岸方面のアビシニア、ソマーリ、東アフリカに優勢なるのみならず、中部及び西部に試みられたる布教には驚くべき奏功ありて黒人のアフリカをしてイスラムのアフリカたらしめんとす、而してアメリカには六百萬足らず、オセアニアにも二百萬足らずの信者あり。

世界に於ける信仰の分布に就きては概略前記の如くなれども之に基づきて世界の總人口の信仰別を試みしに頗る困難にして大要だも示すこと能はざるを遺憾とす、蓋し猶太、基督、回回の三教の信徒は所謂排他主義に據れるを以て其の數には混淆の跡少なからんも、印度教、佛教乃至各種の崇拜者に關しては信仰を重ぬること少なからざれば到底類別するを得ざるべし、されば二三の推算數を指示するに止めんとす。

| 推算者 | ドラ、ブラーシュ | シュラ、デル | |
|---|---|---|---|
| 各種崇拜佛教(者那、喇嘛教を含む) | 一、五五〇、〇〇〇(ヴント) | 一、〇〇〇、〇〇〇(ヴント) | 五、六七五、〇〇〇(ヴント) |
| 印度教 | 四、三〇〇、〇〇〇 | 五、〇〇〇、〇〇〇 | |
| 猶太教 | 二、〇七〇、〇〇〇 | 二、一〇〇、〇〇〇 | 二、一〇〇、〇〇〇 |
| 基督教 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 一二五、〇〇〇 |
| ローマ公教 | 四、九三〇、〇〇〇 | 五、五〇〇、〇〇〇 | 五、六〇〇、〇〇〇 |
| ギリシア正教 | 二、二五〇、〇〇〇 | 二、三五〇、〇〇〇 | 二、七三〇、〇〇〇 |
| 新教各派 | 一、五〇〇、〇〇〇 | 一、二〇〇、〇〇〇 | 一、二〇〇、〇〇〇 |
| 回回教 | 二、〇六〇、〇〇〇 | 一、七五〇、〇〇〇 | 一、六〇〇、〇〇〇 |
| 總計 | 一五、〇一〇、〇〇〇 | 二、三〇〇、〇〇〇 | 二、一〇〇、〇〇〇 |
| | | 一六、〇〇〇、〇〇〇 | 一六、〇〇〇、〇〇〇 |

| 宗教名 ＼ 推算者 | ユスツスペルテス | | ワグナー | | ヒックマン | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 教徒數一百分數 | | 教徒數一百分數 | | 教徒數一百分數 | |
| キリスト教 | 五、六〇 | 三五、八 | 六、三九 | 三九、〇 | 五、六〇 | 三五、七 |
| ローマ公教 | 二、七三 | 一七、四 | 二、八七 | *四五 | 二、七〇 | 一七、二 |
| ギリシア正教 | 一、六七 | 七、七 | 一、五〇 | *二三 | 一、一〇 | 七、〇 |
| 新教 | 一、二〇 | 一〇、七 | 二、〇二 | *三三 | 一、八〇 | 一一、五 |
| マホメット教 | 二、二三 | 一四、二 | 二、二五 | 一三、〇 | 二、二〇 | 一四、〇 |
| ユダヤ教 | 一二 | 〇、八 | 一一 | 〇、七 | 一一 | 〇、七 |
| 一神教 | 七、九五 | 五〇、八 | 八、七五 | 五三、四 | 七、九一 | 五〇、四 |
| 印度教 | 二、一〇 | 一三、一 | 四、四〇 | 二六、九 | 二一〇 | 一三、四 |
| 佛教 | 三、九四 | 二五、二 | 二、二六 | 一三、八 | 四六〇 | 二九、三 |
| 異教 | 一、六六 | 一〇、六 | 九六 | 五、九 | 一〇九 | 六、九 |
| 多神教 | 七、七〇 | 四九、二 | 七、六二 | 四六、九 | 七七九 | 四九、六 |
| 總計 | 一五、六五一 | 一〇〇、〇 | 一六、三七 | 一〇〇、〇 | 一五、七〇 | 一〇〇、〇 |



地球の住者として最後に出現したる人類が現狀現勢に於て旣に世界の大部分を利用しつつあるは事實なるも、海洋沙漠に就きては通過來往するのみにして所謂住處に充つること能はざるは勿論なるが兩極に近き方面にありても寒氣の凛烈なるが故に生存者を見ること能はざるなり、高度の文化に浴するものと雖も全然天然の壓迫を脫することなく、適應の事情の實在するに非ざれば生存を保持すること不可能なり、天然の律令を遵守すること不可能なり、實に吾人は天然の臣下にして而も天然の君主を兼ぬるの奇觀を呈すと云ふべきか。

(一)天然が吾人に及ぼす影響　人類の生存、吾人の生活に就きて自然的事情が如何なる程度まで影響するものなりやを明にせんに、吾人は稀薄に過ぐる空氣中に生存するを得ざるを以て、高山、高臺は永住の地たること難く水の缺乏は沙漠をして無住の域たらしめ、僅に泉地、井地、貯水地を辿りて漂

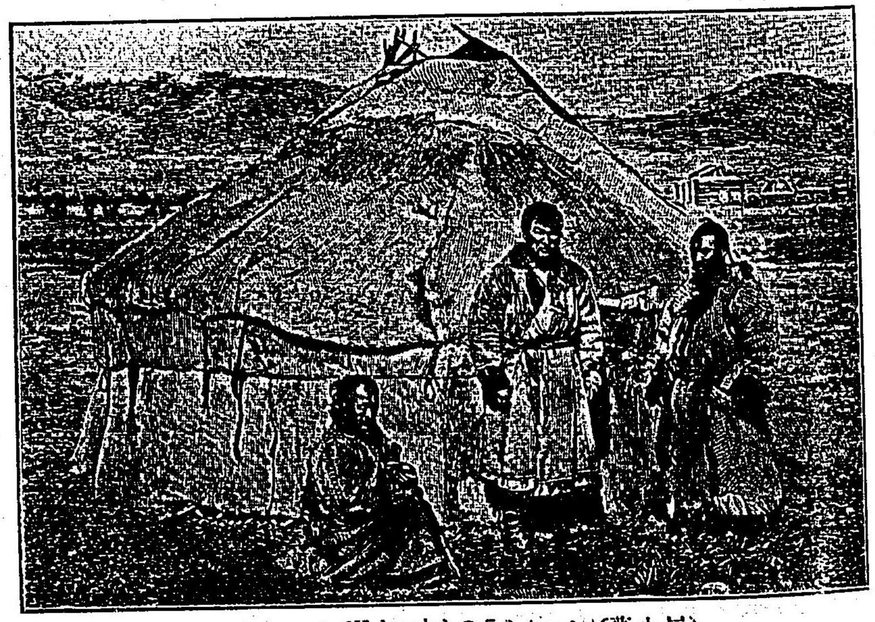
遊するものあるを見るのみなるが、植物若しくは動物を養ふこと能はざる地は、亦人類をも養ふこと能はざるなり。

氣候の影響

如上の事情は人類を組成する凡ての部族、民族に對し、平等に均一に影響を及ぼすものに非ざるなり、我が同胞の内地に繁々として北海道にだも移住するを忌みし時代もありしが、フランス人も亦一寒帶水のアルヂエリアに鄕居するに困難を感する次第なるに、支那人は滿洲に於ける嚴寒に堪ゆるのみならず、ジアバの地に赴きて太陽直下に勞働するを厭はず、アフリカの回歸帶に生れたる黑人が合衆國に渡りたる後は大西洋岸の地にありて北緯四十度に達せしもの少なしとせず、

氣候。生存場裡に於て適應を遂ぐるの難易に差等あるに拘らず、四圍が及ぼす所の影響を把捉して其の程度を推斷すること能はざるに非ず、陸の人、海の民、山地の住者、平野の居者は、棲家に、衣服に、稀には身體に特狀を呈し、イギリスの地はイギリス人を生み、ロシアの土はロシア人を出だすと云ふに理由あり、沙漠は特殊の事情の下に幾多の部族を鑄造せしが、饑渴の辛苦に慣れ、氣温の激變に堪え、視官、聽官、臭官は銳敏を加へて爭鬪冒險に傾ける資質を備ふるに至れるの事實あり。

［コンゴ］幕天の者遊漂



カルムク(Kalmouks)の「イウルト」(幕小屋)

## 居構の遊化　（其二）

漂遊式生活に依れる漁人、獵者、牧人、搬夫、行商の如きは居住に重きを置かざるを以て進化にも著しき跡なく、所謂支柱式天幕の出現ありたるより以來多少の變化を見たるも、木舞式幕小屋と成りたるに過ぎず、甲者は二本乃至三本の支柱を樹て獸皮、樹皮を綴りて得たる幕を懸け張りて日光を遮り風雨を凌ぐにありてアフリカの乾燥地に於ては純然たる天幕たるに止まり、北アメリカの土人は圓錐形に作り、アフリカのカッフルは半球狀に設け、チベット人、ツィガメ、ベドヰン、等は三角形に造れり、而も此等の天幕には大小と材質とに多少の差異を呈するも構造上より見るときは、進化の跡は認め難し、乙者は木舞、格子を用ふる上に於て一段の進歩を現はせしのみならず、各種の氈布を以て被覆の料に供するが故に住居としては一層の利便を與ふるものにして半開の漂遊生活には頗る適切なりと云はざるべからず、此の種の幕小屋はソマーリの「グルギ」(Gurgi)に於て最も粗造なるが、カルムクの「ゲール」(Giler)は圓錐式に作られ、キルギスの「イウルト」(Iourte)は半球式に作らる、而して南シベリアのイェニセイ又はアルタイの方面に於ける土着者に往々六角形若しくは八角形の木造屋に模倣せしと推せらる。

夏季と冬季とに依りて生活の狀態を漂遊式と土着式とに交換するものあり、サモイイッドは樹皮の天幕下に夏を過ごし、冬は小形の屋方に住み、エスキモーは夏季に獸皮の天幕を用ふるが冬季に於ては氷塊を用ひ半球狀の屋根を作りて半穴居を爲し、ラップは倭等種族に接觸する利に依りて帆布の天幕を作れるが冬季には粗屋を營みて住めり。

蒙古のカルムク、オーストラリアの土人、サハラのツアレグ、等に接觸上何等機會の存するなきに拘らず、沙漠的生活を爲すが故に、質、慣習、等に酷似せる所甚だ多く、殊にカルムクは微聲を聽き分け、オーストラリアの土人は盜賊者の跡を臭ぎ分けツアークは遠距離にある隊商の駱駝の數を算へ得ると云ふ。

温度高きも空氣だに乾燥ならんには身體を害すること少なきを例とせるが、降雨多くして濕潤に過ぐれば潴水泥沼出現し、毒蟲の發生を促し、惡疫の流行を來たすことありて吾人の活動に不利を與ふること尠少ならず、殊に温帶生れの人が回歸帶地方に居を移し濕熱の爲に疲勞すること夥しく生命をも傷ふこと珍しからず、海拔二一一〇米突のダージリング(Darjiling)に夏季の兵營を設け、標高二一五〇米突のシムラ(Simla)に暑期の政廳を開くは斯る弊害を避くる目的に外ならず。

高緯度の地に旅行を試みたるものの報ずる所に依れば酷寒は烈風、永夜に比して凌ぎ易く、ダルマチエン産のバイイェル(Pay)は克く低温に抗し得たるが、ナンセン(Nansen)の遠征(1893—1896)は三回の冬籠を極北の氷地に爲したるに拘らず一人の死亡者なかりき。

日光も亦氣候上の一要素として人類に影響すること顯著なりとす、極地の永夜は人氣を阻喪せしむとは探檢家の常に唱ふる所にして、イギリスの曇天、地中海沿岸の晴天には世評あり、山間に住める人は耕種、牧畜の爲のみならず、棲家の爲にも受光の斜面を選用するを例とせり。

住所の構造、被服の調製、其の他食物の料理、分量等に就きて觀察を下さんか、如何に吾人が氣候の影響を蒙りつつあるかを判するに足るものあらん。

土地　地味の肥瘠が吾人の生存に關係あるは世人の知る所にして改めて云爲するを要せざれども、土地の起伏が氣候と相俟ちて吾人の進歩發展を左右せし次第には一言を要するものあり、縱谷、橫谷は通路を指示し、谷地は避難處を供し、牧場を呈し、耕墾(Terrasses en culture)の出現を促し、又冬季の休閑は時計、挽物等の如き小品の製作を旨とせる所謂家內工業(Industries familiales)發達の因を爲したり而して掠奪、强盜の恐ある地方にありては懸崖、屋卓上、街は存するなり。

河湖　水が飲料として吾人の生命に必要缺くべからざるものなるは茲に喋々するを俟たざるも、吾人が地上水の流過する處、地下水の湧出する區に居を占むるの次第に就きては一言するの要ありと信ず、水に乏しき地方にありては住屋は泉、井、河流の濱に密集するを常とし、水に豐なる地域に於ては住家は處々に散在せるが、地味肥沃にして各種の富源の加はるあらば村落は增加發展して市場を中心として道路に沿ひて配せらる。

河流が吾人に依りて妨害物視されたるは、少時にして止み、交通上に利便を與へ發達を促して文化の進行上に資せしこと蓋し尠少ならざるものあり。合流の地、淺瀨(Gué)即ち渡河の區は吾人が夙に留意したる處にして、沿岸には河水の增減に伴ひて進退する所謂浮動街路(Rues mouvantes)を見ることあり、て迂曲多き河筋に對しては村落は土砂の沈積ある凸曲部に位し、缺陷の恐ある凹曲部を避くるを例とす、又河中の洲嶼は天然の要塞地、避難場としての特殊の愛顧を蒙りたるあり。

湖沼はチァーデ、マラカイボ、バイカル、アシア等に於て現に湖上市街を呈供せるが、流出口附近に都會の發達、灣曲の利ある湖岸に商港の開設を見ること稀

ならず、而して湖沼は河流と同様に漁獲に關する富源として沿岸の住者に重視せらるるなり。

**海洋**　人類と海岸との接觸は偉大なる効果を誘致せり、海岸は實に海洋を生命とする漁人と航海者との大團を産育したり、季節の來たるあらば海面の一部が陸地の某部に比し、一層多き住者を見ること珍しからず、海洋は夙に住民を沿岸に引招して都市は建てられ、港灣は開かれ、通商を促したるも亦海賊、冒險の起源とも成りたり、斯くして海洋は沿岸の住者を接近せしめんとするの傾向を呈せしも、初期にありては物資の交換、文化の接觸は内海、近海に限られしに、航海術の發達は大海、大洋の通航を許容し、發見に繼ぐに發見を以して知識界を振興し、人類の歴史に一新事實を加へ、吾人活動の境域に擴張を來たして吾人の發奮に對し大に要求する所あらんとせり。

**(二)吾人が天然に及ぼす影響**　天然が吾人に及ぼす影響の次第を了知すると同時に吾人が如何なる程度まで天然を支配し得るやを明にせん爲に斯る方面に對する吾人活動の効果に就きて顯著なるもの數項を擧げて記述を試みんとす、實に吾人は天然が瘠地として遺棄せしものを肥沃の土と化し、有用なる植物及び動物を移殖し湖沼、灣澳等に於ける水域を變じて農牧に呈供すべき陸域と爲し、廣大なる地區を改良して死生處を換えたるが如き感を與ふるまでに至りたるが、而も永年を期して功を積むに限らず、比較的短き期間に於て順序好く成就し遲滯なく奏功したるもの少なしとせず。

斯の如く吾人が良好にして而も有力なる影響を天然に及ぼし得るは全く科學的知識に進歩ありたるが爲にして、從來頑强視せられたる諸般の天然的障碍を排除するの方法を研究し、古來無能的に持ち腐したる各種の産源を利用するの道を講じて、吾人の創意に基づき吾人の活動に對して新に展開せられたる領域の經營、進化に盡瘁するに當り的確具眼の實行實施を遂げんとは勉むるなり。

**土地**　土地の起伏が特殊の事情の下にありて、交通上に大困難を來たすものなるが、隧道の開掘ありて高山秀嶺の遮斷力を殺ぎ、運河の開鑿ありて地峽は海峽と變じ航通の利は收められ、以て鐵道と海路とに偉大なる威

力を添へて世界に於ける工商の活動をして千徃萬倍するの慨あらしむるが一面には地下の探究漸く盛にして坑掘の深度大に增し、各種の鑛產をして空前の豐富を唱へしむるに至れり。

河流は築堤、浚渫、堰開、貯水池、等の工事に依りて改修せられ、深井の鑽掘は市街に飲料水を供し、田野に灌漑の便を與へ、流勢を轉じて白炭、黑色を呈する石炭に對する雅稱にして水力を動力に用ふるよりに化し、濕地、沼地に起りたるものに乾燥工事を施して健康地、農牧地、市街地と爲しタイリアのフチン(Fucin)湖、オランダのハアルレム(Harlem)湖、ロシアのピンスク(Pinsk)湖は漸次に乾燥工事を實施せられ、ドイツ、フランス、等にも同樣の事業は遂行せらるゝ海洋に對しては砂丘侵害の防止「ポルデル」(Polders)の防禦、其の他沿海平野の攻略等あり。

**生物**　吾人の活動は生物界に於て一層有力なりしが故に異常の効果現はれて驚嘆するに足るもの少なからず、植物及び動物が進化的狀態にある所以を洞察し、生存競爭の原則に基づき、四圍の事情が及ぼす影響に考へて有用植物の新種を保護發展せしめ、有利家畜の良種を發生固存せしめんとは圖るなり。



作物の移殖に就きて一言せんに印度の原產なるべしと推せらるる米は現時に於ける人類の三分一を養へるが、印度支那を經て漢土、日本、等に亘り、アラビア人に依りて西アジア、南ヨーロッパ、アフリカに擴り、イギリス人、ポルトガル人に依りてアメリカに渡り、小麥はメソポタミアの原產と信せらるゝヨーロッパに來りて大に發達し、アメリカに赴きて長足の進歩を爲したり、玉蜀黍はアメリカより出でて地中海の北岸に來り、西アジアより南アジアを經て絕東にまで歩を運びしが、アフリカに於て黍を退けんとす、其の勢漸く盛なり、此の外、アメリカの馬鈴薯及び甘藷印度の甘蔗、西アジアの葡萄、アフリカの珈琲樹、支那の茶樹、起源を異にせる各種の果樹、等は各地に栽培せられて其の發達には顯著なるものあり。



**家畜**に就きても吾人は大に其の移殖を圖りたり、牛類は數種を算して各地に飼育せらるるが、アメリカに於ける發展には驚くべきものあり、綿羊はアルヘンチナ及びオーストラリアに夥しく增加し、豚の飼養は廣く行はれ、馬、駱駝、騾、驢、等も適處に養はる、此の外、養魚、養蠣、等も行はれて淡水又は海水の

住者を增加せしめんとは勤むるなり。

無謀の移殖

斯の如くして移殖の上に奏功の著しきは事實なるも一面には失敗者たるの跡顯然たるあり、鼠族の跋扈は慮外とするも雀、殊に兎の移殖はオーストラリア、合衆國に於て大損害の因を爲せり。

濫獲濫伐

豺、狼、虎、豹、毒蛇等の如き有害動物の殺戮には理由ありとするも、或は「オーロック」(Aurochs)「ブッファロー」(Buffalo)「カストール」(Castor)等の全滅を來たし、或は鯨「セイウチ」「ホカ」等の消滅が近きにあるべきを恐れしむるは決して策の得たるものに非ざるなり、殊に森林濫伐の結果には林產の缺乏を憂慮せしむるのみならず、水源の涸失、河水の氾濫等を起して意外の損失を招くに至りしは淺慮の致す所と深く鑑みざるべからず。

移住の動機

(三)**人類の移住**　地球表面の形相に甚深なる變化を惹起するに與りて最も力ありしは實に人類自身の移住なりき、蓋し吾人の員數が漸次に增大するや住域を擴張する必要の之に伴ひしのみならず、冒險、好奇、利慾等の加はるありて新に發見せられたる地方、將に興らんとする新國には心を動かし、魂を



アメリカの拓殖

奈ふに足るの事情實在したるが爲め海上若しくは陸上に於ける交通の發展と相俟ちて吾人をして鄉土を去らしむる上に誘引の基を爲せしならんも、經濟上の危機、政治上の競爭、宗教上の暗闘、人種上の迫害、其の他、饑饉、失敗、等も亦住處の轉換を促がせし動機たらずんばあらざるなり。

アメリカが發見せられたる後、ヨーロッパ人が土地の利用を企圖するに至りて多數の移住者現はれ、其の運動は今に繼續しつつあるが、來住者の殆ど全部はヨーロッパの供給する所に係れり、然れども高溫の地に對しては拓殖上に便ありとして奴隷の移入を圖りたるが爲め、アフリカ黑人の移殖を見たり、第十九世期の中葉以後に於て支那人の合衆國及びペルーに赴けるあり、近年はシリア人も合衆國及びカナダに現はれしが、我が同胞にも北アメリカの西岸方面に居を占むるものあるに至れり、此の間に當り土民は漸次に減少し、中にはアンチル列島に於けるカライブの如く全滅せしものありて、エスパニア的アメリカに於ては來住者と土民との間に混和の盛なるを見るなり、

一八九二年を以てアメリカ發見四百年紀念祭を擧行せし際に調査せし所

に依れば四世期間に人種及び言語に於てヨーロッパ的なる來住者は九千萬人と概算せられたり。

シベリアの拓殖　ヨーロッパの西部、南部、中部の民族がアメリカの扶殖に當りし際、東部のロシア人は蒙古人の壓迫を脫したる後、隷役制度（Ostrog）を廢止し（一八六一）、一八九二年までに三千五百萬人を送りてシベリアの拓殖を勤めたれば、ドナウの河口よりボルガ＝カマの合流點に至る線を以て劃したる一五五〇年頃のスラブ人の住域の東境は東漸して太平洋岸に達したり、斯の如くしてヨーロッパ人は東西の兩方向に發展して遂に北半球を抱括せりと謂稱するに至りたり。

一八二一―一九〇〇年に於て合衆國は一千九百餘萬の來住者を容れしが、其の五百萬餘はドイツ人、四百萬弱はアイルランド人、三百餘萬はイギリス人、百二十萬はスエリゲ＝ノルゲ人、百餘萬のイタリア人、百萬餘のエステルライヒ＝ウンガルン人等なり而して一七九〇年に於ける同國の人口は四百萬弱なりしに生産數が死亡數に優れるに基づける人口增加と新領土の併合とのありたるが爲め七千六百萬餘人を一九〇〇年末には見ることを得たり、一七八八年には僅少の漂遊的土人を有するに過ぎざりしオーストラリアはアングロ＝サクソンより成れる四百萬の人口を有し、南アメリカのアルヘンチナは一八五七年乃至一八九九年に於て約百八十萬人の來住者を受納したり。

ヨーロッパ人に依れる人口の增加を見たる地に於て土人の生存上に變態を生じ、タスマニア人の全滅、ハワイ、新ゼーランド、アメリカ合衆國等の先住者に著しき減少ありたり。

**(四)大都の出現**　人口の增加は現代に於ける著しき事實の一なるが、人口配布の趨勢にも特殊なる點の存するあるに留意するを要す、獵漁に依りて天然の物產を採取獲得するに重きを置きたる時代には吾人の棲居狀態が漂遊式なりしは事實にして、農業の發達せしより漸次に土着式と化せしも、外張的耕種（Cultura extensiva）は牧畜と共に吾人をして處々に散住するの傾向を呈せしめて村落住は現はれたり、爾來農牧に內張的發達（Desarrollo intensivo）を見るに至りて大邑小都は成立したるが、近年に及びて吾人の居住に變態を來たし、進化は生じて、密住を促がし、大都會は出現したり、分業的工藝の發達之に伴へる通商の振興は新都市の創設若しくは舊都市の擴張に

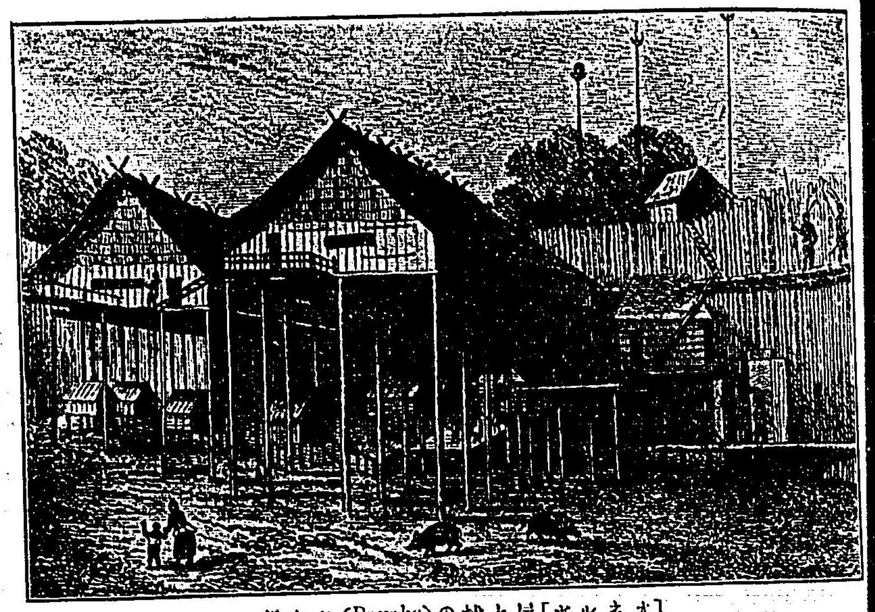
村落住

都會住

對して原因を爲せるは勿論なるも、交通上の利便に偉大の進歩を見しと生活上に物資的快適を求むることの切なるは村落の住民をして殷賑の地に居を轉せしむるに與かりて力あり、ヲエイコフ(Woeikof)の言へる如く「村落幷に普通都邑の欽損沒落を誘致せる大都會の勃興は現代文化の根本事業なり」と爲さざるべからず。

普通の場合に於て市街の發達を幇助せる原因は道路の交叉點に當れる一驛、一中心たるにありて、交通上の利便に一層の進歩を見るの時は活動の範圍、利益の區域に一段の增大あるものの中心に轉移するを常とせり、往古に於ける沿道の小市は休泊の地、驛傳の區たりしが、必要なきに至りて漸次に衰微し遂に絶滅するは敢へて怪むに足らざるなり、水深は中位にあるも風波の憂なき自然的港灣に就きては貨物の集散に便ならざるの嫌ありしに拘らず、往時の繁榮には見るべきものありしが、現時の要求に應ずること能はずして幸なき運命に悲みつつあるに比し、晉人の巧妙なる工事に成れる築岸、船渠、棧橋等を備ふる海運上の大機關が幾多の汽船帆船を輻輳せしむると同時に運河、鐵路等の便に依りて富裕なる後背國と連絡を保ちつつあるの偉觀を呈せり。

イギリスに於ける人口の配布に關する新舊の狀態には全然相反するも



[ボルネオ]屋上村の(Dayaks)ダヤク

[アジニヤ]屋重積の(Mendeline)メンドニーメ

## 居構の進化　(其三)

社交的生存は漸く複雑を加へ(後來を盛るの要ありて素樸の實を喪ぐるに至り、棲住處のみに限らず、各種の副次的建築物は造營せられ、物置あり、番所あり、柵を設け溝を掘り以て災害を避け掠奪を防ぐに供せられ、湖上村落(Cités lacustres)、山寨市街(Villes refuges)の如きも防禦の便あるに依りて出現したるもの多きに居れり。

雨雪多きときは屋蓋の勾配急と成り、風強ければ倭屋を便とし、乾燥にして濕暖の地域にありては平天方屋は建設せられ、海岸の丘陵に就きては階段式に建物を營まれ、石造、煉瓦造、石板瓦等の多寡は材料の豐乏に依るを常とせり。

石材を使用するに及びても當初は自然の巨岩片石に依ること多く、石工の進歩を見たるに拘らず、ギリシア人の如きは石材の利に依り優秀なる建築物を造設するに至りしも尚は未だ木造式を脫すること能はざりしが、ローマ人は煉瓦石と「セメント」との使用に基づきて始めて窖形の妙を悟り、石造建築に進歩發展を促したるは顯著なりとす。

木造建築に就きては ヨーロッパに ノルゲ、スエリゲ、シッツイツの普通家屋に雅致に富めるものありて東洋方面に於ては我が國を最とし、寺院宮殿を始めとし住家、商店、等にも見るべきもの少なしとせず。

特に一言を要するは住屋と社交的風俗との關係にして屋内の間取、構造、等は地方に依りて趣を異にし居住者の氣質習慣に從ひて次第を同じうせず、開放主義に造られたる單簡なるものあり、内外、男女、老若、等の關係に重きを置けるものあり、外觀に傾けるあり、快適を專一とするあり、寄寓異慣に成れる家屋の狀態には不可思議、不可解のものも存するなり。

尙は一言を要するは近年の發生に係る怪屋にして俗に摩天屋と呼ばる、三十階以上に達する高屋大厦として世人をして驚嘆せしむるものあるは鋼鐵材の勢威に據るの結果なり、アメリカ合衆國のニューヨークを始とし、同國商工の盛なる地に行はる。



のあるを見るなり、一七〇一年頃にはイギリスの南東部に人口密なりしが一九〇一年には中部及び北西部に密にして南東部は僅にロンドン附近に於て往時の高位を存するに止まれり、而してイギリス、ベルジック、ドイツにありては都會民は總人口の半以上を占むるが、スカンヂナビア、ロシアにありては村落民は都會民の三倍乃至四倍に當れりと云ふ。

イギリスにありては第十九世期以來、都會の發達は全然工業の振興と並行せるが故に同國に於ける大都の出現は比較的新しき事實なりとす、ロンドンの人口は一七〇〇年の五十三萬人、一八〇一年の九十六萬人、一九〇一年の四百五十三萬人を經て一九〇九年の四百八十四萬人に達して世界第一の都會たり、而して附近の小都會を併はせて所謂大ロンドンとすれば其の總人口は七百萬人を超過すべし、其の他の工業市に就きてはリヴァプールは一七〇一年の九千人、一八〇一年の七萬八千人、一九〇九年の七十六萬人、を有し、マンチェスターは三萬(一七八六)より六十五萬(一九〇九)に上ぼり、グラスゴーは三萬(一八〇一)より一躍して八十七萬人(一九〇九)に昇れり。

ドイツに於ける都會に就きて、一八〇〇年と一九〇五年との人口を擧ぐれば、ベルリンは十七萬より二百四萬に、ハンブルグは十萬より八十萬に、ミュンヘンは三萬五千より五十四萬に、ブレスラウは八萬より四十七萬に、ライプチヒは三萬二千より五十萬に增せるを見、其の他ローマは十六萬(一八一〇)より四十六萬(一九〇一)に、バルセロナは十萬(一八二〇)より五十三萬(一九〇〇)に、パリーは五十五萬(一八〇一)より二百七十六萬(一九〇六)に昇り、ロシアのオデッサは一七九四年の設立に係れるが一八九七年には四十萬餘を有し、ロヅは一八二〇年には人口二百の寒村たるに過ぎざりしに、目下は三十五萬の大都會たり、

アルヘンチナ、ウルグアイ、南オーストラリア、新南エールス、ビクトリア、等の如き新開の諸國にありても市街民の多きは驚くに足るものあり、人口疎にして工業の幼稚なる地にありても總人口の四分一、三分一乃至五分二は都會に密集せり、一八三五年の創建に係るメルボルンが一市としてビクトリア州に於ける人口の四割を占むるが如きは好適例ならん、合衆國にも成





長の極めて迅速なる所謂菌街(Cités-champignons)ありて密住式の盛に行はるるを證せるが、ニューヨークは三萬三千人(一七九〇)より大ニューヨークの四百十一萬人(一九〇六)、四百七十七萬人(一九一〇)と勃發し、シカゴは四千五百人(一八四〇)より二百五萬人(一九〇六)、二百十八萬人(一九一〇)と成り、セントルイスは一萬六千人(一八四〇)より六十五萬人(一九〇六)、六十九萬人(一九一〇)に及びたり、

我が國にありても新設の都會に驚くべき發達の速なるものあり、横濱の三十九萬人、神戸の三十八萬人、横須賀の七萬人、呉の十萬人、佐世保の九萬五千人、門司の五萬六千人、札幌の七萬人、小樽の九萬人、等は殊に顯著なりとす、

大都會が勃興して多數の住民を吸收するや、勢ひ村落民の減少を來たさざるを得ざるが、イギリスにありては一八四一年に於ける都會民は四割九分を占むるに過ぎざりしに、一八七一年の六割九分を經て一九〇一年の七割七分に進み、村落民は僅に二割三分と成れり、フランスに於ける村落民は七割八分(一七九〇)、七割四分(一八五二)、六割九分(一八七二)、六割(一八九六)、等を與

へて漸次に低下し、ドイツは一八九〇年の五割三分より一八九五年の五割に下だり、ダンマルクは一八九〇年の六割九分より一九〇一年の六割に退きたり、然れどもウンガルンに於ては村落民が七割六分に達するのみならず、尚ほ增加すべしと判せらる、其の他ロシア、エスパニア等は村落的たる現情を支持せるが、イタリアは漸次に都會的たらんとせり。

我が國の總人口五千百七十四萬餘人(一九〇八)の中には市民八百三十萬人、町民七百九十萬人、村民三千五百五十四萬人ありて、百分比は村民に六九を與へ、市民に一六、町民に一五ありて、市町民は三一と成るなり。

都會的引力の稍強からざるの趨勢を見るはエステルライヒ＝ウンガルンにしてキーンは一八〇一年の二十三萬餘より一九〇一年の百六十六萬五千、ブダペストの七十三萬ありては市街生活が夙に發生せしに拘らず、ナポリ及びローマは一八〇〇年の三十五萬及び十七萬に比し一九〇一年の五十六萬及び四十六萬なるが、ロシアのサンクトペテルブルグは四〇萬(一八〇一)、二七萬(一八九七)を經て一四五萬(一九〇九)に達したり。



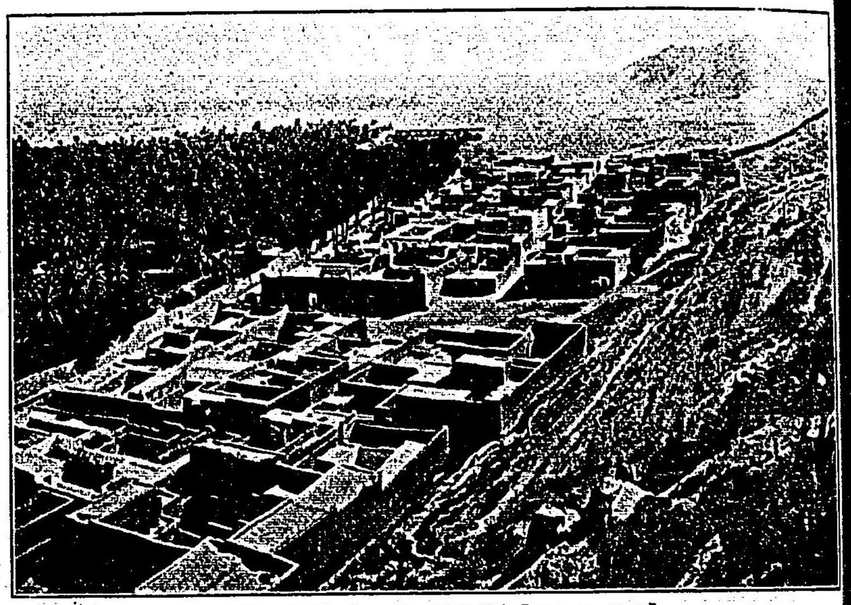


尙は一言を要するは近年に於ける大都會の住者が其の中央を去りて周邊に移るの傾向を現はせるのみならず、商工の發達が著しき大都會の附近に隨伴的小市、補助的小都の成立を見るを以て大都會が占むる地域には廣狹の差甚しく、ロンドンの三萬一千方粁、キーンの一萬六千、パリーの七千八百、ベルリン六千四百五十にして我が東京は約二萬方粁を有すべしと推せらる、從て方粁に付きての住人はパリーの三百二十六、ベルリンの二百六十、ロンドンの百三十六、キーンの八十五、東京の約九十と成るなり。

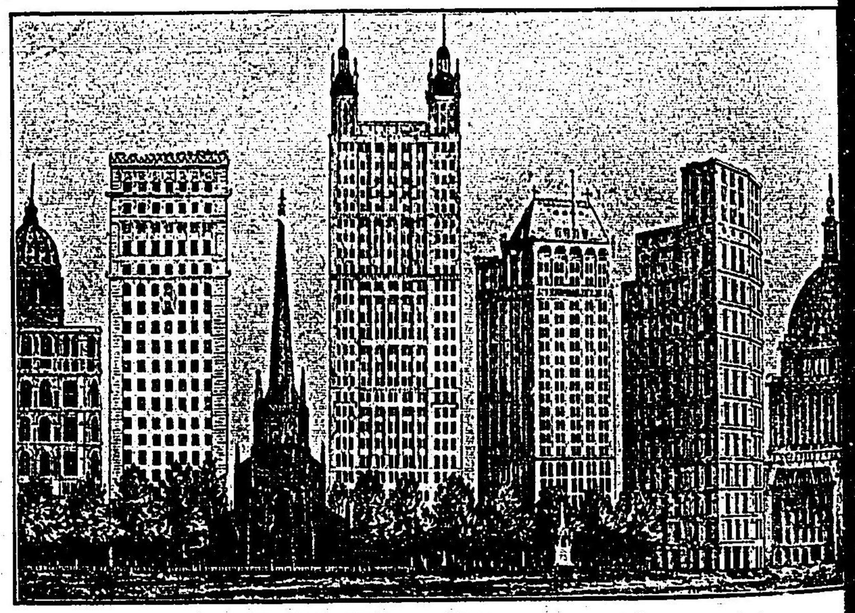
大都會殊に製造業の盛なる市街に於ける生活には勞苦多く熱鬧を極むる所あるを以て、紅塵を避け激務に遠かりて神心の保養を遂げんとするの傾向生じ、每年適當なる季節の來るあらば閑靜にして風色に富める野外に出で、空氣淸淨にして而も往復に便なる地を選み、數ケ月若しくは數十日間を期して居を移すなり、ヨーロッパの都會的大中心には往々夏季の市街を備へて、別莊街に連絡するものあり、アメリカ合衆國には一段の進歩を見、夏季に於て都會民の一部が移住するは既に常例定式と成りて所謂夏季の人口

(Summer population)を現出するに至りたり、季節の到るあらんか、ニューヨーク及びフィラデルフィアの在住者の中、六十萬乃至七十萬人は出でてニュージャーシーの砂濱方面に赴き、之が爲めアトランチックシチー、ケープメイ(Cape May)等の田舍住、佗住は冬季の寂寞閑雅なるに反し、密住の地雜沓の衢と變するは好適の一例なり、移住者が主眼とせる所に思ひ合はさば奇なる現象とや云ふべし。

如上の事實に就きては稠密式の都會住と云ひ、漂遊的の特殊住と云ひ、交通の迅速にして安全なるに基づかざるものなし而して交通に斯る發展を觀るに至りたるには勿論別個の事由は存するなり、事物の相互的關係には實に豫知し難きもの、測り得べからざるものあり、地理學上の研究に妙趣の存するも亦玆にあるなり。



ラグア (Laghouat) の平天屋 [アルジェリア]



摩天屋 (Sky-scraper) [ニゥーヨーク]

經濟地理(Géographie économique)は世界の各地に於ける天然の產源(Ressources naturelles)と住民の生業(Industries humaines)との間に存する相互的關係を研究して地球表面の自然的狀態と吾人の經濟的活動との連鎖たるべき原則の發見に資するを以て目的とす。

抑、人類が此の世に現はるるや其の生命を保持するより急なるはなし、吾人が生存に安じ生活を完たうせん爲に必要にして缺くべからざるものは衣食住の三者に供用すべき物資に如くはなし、蓋し吾人は自己の能力を活用して大に進化する所あらんと勤むるには豫ゐ機關の强健、活力の旺盛に備へざるべらざるもあればなり、斯る需要に應じ之が供給に任ずるを以て目途とする所の吾人の業務は所謂生業なるが、各種の需求幷に之に滿足を與へんと勤むる次第に就きては太古と當代との間に極めて著しき差異懸隔の存するありて而も漸次に進化を重ね發達を遂げたるの事蹟に關しては明

瞭なるものあるを認め得べし、人類生存の初期にありては需要單純なるが故に各自に於て原質的材料を採取し若しくは獵獲漁得したる後、各自に於て相應の製作を加へて消費に充てたり、されば本期の特徴は天然物即ち原生的物産に就きて吾人の用を爲すに至るまでに施すべき總べての仕事は需要者各自に於て之を行ふにありて所謂自給自足主義は實行せられたり、然れども吾人には進化的資性の具はるあり、永く一定不動の狀態に甘ずることなく、天然物に依頼するの不安不便を悟り、或は資料取得の手段を改良し或は備荒貯藏の方法を探求せし結果、遂に生擒したる獵物に依りて、捕養を試み漸次に進みて馴養若しくは育養の實を擧ぐるに至らんとし、又は果、葉、莖、根、等の如き好適の材料を呈供すべき草木を移植培養するを得たり、茲に於て農耕牧畜起りて助成的物産は原生的物産と相俟ちて生活上に餘裕を生じ、一方の過剰は他方の不足を補ふべく交換は行はれ、商業の端緒は開けて生産の增大を促せり、人智に一層の進歩ありて技能に一段の發達を見、需要複雜と成りて生業の分岐行はれ、互助相資の効果に偉なるものありて加工的事業は振興し、配分の任務は重且つ大と成り、交通の便は開け、運輸の利は展びたるなり、斯の如くして吾人の生存は更に革新せられ、空前未聞の盛況は實現するに至りたり。



如上の事實は人類の現狀に就きて論述せし如く、吾人の活用的進化に基づき、積成の効果に據れる次第なるが、當今にありても野蠻人未開人は採取を主とし、半開者は農牧の恩惠に浴するに過ぎずして、文化の大に進みたるものに於て始めて生産の豐富、配分の旺盛を覩るを得るなり、而して生産及び配分に案ずるに地上若しくは地下に存在する各種の物體に就きて吾人の生活に資すべきものを撰擇して之を採取、獵獲、漁得して原生的物資生じ、吾人の智識技能の加はるありて栽培養畜の効果たる助成的物資出で、所謂價値を有する原料的物品は收め得らるるなり、製作の程度は一樣ならざるも價格の增殖を擔ひたる加工的物品は現はるるなり、而して此等物資物品の生産に均勢を缺きて過剰不足の各地に起るに當り、交通の便と運輸の利とを提げ來りて分配の實を好適に擧ぐるに於ては啻に價格を維持するに止

まらす、之が增大伸張するを見ること稀ならざるなり。

- 生産
  - 原生的（採取、獵獲、漁得、掘採）……原料的物資
  - 助成的（造林、栽樹、耕種、栽培、養畜）……原料的物資
- 配分
  - 交通
    - 通路（陸路、水路）
    - 通信（郵便、電信、電話）
  - 商
    - 地方的交換
    - 世界的交換

茲に經濟界に關する地理的狀況の梗概を序述して現時に於ける吾人の生存上の進歩、生業上の隆運に就きて解明を施さんとするに當り生産幷に配分に關する大綱に基づくこととせり。

## 第一　生産

物産は動、植、鑛の各種に亘り原生品を始めとし吾人の助力に成れる助成品、工程の一樣ならざる製品類、特殊の用途ある機械類等を包括し、品種の複雜にして僥多なる殆ど極まり無きやを疑はしむるも、之を大別して原料品と加工品との二類と爲すを得べし而して甲者は原生産と助成産とを含み、乙者は製品類と機械類とに分かる。

(一)原生産即ち天然品は森林（天然林）、原野又は河海、地中等より採取、抽出若しくは獵得漁獲せらるるものを總稱す。

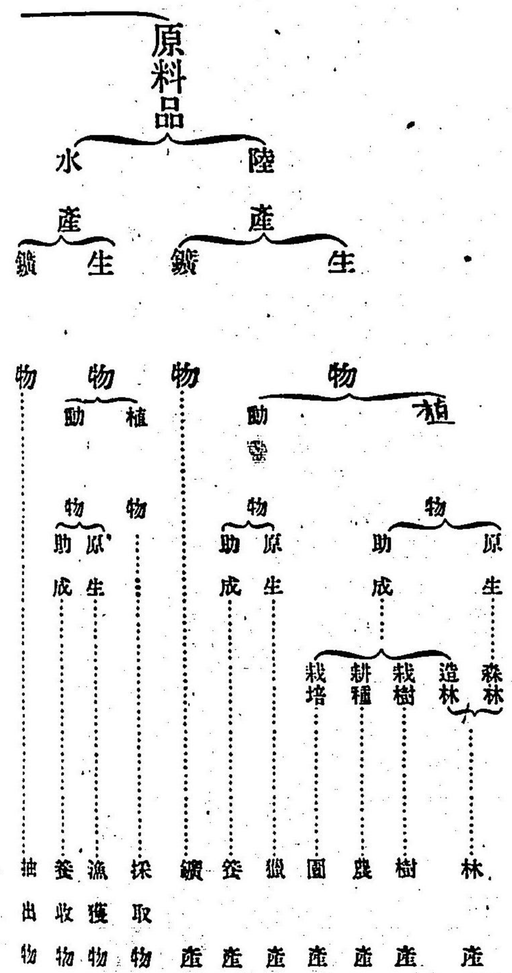
(二)助成産は助力に據れる自然品にして造林（人工林）、栽樹、耕種、栽培又は養畜、養殖を施し以て自然を助け、其の不備を補ひて得る所の結果なり。

(三)製品類は原料に適宜の加工を施して製出したる各種の物品にして衣食、住、其の他吾人直接の需要を充たすに供せらるる普通の用品を總括す、變形を主とするものあり、變質に基づけるものあり、工程を完了せるものと否らざるものあり。

(四)機械類には學理の研究適用に資するもの、藝術の演奏に資し發達を助くるものあり、之を學藝機械と爲す、生業用機械は生産用と配分用との二派に分かれ、甲者に原料の供給を助くる所の助力機械あり、製品を作成するに

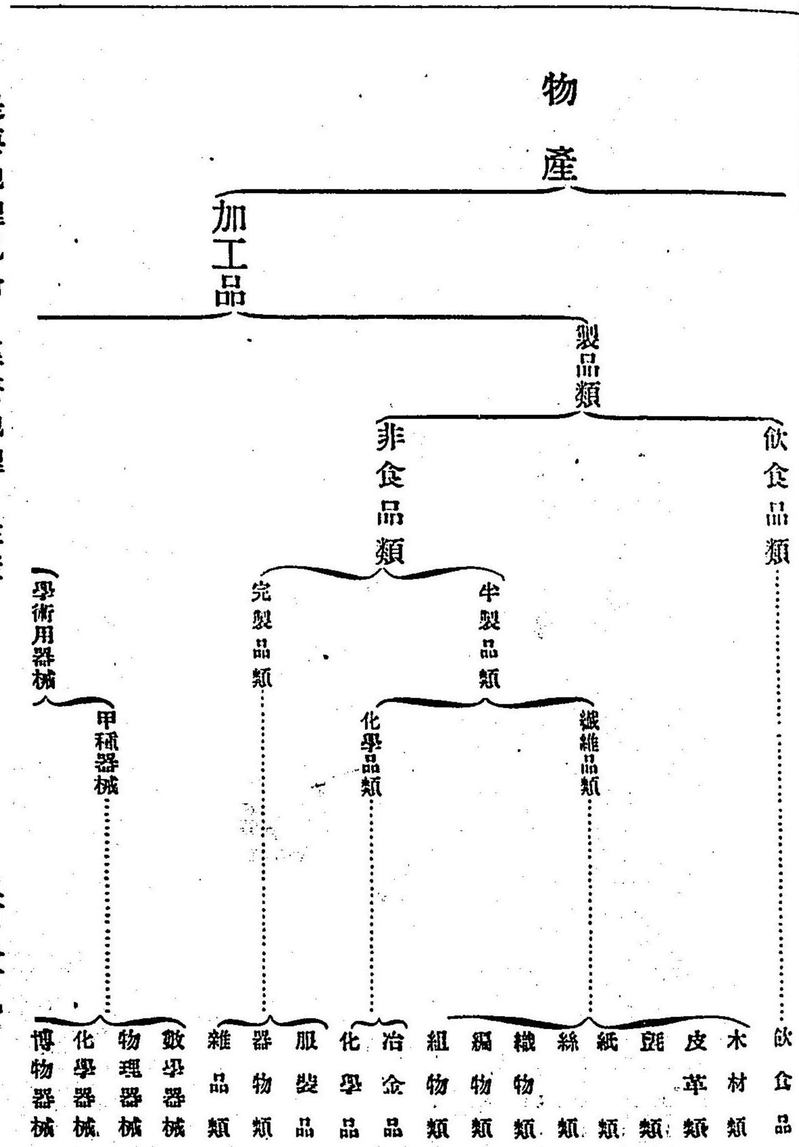
用ひらるる製作機械あり、乙者に商業の營行に關するものあり、運輸通信に係はるものあり、工事用機械には土木用と建築用との二種あり。

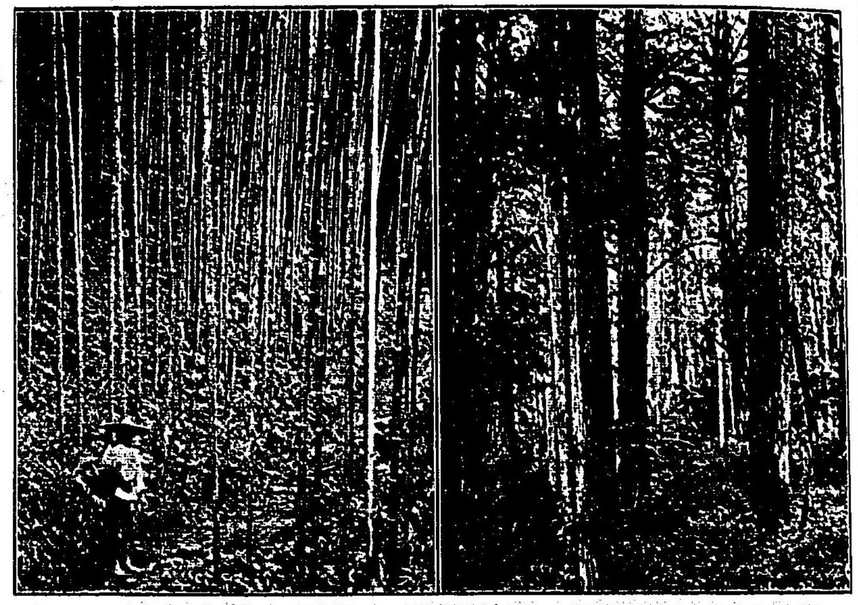
而して此等物産の相互的關係即ち物産分類の一斑を示さんと試みしに次の如き表を得たり。







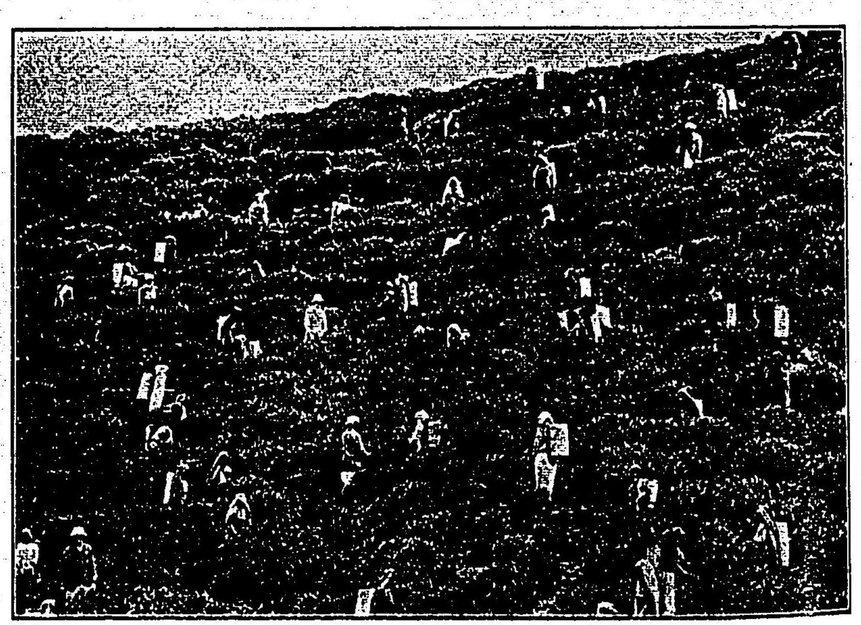





阿里山の檜林



交力坪の竹林

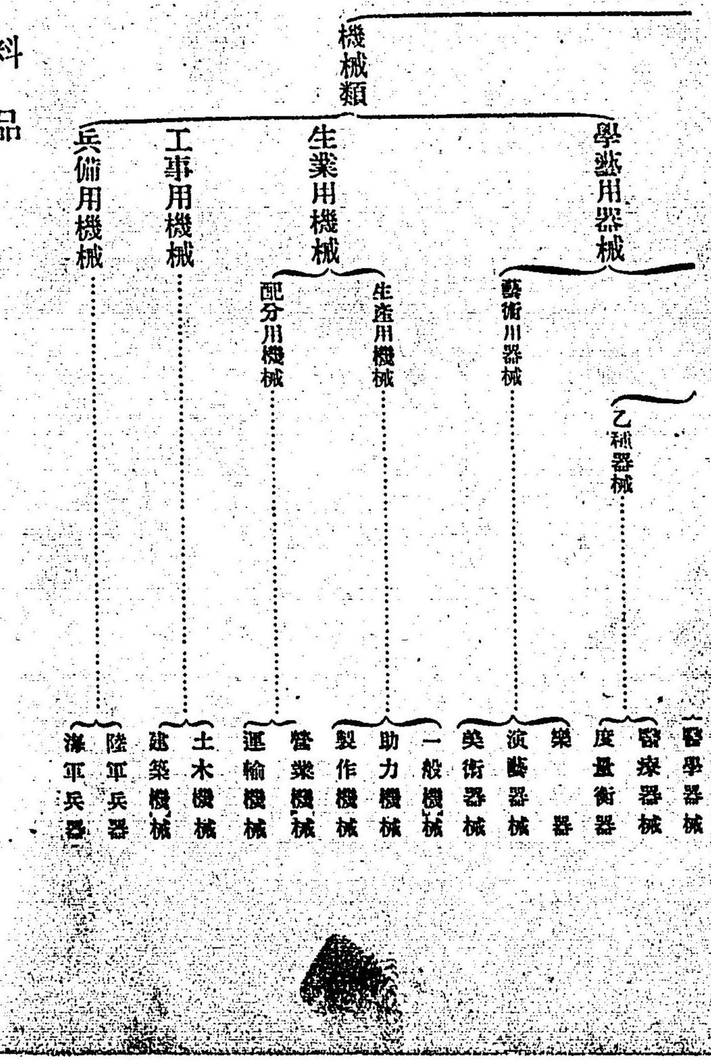


[セイロン]の摘茶と園茶



## 甲、原料品

### 1. 陸產



## A. 林産

森林とは木竹の茂生せる地域を稱し廣狹に依りて林(Forêt)と云ひ、森(Bois)と云ふも、之が保存經營、利殖に當れる業務を森林業(Sylviculture)とは總稱するなり、本業の初期に於ては或は果實を拾ひ條枝を折りて食料燃料に供し、或は樹下樹上に營棲して雨露を凌ぎ日光を避けたるに過ざりき、然るに人口の增加は人智の發達と相俟ちて耕種の進歩を促がしたるが、拓地殖民漸く盛にして森林の減退若しくは絶滅を來たしたるは止むを得ざるとするも、木材に對する需要の激增は無謀の消費と共に樹木を濫伐するの弊を生じて山野を禿赭にし、意外の損害を蒙りたるの例尠少ならず、茲に至りて前途に憂ふべきものあるを悟りて、隨伐隨植の法は現はれ學理的の造林法は出でて、產源の利用と永續とに對する兩全の策を講ぜんとは勉むるなり、抑森林が社會の成立に關し國家の生存に對し、重大なる要素、有力なる產源たるは所以のものは先づ主產物として建築、土木、其の他工業用の木竹材幷に日常必須の燃料を供し、副產物として果實、菌類、等の食用物、樹皮、樹汁、等の藥料を與

## 各種森林

ふるが如き直接の効果あるのみならず、樹木の繁茂は太陽の光熱を遮止し、冷氣を貯へて氣候の炎暑を調和し或は新鮮淨潔なる空氣を四圍に送りて衛生の資を爲し、降雨に過ふに當りては水分の蒸發を遲緩ならしめて源泉を養ひ、流水の降下を適度ならしめて江河の濫溢を妨げ或は春夏の候、百花娟妍、綠葉鬱蒼として山麓河岸を粧ひ、吾人をして風光明媚の快感を起さしめ百禽千魚の生育を扶け、或は流泥飛砂を防止して土地の荒蕪する患を避けしむるが如き間接の功能を有するに因れり。

樹木が茂生する場處は山地なることあり又は平地なることありて山林と平林との別を生ず、然るに地味は概して山地に磽确にして平地に肥沃なるが故に耕種の開けたる地方にありては平地を田畝に供し、樹木の培養は主として山地に於てす、然れども人口の稠密ならざる地方にありては平地の需要少なきを以て山地と平地との別なく樹木の存するあるを常とす、樹木の大小に依りて喬木林、灌木林等に分ち、茂生の狀態に從ひて密林、疎林等の別を爲し、樹種の樣々なると單一なるとに基づきて混樹林、單樹林の差を



認むるが又常綠林と濶葉林との別あり、經營上より見れば天然林、人工林、等ありて、直接の利益を收むれば供用林と云ひ、間接の效果を擧ぐるに充つれば保存林と成り而して所有別を爲せば國有、公有、私有、等を得るなり。

天然林は吾人の保護を仰ぐことなく自然の繁茂に任ずるものにして從て良樹、雜木相混合せるが、人工林は播種 (Ensemencment)、植栽 (Plantation)、移植 (Transplantation)、撫育 (Protection)、等より成れる造林の法を施して得たる結果にして、前者に比すれば樹種の整一、樹狀の完備、樹齡の均等、伐採の利便、等に就きて遙に優れる所あり、而して天然林に就きて腐幹を除き冗枝を去りて保護を加ふるありて兩者の中間に位すべき樣々なる助成林は現はるるなり。

降水豐にして而も律呂の具はるありて樹木の茂生を見るものなれば森林の分布には自ら制限の存するを認むるなり、世界の「森林帶」に就きて大要を記さんに、ウーラシア及びアメリカの冷和帶に屬する地に廣大なる林域ありて「タイガ」(Taiga) はシベリアより東ヨーロッパに亘りスエリゲに達するが樹木の生存狀態は疎密ありて均一なる能はざるも、松杉科の「マツ」(Pinus)、「モ

ミ」(Abies)、「カラマッ」(Larix)等は「カンバ」(Betula)「ハンノキ」(Alnus)「ヤナギ」(Salix)等の如き濶葉樹を伴ひて、南部には樹幹に稍、著しきものありと云ふ、而して中央ヨーロッパに於ては「カシ」(Quercus)、「ブナノキ」(Fagus)等の加ははるを見るなり、アメリカの北部なる森林も同樣にして「シロマッ」「クロマッ」「アメリカカラマッ」等の數種を以て特產と爲すのみ、而して氣溫は高からざるも、冬季は溫和にして降雨の少なからざる地は樹木の繁茂に適するが故にチレの海岸、新ゼーランド南島の西岸、オーストラリアのビクトリア及ニューサウスエールスの沿海地、帝國の南西部、等に密林の現はるるあり、降雨の多き回歸帶地方には蓊蔚たる森林あり、アメリカの南部アマゾニアに於ける「セルバ」(Selva)は「イガポ」(Igapo)「グアシュ」(guagu)とに分かるるが、尙ほブラジルの沿海地、ベイヤナ、コロンビア、エクアドルの海岸、中央アメリカの東岸、アンチル列島、フロリダ、等を包括せり、アフリカにありてはコンゴの支流アルヒミの沿岸、ギニアの海岸、東アフリカのザンジバル附近、マダガスカル島の東岸、マスカレニアス諸島、等に濕潤林を觀るが、アジアの南東部即ち錫蘭、マラッカ半島、フィリッピン、ボルネ



モルッカ、セレベース、ジャバ、スマトラ、等に往古の大森林の遺跡なるべしと推せらるるもの現在するは事實なり、而して此等の熱帶地方に於ける森林中の樹種には棕櫚科を主とし、金絲桃科、樟科、等に屬するものも少なからざるが、殊に着生、蔓生、等の植物に富めることは顯著なりと云ふべし、

世界に於ける森林地の總面積は二千七百萬方粁に計上せられ、其の一千二百萬は熱地的林域に屬し、其の一千五百萬は溫地的林域に屬せるが、全ロシアに八百萬方粁の有樹地、ブラジルに四百萬方粁の樹林ありて供川上より見るときはカナダ(三二三)、合衆國(二八三)、ヨーロッパロシア(二二三)は上位な占め、イギリス領印度(二七)、日本(二五)、ソーランド(二四)、スエリー(二三)、エスチルライヒ＝ツンガルン(一九)、ドイツ(一四)等は次位にあり、又各國の地積に對する百分比を求むればフィンランド(六三)、日本(五九)、ノルゲ(四九)、ヨーロッパロシア(四六)、スエリゲ(三九)、カナダ(三八)、エスチルライヒ(三四)、等を得るが、林政の完備せるはドイツを最とす。

森林の經營上より見るときは種子の播布又は苗木の植栽より樹木の伐採(Abtrieb)に至るまでの期間に關することなるものあれば短期式即ち鉈斧式(Taillis)と長期式即ち鋸鉞式(Futaie)とに分かれ、甲者に八乃至十年の若採(Jeune taillis)、十五乃至二十五年の中採(Moyen taillis)、二十五年乃至四十年の高採(Haut taillis)ありて、乙者に四十年乃至六十年の中伐(Demi-futaie)、六十年乃至百二十年の若高伐(Jeune haute futaie)、

百二十年乃至二百年の高伐(Haute futaie)、二百年以上の老高伐(Vieille haute futaie)、等あり、而して林質に依りては兩者を兼ねるありて錯採上錯伐式(Taillis sous futaie)とは稱するなり。

林産　森林に關する直接の效果を主産と副産とに分ち、更に之が應用別を爲せば木料用、燃料用、工業用、食料用、藥料用、等を得るなり。

木料用　森林最要の料品を供する樹種なり、木質に依りて四種に分かれ、脂材樹に「マツ」「スギ」「モミ」「ツガ」「カラマツ」「イチヰ」「ネズコ」「ヒノキ」「サハラ」「レッドウード」(Red wood)(Sequoia simpervirens)、「オホマツ」(Pinus sylvestris)「オレゴンモミ」(Pseudo tsuga Douglasii)、等あり、白材樹に「キリ」「イコヤナギ」「ハクヤウ」「バンノキ」「シラカンバ」「シデ」「カヘデ」「シナノキ」「カナダヤナギ」(P.pulus canadensis)「シタンス」(Celrela odorata)、等あり、堅材樹に「クス」「ケヤキ」「シヨジ」「クリ」「クルミ」「ニレ」「ブナノキ」(Fagus sylvetris)「カシ」「オークク」(Oak)(Quercus robur)「チーク」(Teak)(Tectona grandis)「ケブラコ」(Quebrace colorado)「マグコノ」(Magkono)(Xanthostemon verdugodianum)等あり、密材樹に「ホホノキ」「サクラ」「ナシ」「リンゴ」「ムメ」「ツゲ」「イヌツゲ」「セイヤウツゲ」Buxus sempervirens「ロビニヤ」(Robinia pseudacacia)「リグナムバイト」(癌瘤木)(Guaiacum officinale)「クワリン」(花櫚)(Cydonia sinensis)「カキ」「クロガキ」「コクタン」(黒檀)「シタン」(紫檀)「タガヤサン」(Mesua fera)「マホガニー」(桃心木)(Swietenia mahogoni)「ビャクダン」(白檀)(Santalum album)等あり。

木料の輸出に就きてはロシア(一、一六八〇萬圓)、アメリカ合衆國(一、一四〇〇)、エストニア(五三三六)、カナダ(八九一二)、スエーデン(七六六六)、フィンランド(五三三六)等は上位にあり。

燃料用　燃料用。新材樹には「ナラ」「クヌギ」「イヌブナ」「カシ」等ありて堅木を供し「マツ」は松薪を與へ、其の他に雜木あり、炭材樹には「ナラ」「クヌギ」「カシ」「ブナ」「クリ」「マツ」「シラカンバ」「カヘデ」「シナノキ」「シデ」等ありて硬質又は軟質の木炭に製せらる、而して其の他に研磨用に供せらるる炭の材料として朴、椿、山桐(駿河炭)、百日紅(蟲色炭)等あり。

工業用　工業用。紙料に供せらるるものに「エピセア」(Epicea)「アビエス」(Abies)「ピニウス」(Pinus)「ポピュラス」(Populus)等の數屬あり、染料用に蘇方(Caesalpinia sappan)「ブ

ラジルウード」(Caesalpinia echinata)「ログウード」(Haematoxylon campechianum)、等あり、澱料用に皃茶(Acacia catechu)、藤黄樹(Garcinia morella)、栲皮樹(Rhizophora mangle)甘密(Uncaria gambir)、等あり、塗料用に「カウリゴム」(Dammar australis)、「マワウヒバ」(Callitris quadrivalvis)、麒麟血(Calamus draco)「クルバリル」(Hymenaea courbaril)等あり「タンニン」用にヂビヂビ(Caesalpinia coriaria)、鹽膚木(Rhus semi-alata)、「スマック」(Rhus coriaria)、等あり、焚香料に薫陸香(Liquidambar orientalis)、乳香(Boswellia sacra)、反魂香(Boswellia serrata)、沈香(Excoecaria agallocha)、安息香(Styrax benzoin)、等あり、棗子用に「コルクカシ」(Quercus suber)、「コルクヌギ」(Q. variabilis)、等あり油料用に「ココヤシ」(Cocos nucifera)「アブラギリ」(Aleurites cordata)、等あり、其の他雑工用に籐(Calamus rotang)、林投樹(Pandanus)、「ラヒア」(Sagus raphia)、蒲葵(Livistonia chinensis)、等あり、然れども現時に於て最も重要視すべきものは「カウチック」と「グタペルカ」との二種とす。

**カウチック**(Caoutchouc, India-rubber, Seringa)はアマゾニア土人の「カウチュ」(Cahuchu)にして特殊の生樹に存する乳狀汁(latex)より採取せらるる凝結物なり、



アメリカ人グードイヤー(Goodyear)が硫化法(Vulganisation)を發明して本貨の應用を完全にし且つ之を普及せしむる基を爲し(一八四〇)、モリー(Morey)は「エボナイト」(ébonite)、即ち硬質護謨を製出して適用の範圍を擴張せしが、製造は需要と共に漸次に發展して、第十九世期の終より大工業の班に入り、醫療器械、學術器械、海底電纜、自轉車、自動車、等に廣く適用せらるるに至れり、されば「カウチック」は實に必要缺くべからざるものと成りたり。

カウチックを與ふる植物に就きて著しきものを紹介せんに

**パラゴムノキ**(Hevea)〔大戟科〕は北ブラジルのパラ(Para)、マラニオン(Maranhão)、等の地方に多く産する喬木なり、本屬が與ふる所のものは世界年産額の六割を占むるが、「ギヤナ」種(H. Guyanensis)、「ブラジル」種(H. Brasiliensis)、「ウテア」種(H. Lutiea)、等あり、ママソナス河并に其の支流の沿岸に於ける氾濫域の泥濘地に産するものは二十五乃至三十米突の樹高に達するか、粘土質の深き土壤を好み、二十四度乃至三十五度の高温(稀には三十八度)の下に多量の降水を受くる地を求む、而してパラゴムを採取するの方法は極めて單簡なり、樹皮を切解して乳狀汁の滴出するを受容器中に受け、空氣に曝し適宜の樹汁、柚汁、食鹽、硫酸、等の一を混じ若しくは煤煙にて燻すれば、帶赤色の凝塊物を得るなり、又乳汁中に存する「カウチック」の割合は勿論一定せざるも

百分の三十二乃至四十一と爲すを適當とす、然れども栽培せしものに就きては四十八乃至六十の優品を得ると云ふ。

**セアラゴムノキ**(Manihot grizlawii)〔大戟科〕は土人の「マニコバ」(Manicoba)にしてブラジルのセアラ(Ceara)方面の降雨少なき土地に產す、生育の速なる灌木にして耳狀の「カウチック」を與ふるも乳狀汁の少量なるを缺點とす。

**パナマゴムノキ**(Castilloa)〔蕁麻科〕は土人の「ユレ」(Ule)にしてブラジルよりメキシコまでの地に產し、樹高は二十五米突に達するものあり、メキシコ產の「カウチック」の殆と全部は「カスチロアエラスチカ」(C. elastica)より抽出せらる。

**アッサムゴムノキ**(Ficus elastica)〔桑科〕は「カウチック」樹として同屬の植物中の最要なるものなり、アッサム地方を始めとし印度支那、マラッカ半島、ジャバ、ボルネオ等に產し、壯大にして美觀を呈する喬木なるが樹高は六十米突に達し枝條之に叶へり、汁量は中位にありて大樹は二十瓶を與ふと云ふ、イギリス人の「インヂアラッバー」は主として本樹より採取せられたり。

**フォーゲルゴムノキ**(Ficus vogelii)はアフリカに產す。

**ランドルフィアゴムノキ**(Landolphia)〔夾竹桃科〕は熱帶アフリカに產する蔓性の植物にして喬樹に着生す、切解法を施すに便ならざるが故に伐殺法に依るを常とす、此の外に尙ほ「ハンコルニア」(Hancornia speciosa)、「ユルセアラ」(Urceola)、「パラメリア」(Parameria)等あり。



**クサカウチック**はコンゴに產する若干種の草本植物の地下莖より抽出せらる。

前記の如く「カウチック」植物には種々あれども、要するに回歸帶の產にして、中央アメリカ、ブラジル以北の南アメリカ、アジアの南東部、サハラ及びソマーリ以北を除けるアフリカに限られ、採取の方法は切解を主とし、稀には伐採に依れるが、凝塊物は球形、板形、瓢形等に作られて市場に送出せらる。

本貨の需要供給に關しては正鵠を得ること頗る困難なるが、一八九六年の世界の總產出高は六萬噸、一億四千萬圓と概算せられ、一九〇五年の總產額は五萬七千噸にして消費高を國別にすれば合衆國(二、六四七〇)、ドイツ(一、二八〇〇)、イギリス(一、〇〇三〇)、フランス(四一三〇)、エステルライヒ＝ウンガルン(一三二〇)、オランダ(一一八八)、ベルジック(七四八)、イタリア(五八八)と成るなり、主產地はブラジル及びボリビア(五割六分)、西アフリカ(二割)等なりき、一九〇八年の供給は六萬五千噸にして需要は六萬七千噸なりしが一九〇九年の供給は六萬九千噸に昇り需要は六萬八千噸なりき本貨の需要が發展すると同時に天產的「カウチック」の盛盡せられんことを慮り、「カウチック」樹たる「パラゴムノキ」、「アッサムゴムノキ」、「パナマゴムノキ」等の栽培漸く盛にしてマライ半島、セイラン島、ジャバ、メキシコ等に於て好果を得るに至れり。

**グタペルカ**「佩答百兒加」(Gutta-percha)はマラー人の「ガター・ペルチャ」(Gatah-pertchah)にして「パラキアム」、「パイイェナ」等若干種の植物の乳狀汁より採取せ

らるる凝塊物なり、精製を加へたる後、瓶形、管形、等に作りて市場に出だし電氣用、學術用、等に供し、特殊の塗料、被覆材として電纜、電線、等に適用す。

**ゲタノキ**(Palaquium gutta)(赤鐵科)は マライ人の「ゲバン」(Taban)なり、樹高は二十米突内外にしてマラッカ半島の南部、ボルネオ、スマトラ、等に產す、佩答樹中の優品とす、此の外、「パラキアム」屬の植物にボルネオ種(Palaquium borneense)、長葉種(P. oblongifolium)、トロイア種(P. Treubii)、等の數種あり、孰れも喬木にして中には三十五米突に達するもののあり。

**パイエナリーリ**(Payena leeri)も同科の植物にして產地も同一なるが「ゲタ」が眞質なるのみならず、切解を施せば多量の乳汁を與ふと云ふ。

樹汁を採取するの方法に養生取即ち切解法と殺し取即ち伐採法の二途ありて甲者に就きては樹皮に傷を作り、滴出する乳狀汁を容器に受け空氣に曝して凝結せしめ、乙者にありては樹木を伐採して幹枝の要部より樹汁を搾取す、市場に出づるものは圓形又は方形の塊狀を呈するが、優品は黃色にして纖維狀、脈筋狀を現はし、其の他は赤色又は白色を帶ぶ。

本貨の生產高に就きては明確を得ること能はざるも、一八八五—九六年間に於てシンガポールが輸出せし高は三千一百萬斤、五百萬圓に達し、イギリス(二三〇〇萬斤、フランス(二七〇、ドイツ(二四〇、合衆國(二〇〇、等は輸入國中の著しきものなり、而して近年の產額は一萬二千噸內外なるべしと云ふ。



**食料用** 菌類に松茸香蕈等あり、苔蘚類に蕨、薇等あり、果樹に「ココヤシ」(Cocos nucifera)「ナツメヤシ」(Phoenix dactylifera)「サケヤシ」(Caryota urens)「ヅーム」(Doum)(Hyphaena crinita)「バナナ」(Musa paradisiaca)「ベンノキ」(Artocarpus incisa)「チチノキ」(Brosimum utile)「ロルマ」(Sorbus domestica)「ナツメ」(Zizyphus vulgaris)等あり、香辛料に肉桂、丁香、等あり。

**藥料用** 「コカ」(Erythroxylon coca)「ラタンヒア」(Ratanhia)「キナ」(Cinchona)、等あり、樟、龍腦樹、艾納香、等あり。



B. 樹產

**栽培業**(Arboriculture)は喬木なると灌木なるとを問はず、木料、燃料以外の効果を與ふべき樹種を選みて栽培するを目的とす、分かれて**庭樹栽培**(Arboriculture d' ornement)、**農樹栽培**(Arboriculture agricole)及**果樹栽培**(Arboriculture fruitier)の三部を爲せり、從て樹產を庭樹、農樹、果樹の三種に分かてり。

**庭樹** 庭樹(Arbres d' ornement)、即ち庭園樹は之を二種に大別するを得、一は有

道樹(Arbres d' avenue)にして或は綠蔭樹、目除樹、防風樹とも呼ばれ道路公園等に栽植して風致を添へ夏日は太陽の光熱を遮り冬日は暴風を防ぐに供せらる。觀賞樹(Arbres d' agrément)にして種類甚だ多し或は花を賞し葉を愛するあり或は枝樓樹狀を好むありて愛玩の趣旨にも千差萬別あり。

**行道樹** 行道樹に落葉と常綠との二種ありて適用一ならず甲者に公孫樹、楊、柳、櫨、辛夷「ユリノキ」(Liriodendron tulipifera)「スズカケノキ」(Platanus orientalis 及 P. occidentalis)、槭、欅、楓、「ハリエンジュ」(Robinia pseudo acacia)、合歡、椋、「ボダイジュ」(Tilia miqueliana)、七葉樹、梧桐等あり、乙者に赤松、黑松、扁柏、杉、樟、椎等あり。

**觀賞樹** 觀賞樹は花物と葉物とに大別すべきが甲者に玉蘭、木蘭、辛夷「タイサンボク」(Magnolia grandiflora)、躑躅、海棠、梨、薔薇、郁李、桃、櫻、紫薇、蠟梅、山茶、茶樹、金絲桃、瑞香、百日紅、石南、臙脂、石榴、珊瑚、木犀等あり、乙者に杉、檜、蘇鐵、赤松、黑松、五鬚松、落葉松、落松、雲、金松、杉、羅漢柏、側柏、扁柏、柊、公孫樹、紫杉、布袋竹、苦竹、山竹、櫻、棚、蒲葵、柳、柯樹、櫟、橡樹、匝朴、棕櫚、柏、桐、木槿、梅、桐、冬靑、木蘭、木瓜、黃楊木、八角金盤「ヲカレンノキ」(Hedela helix)、「アヲキ」(Aucuba japonica)、「ネズミモチ」(Ligustrum japonicum)等あり。

**農樹** 農樹(Arbres agricoles 又は économiques)に就きては枝葉纖維樹皮樹脂樹汁等を工業の用に供し子實、根等を食料、飲料、藥料等に供す。

**工業用** 工業用に供するものに就きては油脂樹に「ユコヤシ」「アブラヤシ」(Elocis guineansis)「オレイフ」「ラフノキ」(Rhus succedanea)等あり、漆汁樹に「ウルシノキ」(Rhus vernicifera)「ヤマハゼノキ」等あり、紙料樹に楮(Broussonetia papyrifera)、構(B. kazinoki)、三椏(Edgeworthia gardneri)等あり、雜工樹に「コリヤナギ」(Salix multinervis)「キヌヤナギ」「カバヤナギ」「アケビ」(Akebia quinata)「ボンバナジ」(Bombannaje)(Carludovica)、通脫木等あり。

**ココヤシ** 「椰子樹」「椰樹」(Cocos nucifera)〔棕櫚科〕は熱帶に於ける濕潤の地、殊に沿海地に盛に栽培せらる實用の廣きこと農樹の王なりと稱せらる、若き頂芽は食用に供し葉は編かで器物に作り又家根を葺き木材は建築に使用し、根は藥劑に充て、樹幹より採取せらるる汁液を以て椰酒を醸造す、然れども實用の最も富きは果實にあり、果實即ち「ココ」(Coco)は人頭大に過ぐることあるが仁を食料と爲し汁液を飲料に供し、內皮より油を推取し、精を製造の資と爲す、又外皮より纖維を採取して綱紐、敷物、靴拭等を作るに用ふ、而して果實の外皮を去りたるものを「コプラー」(Coprah)と云ひて製油の料に供せらる、南洋殖民の貿易品たり。

**オリーブ** 「阿列布」(Olea europea)〔木犀科〕即ち「オリーブ」(Olive)樹は往古に於て西アジアの特產なりしが二千年來ヨーロッパ洲の南部に栽培せらる、海拔は十米突以上に過ぎる高木にして幹の周圍は二米突を超過することあるも、多くは灌木に仕立てらる、

果實は壓搾の實より稍〻大きく生果は滋味を帶ぶるも醗酵又は酢漬に爲せば眞好の食品と成るを以て廣く各地に植ゑ附けられ又木材も指物用に供し得べきが、主用の點は果實を壓搾して好良の植物性油を製出するにあり「ホレーフ」油は我が國にては俗に「ボルト」油と稱し最も眞の植物油にして、食品を調理用油漬用等に供するのみならず、燈火用、工業用と爲す、殊にソンスのマルセイユ附近に於ては有名の白石鹸を製するに用ふ。

ゴムノキ「護謨樹」にして栽培せらるるものに最も重要なるはパラゴムノキ」(Hevea)にしてアマゾンの「エストラダス」(Estradas)栽培會社に於て栽培を試みたるに始まり、漸次に各地に擴まりたり、メキシコ井に中央アメリカ地方に於ては「パナマゴム」の名稱を以て知らるる「カスチロア」樹の栽培區域の增大しつつあるは事實なり。

「カスチロア」樹栽培地　ペールオルソンセッファー(Pehr Olson-Seffer)調査(一九〇六)

| 地方 | 地積 | 地方 | 地積 |
|---|---|---|---|
| おじあ | 九、一九五〇方粁 | メキシコ | 三、八四四〇方粁 |
| シアム | 四〇五〇 | 中央アメリカ | 五六七〇 |
| ボルネオ | 八一〇 | 西印度 | 六五〇 |
| 印度支那 | 三、七一三〇 | 南あめりか | 五七五〇 |
| 印度 | 三三一〇 | コロンビア | 七三〇 |
| セイロン | 三、四四〇〇 | エクアドル | 一一一〇 |
| あふりか | 一、一四一〇 | ブラジル | 一四三〇 |
| 北あめりか | 四、四七六〇 | ベネズエラ | 一三八〇 |

前表に依れば總計は十五萬四千二百方粁(一方粁は三千二十五坪に當れり。

又フリードリッヒの調査(一九〇七)に從ひ方粁を單位とすれば、ブラジルが領有印度六、五四〇〇、イギリス領マラッカ七、一七〇〇、印度一、〇一〇〇、セイロン六〇七〇乃至七〇八〇、アフリカ一五、一七五及びドイツ領東地八〇〇〇、等を擧ぐるなり。

**染料用**に供するものに「クバ」「バッグバ」(茜科)(Maclura aurantiaca)「ノパル」(Nopal)(Opuntia coccinellifera)「イボタノキ」(水蠟樹)(Olea ibota)等あり。

**食料用**に供するものに蘇鐵(Cycas revoluta)「セゴノキ」「マニホット」「カカオ」「ザタウキン」(Arenga saccharifera)「サタウカエデ」(Acer saccharium)等あり、**香料**に胡椒(Piper nigrum)肉荳蔻(Myristica aromatica)肉桂(Cinnamomum aromaticum)丁香(Eugenia aromatica)等あり、**飲料**に茶「マテ」「コヒー」「カカオ」烟草等あり。

**セゴノキ**「西穀樹」は「サゴ」類(棕櫚科)の數種を合み、熱帶國世界の濕地に栽培せらる、樹幹の內部に於ける澱粉より澱粉性の「セゴ」(西穀米)を製出して食料に供し又菓子を製するに用ふ。

**マニホット**「大薯」(Jatropha manihot)〔大戟科〕はブラジルの原產なり、二乃至三米突の小灌木にして熱帶地方の濕熱を好むも亦三十度の寒暑の下に生育するが、土壤深く而も鬆くして根莖を生ずる地に充分の施肥を行ふを要す、アメリカ、アフリカ、アジ

アの熱地に栽培せられ、殊にブラジル、アンチル、セネガルに重視せらる、塊根は一乃至三瓲の目方を有するが、一方粕の收穫は十萬瓲に達することあり、塊根より澱粉を抽出し之に熱を加へて「タピオカ」(tapioca)に製す。

**カカオ**(Theobroma cacao)〔梧桐科〕は一に「ココア」(cocoa)と云ふ、コロンビアの原産たるべく認められたるが、アメリカ發見の當時、メキシコに於て栽培しつつありしは明にして「チオコレート」の稱はアズテク語より訛傳せしものなりとす、新世界にありては北緯二十二度乃至南緯二十度、舊世界にありては北緯十五度乃至南緯二十一度の地に産するが、ギニア灣のサントメ(São Thomé)島并にエクアドルに盛なりと云ふ、ヨーロッパの消費額は七千萬瓲内外にしてフランスは二千五百萬瓲を輸入せり。

**茶**(Thea sinensis)〔山茶科〕はアッサム地方よりバルマの北部、支那の南西部に亘る地方の原産にして太古の世に漢土に移植せられ爾來各方面に向ひて擴まりたり、常綠的の喬木にして野生には十米突乃至二十米突に達するもののあれども、栽培の結果、多枝多葉の灌木狀を呈せり、變種少なからずして支那種及び印度種を以て著しと爲す、降水多き斜面の土地を要求するの外、氣温の低きには堪ゆるが如し、清國の南東部、大江以南の地、本邦の中部以南、印度の北東部(アッサム、ベンガル、ブタン)、錫蘭、ジャバ、等に盛に栽培せられ、興奮性の葉





を各種の製茶用に供し、總産額は二億六千萬瓲以上に達すと云ふ。

**マテ**(Ilex paraguayensis)〔冬青科〕は一に「パラグアイ」と稱せらる、我が國に産する「イヌツゲ」に近き灌木にしてパラグアイ、ユルグアイ、ブラジル、等に栽培せられ、乾製したる葉を加蒸して興奮性の飲料に供用せらる。

**コヒー**「珈琲」(Coffee)〔茜草科〕に二種あり、其の一を灌木種(C. arabica)とし、其の二を喬木種(C. liberia)とす、甲者はアビシニアの原産にして二米突乃至三米突の高さを有する常綠樹なり、乙者はリベリアの原産にして樹高は十米突乃至十二米突に達す、前者は良質を以て聞え、後者は產量の饒多なるを以て便なりとせらる、年平均氣温二十度の回歸帶は好適の栽培地なるが、三十八度の高温又は六度の低温に堪えざるに非ず、土壤豊に降雨多きも、雨水の滯留せざるを可とす、第十八世期の始めに於てはアラビアは本貨の專賣に當りモカ(Moka)の名は夙に高かりしが、ジャバ、アンチル列島、中央アメリカ、南アメリカ、等に移植せられたり、爾來アラビア、ラマルチニック、セイラン、レウニオン、等に衰へしも、獨ブラジルの栽培には偉大なるものありて世界の總産額一千四五百萬袋(一袋六十瓲)に對し一千萬袋内外を供給し、サンパオロ州のサント

葡萄

藥料用機那

ス港は一大集散地たり。

葡萄(Vitis vinifera)〔葡萄科〕は史前以來の栽培に係りて、原産地の前アジアより地中海諸國に亘れり。温暖にして乾燥せる地を好めるが變種極めて多く白種に「シァッスラ」(Chasselas)、「マドレーヌ」(Madeleine)、白「ミッスカ」(Muscat)等ありて黒種に「キッイザン」(Cuisant)、「フランケンタル」(Frankenthal)、「ピノー」(Pineaux)、「ガメイ」(Gamay)等あり、生食に供するも主として葡萄酒を醸造するに用ひらる。本樹の栽培(Viticulture)は各地に行はれ、フランスを最とし、イタリア、エスパニア、ポルトガル、エステルライヒ＝ウンガルン、アルジェリア、等之に次げり。

藥料用に檳榔(Areca catechu)、蒟醬(Piper betel)、機那、等あり。

キナ「機那」(Chinona)〔茜草科〕にカリサヤ(C. calisaya)「スクシルメ」(C. succirubra)「オバリス」(C. ovalis)、等あり、孰れも南アメリカ、アンデス山地の原産にして漸次に各方面に移植せられしが、現時は衰色を呈して印度、錫蘭、ボリビア、コロンビア、等に振はず、稍、見るべきものあるはジャバに過ぎず、樹皮は貴重なる驅熱劑を供す。

果樹　果樹(Arbres fruitiers)は主として食料用に供すべき果實を與ふるものなるが、運搬の便の開くるに從ひて消費は供給を促して本樹の栽培に發展を來たしたり、果狀に依りて仁果、核果、骨果、漿果、堅果、等に分ち、産地に基づきて温地産、暖地産、熱地産に分つことを得。

温地産は中部ヨーロッパ、我が國の中部、等に屬して梨、苹果、枇杷、榲桲、柿、楊梅、梅、桃、杏、李、櫻桃、葡萄、銀杏、胡桃、扁桃、等あり。

暖地産は地中海の沿岸地を主とし、我が國の南部、支那及アジアの一部、コーカシア、合衆國の南部及カリフォルニア、チレー、ボリビア、ケープ殖民地、マダガスカル、オーストラリア、等に産するものを包括して臭橙、香橙、甘橙、朱藥、枸櫞、佛手柑、檸檬、橘、柑、安石榴、無花果、棗、阿列布「ピニョン」「ノバル」「ナツメヤシ」、蕃荔枝、「アワカッドル」、蒲桃、等あり。

熱地産は熱帶若しくは亞熱帶に産するものにして「ココヤシ」「バンノキ」(Artocarpus incisa)、波羅蜜樹(Artocarpus integrifolia)、五敛子(Averrhoa carambora)、橄欖(Canarium)白橄欖果(Mantifera indica)、蕃荔枝、龍眼「マンゴスタン」「アメリカアンズ」(Mammea americana)、蕃瓜樹(Carica papaya)「グアヤボ」(Psidium)「カイミト」(Chrysophyllum)、

「マンガベイラ」(Harcornia)等あり。

ナツメヤシ

**ナツメヤシ**「棗椰」(Phoenix dactylifera)「棕櫚科」は一に「ベルシアナツメ」と稱せらる、北アフリカ、ベルシア、アラビア、印度、等の乾燥地に栽培せられ樹幹は一米突の底徑を有し、二十米突の高さに達し、良種は毎年六百乃至二千瓩の果實を與ふ、生果又は乾果を食用に供し、北アフリカの住人の一部は主食物として爲せり、菓子に製し、秒糖に代用し、美酒を醸造せるが又樹幹を建築用に供し、葉を蓆及び籃に作る。

バナナ

**バナナ** (Banana) は熱地または暖地に於て栽培せらるる重要植物の一なり、草本なるも高さは六米突乃至七米突に達するものありて一見樹狀を呈せるが、若干種を包括して果實種、纖維種、觀賞種に分かたる、果實種は十六度乃至二十八度の温熱の外に濕氣、冷土を求め強風を厭ひ、三十瓩乃至五十瓩の果實を擔へる果鉾(régime)を與ふと云ふ、結實後枯死するものあれども稚芽を發生して裔續の資を爲せり、果實は成熟の度に從ひて滋養質を異にし青果は少量の窒素分及び澱粉質を含めるも堅くして美味ならず、熟果は甘味少からざれども滋養質に乏し、果實種の主なるものを本種「バコブ」、香蕉とす。

本種 (Musa paradisiaca) は「バナナ」中の最要なるものにして熱地に栽培せられ、一方稍に付き二十瓩乃至の果實を與ふることあり、變種頗る多きも「ラジァー」(Radjah)を以て最とす、果實は太く長く、皮厚く帶綠黄色を呈し甘味少なし、アフリカの土人中には本果を主食品として煮喰するものあり。

**バコブ** (Bacove) (Musa sapientum) は八階乃至十階式の果鉾を與ふるが果實は小形にして黄色を帶び、甘味強し、温度の高きを要せず、栽培に便なり、

**香蕉** (Musa sinensis) は一に甘蕉と云ふ、高さは二米突以下なるに果鉾は二百箇内外の果實を擔ひ、良質の美果は世人の賞用する所なり。

## C. 農産

**農業**(Agrienlture) は廣義に於て凡ての助成的生産を總稱し、禾穀、萱菽、蔬菜、等の栽培は勿論造林、栽樹、養育、養殖、等を包含せるも、狹義に於ては或は子實、葉根、纖維、等の如き特殊の効果を與ふる草本若しくは木本を限りて外張的に耕種するにあり。

農産は吾人の生存上に最も必要なる穀物を始めとし纖維、油料、染料、藥料、牧草、等を供給するが、用途に依り分ちて食料用、藥料用、工業用、養畜用と爲すを得

べし。

食料用に供するものは禾穀に稲、小麥、王蜀黍を始めとして大麥、燕麥、ライムギ、「キビ」(Panicum miliaceum)ウルキビ「稷」モチキビ「黍」稗(Panicum frumentaceum)、粟(Panicum crus galli)アハ、(Staria italica)オホアハ「粱」コアハ「粟」蜀黍(An tropog n sorghum var. vulgaris)、薏苡(Coix lacryma)、蕎麥等あり、豆菽に大豆(Soja hispida)、鵝豆(Faba vulgaris)、豌豆(Pisum sativum)、小豆(Phaseolus mungo var. radiatus)、菜豆(Phaseolus vulgaris)等あり、菌類に椎茸、「アガリック」(Agaric campestris)「トリュフ」(Tuber cibarium)等あり、糖料に甘蔗、甜菜等あり、澱粉料に馬鈴薯、甘藷、大薯等あり、其の他に「ホップ」、「ワニラ」、「タバコ」等あり

| 種名 | 総産額 | 主要産地 | (萬噸を以て單位とす) | (一九〇八年) |
|---|---|---|---|---|
| 玉蜀黍 | 九六五四 | 合衆國(六八六三) | エステルライヒ(四三六) | アルヘンチナ(三四五) |
| 小麥 | 八六八二 | 合衆國(一八八四) | ロシア(一四九六) | フランス(九五四) | 印度(七二六) |
| 米 | 六三〇〇 | 支那(二七九七) | イギリス領印度(一六八七) | ジャバ(四五七) | 日本(四一二) |
| 燕麥 | 五六七六 | ロシア(一三〇八) | 合衆國(一二九四) | (ドイツ(八〇四) |
| ライ麥 | 四三八二 | ロシア(二〇九九) | ドイツ(九六六) | エステルライヒ(三七一) |
| 大麥 | 三二六四 | ロシア(七六六) | 合衆國(四〇八) | ドイツ(三一八) |



稻(Oryza sativa)〔禾本科〕は印度の原産なるべしと認められるが、夙にアジアの南部及び東部に擴まり、アラビア人はヨーロッパの南部に移植し、イギリス人は南カロライナに、ポルトガル人はブラジルに轉栽したり、三大穀物の一たる米を與ふる植物にして人類の三分一を養ひ頗る變種に富めるも大別して粳米と糯米との二種と爲す、熱と潤とを多量に需求するを以て支那、印度等に於ける沿河沿海の平低地に極めて好く適合せしが、栽培の進むに從ひて區域は擴張せられ、イタリアの北緯四十六度に昇り合衆國、清國の三十八度に降り、日本の四十二度に達せるも、南半球にありては回歸帶を出でず、米作は至りて收益多く、一方粳に付五十箇以上を與ふることあるも亦耕種上に注意と勞役とを要すること尠少ならず。

フリードリヒの概算に從へば世界に於ける米の總産額は六千二三百萬噸にして主産地は支那(二七九四)、イギリス領印度(一六八七)を始めとしジャバ(四五七)、日本(四一二)、ベルマ(三一)、フランス領印度支那(一六八)等之に次げり。

小麥「來」(Triticum sativum)〔禾本科〕はメソポタミアの原産に係りて、硬粳、軟

種、被種、裸種、春種、冬種、等の變種頗る多きも、温度稍、高く乾燥の地に產して、麵類、「スムール」、等の製造に適するものと氣温の中和を得たる土に多き麵麭用のものとに大別すべきを知るを以て足れりとす、同歸帶にありては高臺に限れるが、平地にあらば高緯度に達するを得、新世界に於てはフォートシムソン(Fort Ssimpso:)の北緯六十度に達するもニューハウンドランドの四十九度に降り、舊世界にてはノルゲの六十五度、スエリゲの六十度、ウラルの五十八度、等あるも、南界はアフリカに於ては十四度を出づることなし、印度にありては、ベンヂァブ地方、ガンヂスの高谷、等を占むるが、合衆國にありては北東諸州、大湖の西方に多し、南半球にありてはオーストラリア、アルヘンチナ、チレ、等を主產地に擧げざるべからず、世界の年產額は一九〇五―〇七年の平均九千二十二萬噸にして、合衆國は一千八百八十四萬噸を以て首位を占め、ロシアの一千四百九十六萬、フランスの九百五十四萬、印度の七百二十六萬、ウンガルンの四百六十一萬、イタリアの四百五十三萬、アルヘンチナの四百二十三萬、等之に次げり、アルヘンチナは一八七〇年頃には合衆國の麥粉を購買せしに、爾來小麥の作は長足の進歩を爲して現時は輸出國(一九〇九年の輸出額二億一千二百萬圓)として高位を占するに至れり。

**タウモロコシ**「玉蜀黍」「包米」(Zea mais)は一に「ナンバンキビ」と呼ばる、メキシコの原產なるも現時は濕潤にして温度の高き地に廣く栽培せらるる重要禾穀の一なり、世界產額は一九〇七年の九億四千萬頓、一九〇八年の九千六百五十四萬噸にして其の五分の四は合衆國に屬せり、子實を粒のまま燒き又は煮て食するを常とすれども、粉末に爲したる後、麵麭に製し粉汁に作りて消費せり、又家畜の飼養料「アルコール」の釀造料として盛に使用せらる。

**サタウキビ**「甘蔗」(Saccharum officinarum):(禾本科)はベンガルの原產にして支那に渡り、マライ群島、ポリネシアに入り、アフリカ及び地中海の各點を經て回歸帶アメリカに及べり、多年生の草本にして高温を好めるが、生育期には降水の多きを便とすれども成熟の際には稍、乾燥なるを可とす、莖は二米突乃至六米突に達し、淡色、赤色、條紋の三種に大別せらる、ホルトガル人及びエスパニア人の奬勵の下に黑奴の援助あり、て熱帶に於ける殖民地の繁榮を爲せしが、黑奴の禁止あり、甜菜の競爭現はれて第十九世紀の終には頗る不況なりしも、砂糖の需要愈、增加して甘蔗の栽培は外張的發展を來たし最近の狀況は優勢を示すに至れり。

**サタウダイコン**「甜菜」(Beta vulgaris)〔藜科〕の栽培は西紀前四世期乃至六世期に起りしものならんが、二年草にして糖汁に富める根は大小定まらず、形も圓錐、圓塔、紡錘状を呈せり、降雨に不足なき冷地を好めるが、三十乃至四十糎の耕耘と多量の肥料を要求す、始めて糖汁の採取を試みたるは化學者マルグラッフ(Margraff)(一七五七)にして彼の大陸封鎖事件は本種の栽培を促がし、フランスに甜菜糖の製造起りしも、收利と苛税とは相俟ちて本業の發達を阻碍し、奴隷禁止が甘蔗の栽培に打撃を與へたるも甜菜の栽培に影響すること大ならざりき、然るに第十九世期の末葉に及びドイツに於て栽培上内張的發展のありしより、エステルライヒ、ロシア、フランス、等に擴張せられ、遂に今日の盛況を見るに至れり。

ヨーロッパの甜菜産額(一九〇八―〇九)は約六百四十萬噸にしてドイツの二百四萬を第一とし、エステルライヒの百四十萬、ロシアの百二十六萬は次位を占め、其の他にフランス、の七七、ベルジックの二五、オランダの二〇、イタリアの一八、等あり。

**ジャガイモ**「瓜哇薯」「馬鈴薯」(Solanum tuberosum)〔茄科〕はアメリカの原産にして各方面に擴まりしがヨーロッパに於ける栽培に稍見るべきものあるに至りしは第十八世期の終なりき、氣温中和に土質輕鬆にして石英に富める地を好めるが變種極めて多し、塊莖を食料に供し、澱粉に製し「アルコール」を醸製するの原料と爲し又養畜の資と爲す、實に重要農産中に於て屈指のものたり、總産額一億三千萬噸に對しドイツは約四千五百六十萬噸(一九〇七)を以て世界第一の産地たり、之に次げるはロシア、(二八六三)、エステルライヒ＝ウンガルン、(二〇二一)、フランス、(一三九四)、等なり。

**サツマイモ**「甘藷」「番薯」(Ipomea batatas)〔旋花科〕は一に「カライモ」と云ふ、南アメリカの原産にして新舊兩世界の熱地并に暖地に栽培せらるるも若しくは中央アメリカが、肥えて輕き地を好み、乾濕孰れにも偏せざるを可とす、變種頗る多く、白種を優品とす、甘味を帶ぶる塊根を食料に供するの外、澱粉、酒精、等の製造に用ふ、本邦にては中部以南の地に盛に栽培せられ、川越、八里半、琉球、等の變種あり。

**アカナガイモ**(Dioscorea alata)〔薯蕷科〕は四印度の原産なるも、アメリカ并にアフリカの熱帶地方に栽培せらるる、殊に南洋諸島にありては「パンノキ」と共に土人の主食品を爲せり。

**ホップ**「忽布」(Humulus lupulus)〔桑科〕はヨーロッパ就中ドイツ、イギリス、等に於て盛に栽培せらるる蔓性の植物なり、未熟の果實を乾製して「ビール」の醸造に用ふ。

**ワニラ**(Vanilla aromatica)〔蘭科〕は第十六世期の末に於てメキシコより渡來したる蔓性の植物にして小枝に宮めり、溫度高く二十六度乃至二十八度なるを要するも、レウニオン島にては八十四度に過ぎず、栽培の行はるるはメキシコ、コロンビア、ジ



## 提要地理汎論　經濟地理

イヤナ地方等にして、殊にタヒチ島に發達して一九〇〇には七萬四千瓲を輸出せり、果實は莢形を有するが、未だ成熟せざるに當り、之を採取し日光に晒して乾燥せしめたる後、更に陰干に爲し外面に油を濕ぎて市場に出だす、最上の「マニラ」は十六乃至二十糎の長さを有し、外皮は皺を表はし纖筋を呈し香氣馥郁たり、香水香油井に菓子、其他の食品に芳香を附するに用ふ又藥料に供す、近年ドイツの化學製品に「マニリン」なるもの出でて本貨に一撃を加へたり。

**煙草**　タバコ「煙草」(Nicotiana tabacum)(茄科)はメキシコの原産なり、新舊兩世界の熱地及び溫地に栽培せらる草本にして高さは百六十糎に達することあり、有害にして効能の僅少なるのみならず、栽培に制限、禁止等を加ふるに拘らず、消費高は年を逐ひて增加せり、地味佳良にして溫度に求むる所あるも氣溫に對しては生育期間(五六ヶ月)に烈しき低下を厭ふに過ぎず、年産額は約十億瓲にして合衆國、印度、ロシア等は主産地なるがクバ、トルコ、フィリッピンは良質を以て聞ゆ。

**藥料用**　藥料用に供すべき栽培物は、化學製藥品に進歩ありたるが爲め漸く衰微して地方的需求に應ずるものあるのみ、就中人參、薄荷、茴香等稍著し。

**工業用**　工業用纖維には綿を始めとし亞麻、大麻「カラムシ」「ラミー」「ツナソ」「マニラアサ」(Musa abaca)「ニュージーランドアサ」(Phormium tenax)「アゲーブ」(Agave rigida)等



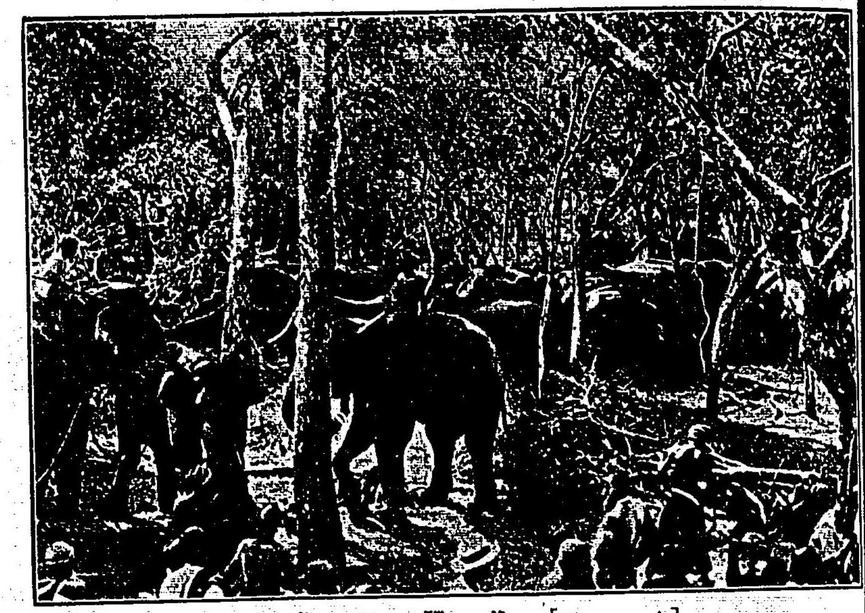
あり、染料には「サフラン」「コマツナギ」等あり、油料に蓖麻、落花生、胡麻等あり。

**ワタ**「棉」(Gossipium)〔錦葵科〕は最要の纖維植物なり、新舊兩世界の熱地若くは暖地に栽培せられ果實の纖維的內皮を採取して織物、糸類等の原料と爲し、子實を製油の料に供す、アメリカ種(G. barbadense)、印度種(G.herbaceum)、木本種(G. arboreum)等の數種あり、甲者は高さ二米突內外の小灌木なるが西印度の原産にしてアメリカ及びアフリカに多し、變種に海島種(Sea-island)あり、纖維長くして堅靭なるを賞す、之に次ぐを高丘種(Upland)とす、乙者は草本式にして印度の原産なり、印度、支那、ギリシア、アルジェリア等に於て栽培せらるるが、纖質は前者に及ばず、丙者は樹高六米突に達するが廣く栽培せられず、印度種はロシアの中央アジアに於て北緯四十四度三十分に昇るもアメリカ種は合衆國にありて三十七度を越ゆることなし、合衆國の「カタンソイル」(Cotton—soil)印度の「レギュル」(regur)の如き乾燥に失することなき亞粘土質の沖積地を好めり、印度種の栽培は甚だ古く東の方、支那に達し、西はペルミア、アナトリアを經てエジプト、ニュビア、エシオピア等に擴まりたるが如し、アンチル列

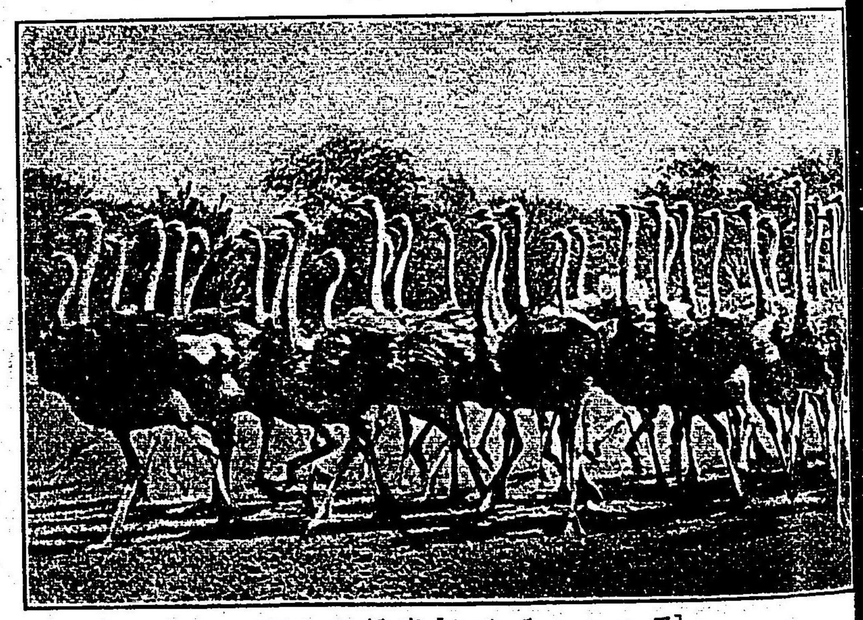
島の土人はアメリカ發見當時に於て既に棉布を用ひ居りしが、メキシコ、ペルー等にも棉樹の栽培は行はれつつありたり、合衆國に移植せしは第十八世期の末葉にして、一七八四年の同國産は七十一梱（百八十斤入）に過ぎざりしが、五千梱（一七九二）、十二萬梱（一八〇二）等を經て目下は一千一百萬梱内外と註せられ、世界の總産額二千餘萬梱に對して首位を占め印度の三百萬、エジプトの百五十萬等は之に次げり。

| 産地 | 産額（噸） | 百分比 | 産地 | 産額（噸） | 百分比 |
|---|---|---|---|---|---|
| アメリカ合衆國 | 二四七、〇三〇 | 六五、九 | メキシコ | 一、九二九五 | 〇、五 |
| イギリス領印度 | 五五、四九七〇 | 一四、八 | ペルー | 一、二四八五 | 〇、三 |
| エジプト | 二九、四一九二 | 七、八 | トルコ | 一、八一六〇 | 〇、五 |
| ロシア | 一四、〇七四〇 | 三、八 | ペルシア | 一、一五七七 | 〇、三 |
| 清國 | 九、七一五六 | 二、六 | 其の他 | 四、五四〇〇 | 一、三 |
| ブラジル | 八、三九九〇 | 二、二 | 總産額（一九〇七年） | 三七四、八二六六 | 一〇〇 |

**アマ**「亞麻」（Linum usitassimum）（亞麻科）は一に「メメゴマ」と云ふ、メソポタミアの原産にして先史時代のものと同一ならざるが如し、變種頗る多く八十を算するが、溫地又は暖地に栽培せられ、皮より纖維を採りて優良なる亞麻布に製し、種子より油を搾



[シャム]　象の馴養



[カリフォルニア]　駝鳥の飼育

大麻

苧麻

黃麻

木藍

紅花藍

採る所「大麻」(Cannavis sativa)〔桑科〕は中央アジアの原産にして夙に支那、ペルシア及埃及の衣として繊維、索類等に製し、種子より乾燥性の油を搾取せしが、目下は各地に栽培せらるゝ様にロシアにては「ハシシ」(Hachisch)に製す。

ボエームニア苧麻」(Boehmeria nivea)及び「ラミー」(ramie)「山苧」(B. tenassissima)は蕁麻科の植物にして光澤に富める繊維を取る、甲者は支那、日本等に栽培せられ、乙者は印度支那、マライ諸島等に栽培せらる。

ツナソ「黄麻」(Corchorus capsularis)〔田麻科〕は一に「カナビキヤ」と云ふ、西洋人のジュート(Jute)にして熱帯の湿潤地殊に印度に於て盛に栽培せらるる事本なり、茎より採取したる繊維は粗布に製し、地袋、綱等に作り、又製紙の原料に供せらる。

コマツナギ「木藍」(Indigofera tinctoria)〔蝶形科〕は印度、錫蘭、ジャワ等に於て盛に栽培せらるゝ事本なり、茎より採取せられ、藍用甚だ多くして藍類は五百萬瓩以上に達すと云ふ。

サフラン(Safran)「紅木藍」「番紅花」(Cocus sativus)〔鳶尾科〕はヨーロッパ、フランス、ヨー





大麻

苧麻

黃麻

木藍

紅花藍

採る所「大麻」(Cannavis sativa)〔桑科〕は中央アジアの原産にして夙に支那、ペルシア及埃及の衣として繊維、索類等に製し、種子より乾燥性の油を搾取せしが、目下は各地に栽培せらるゝ様にロシアにては「ハシシ」(Hachisch)に製す。

ボエームニア苧麻」(Boehmeria nivea)及び「ラミー」(ramie)「山苧」(B. tenassissima)は蕁麻科の植物にして光澤に富める繊維を取る、甲者は支那、日本等に栽培せられ、乙者は印度支那、マライ諸島等に栽培せらる。

ツナソ「黄麻」(Corchorus capsularis)〔田麻科〕は一に「カナビキヤ」と云ふ、西洋人のジュート(Jute)にして熱帯の湿潤地殊に印度に於て盛に栽培せらるる事本なり、茎より採取したる繊維は粗布に製し、地袋、綱等に作り、又製紙の原料に供せらる。

コマツナギ「木藍」(Indigofera tinctoria)〔蝶形科〕は印度、錫蘭、ジャワ等に於て盛に栽培せらるゝ事本なり、茎より採取せられ、藍用甚だ多くして藍類は五百萬瓩以上に達すと云ふ。

サフラン(Safran)「紅木藍」「番紅花」(Cocus sativus)〔鳶尾科〕はヨーロッパ、フランス、ヨー